ジョージ・ギッシング 作

下宿人

――お嬢さまの行儀見習い――

松岡 光治 訳

アティーナ・プレス

George Gissing

The Paying Guest

London: Cassell, 1895

目次

第一章　郊外の下宿……1
第二章　お嬢さまの恋人……19
第三章　楽しい交友関係？……35
第四章　三角関係のもつれ……48
第五章　窮余の一策……63
第六章　女心と秋の空……76
第七章　破れ鍋に綴じ蓋……95
第八章　焼け棒杭に火がつく……104
第九章　災い転じて福となす……119
注……138
あとがき……145

ギッシングが『下宿人』の執筆に取りかかる数ヶ月前（1895 年 5 月 16 日）に撮影された中産階級家庭の典型的な客間の写真

第一章　郊外の下宿

新聞広告を見て相談を持ちかけたのは夫のマムフォードであった。妻は寝耳に水といった表情を浮かべて彼の方を見た。

「えっ？・・・そんな必要あって？　私たち、ぜいたくなんか・・・」

「いや、いや！　そんなんじゃない。こういうのも、君を楽しくさせてくれる一案になるんじゃないかって、ふと思っただけだよ。君も、ちょっと寂しいなって感じることが、日に何度かあるはずだし、家のスペースも十分・・・」

エメリンは真剣に考えてみたが、若くても思慮深い女性だったので、自分の考えをすべて口に出すようなことはしなかった。たしかに今の家賃はきつかったし、クラレンスの通勤の定期券代も馬鹿にならない。しかし、二人はそうした点に目をつぶってまでも、サットン(1)のきれいな空気の方を優先してきたのだ。ここはマムフォードの妻子にとって非常に良い場所で、実際にロンドンから引っ越してきてからというもの、妻も子も健康状態がすごく良くなっていた。さらに、ロンドンの友人たちから遠ざかったことで、節約するにも好都合だった。招待を断りやすくなったし、招待のお返しをする必要もさほどなくなったからである。また、家が遠くなったことは、公共の娯楽――たびたび社交のためだけに強いられる出費――を控えるのに、ま

たとない口実になった。現在の家はとても広いし、庭も快適である。おそらくクラレンスは自分の妻が話し相手を持つことを心の底から願っていたのだろう。とはいえ、この新聞広告には同時に別の意味で彼の興味をそそるものがあったのかもしれない。

若いレディー。立派な親類縁者がいて、ちゃんとした（リスペクタブル）家庭での同居を希望。ロンドン郊外、チャリング・クロス(2)から十五マイル以内。申し分のない身元保証書を提示することが可能。重要なのは家賃ではなく、居心地の良さと楽しい交友関係。まかない付きの下宿は不可。――問合先はロンドン、イースト・セントラル、フェンチャーチ・ストリート、(3)ヒギンズ兄弟商会気付、ルイーズ。

妻は何度も何度も新聞広告を読んだ。

「下宿人を置いてるなんて噂されちゃ、困るわよ、あなた」

「そんな心配はないよ。これは明らかに裕福な人だし、最近じゃ、よくある類の契約だぜ。いわゆる高級下宿人（ペイイング・ゲスト）ってやつさ。もちろん、下宿人の外見が君の好みじゃないようだったら、受け入れようなんて夢にも思わんがね」

「でもね」と、エメリンが不審そうに尋ねた。「私たちって資格があるかしら？『立派な親類縁者がいて』ってあるんだけど・・・」

「驚いたね！　恥じることなんか全然ないだろ？」

「もちろん、そうよ、クラレンス。でも・・・『楽しい交友関係』ってのもあるし、それについてはどう？」

「君と一緒にいると、とっても楽しいよ」と、マムフォードは気品を感じさせるように答えた。「それにフェンティマン夫妻もおられるし・・・」

これは二人がサットンで親しくしている唯一の家族である。立派な人たちで、少し生真面目すぎて、群を抜いて羽振りがいいわけでもないが、人前に出せる（プレゼンタブル）夫婦ではあった。

「心配なのは・・・」とエメリンはつぶやき、そこで急に言葉を切った。「あなたが言うように」と、彼女はほどなく話を続けた。「これはとても暮らし向きのいい人よ。『重要なのは家賃ではない』っていうし・・・」

「じゃ、いいかい、君・・・短い手紙なら出して悪いことはあるまい。はっきりした言質を与えないような、そんな手紙さ。ぼくが書こうかね、それとも君が？」

手紙の文面は一緒に考え、エメリンが下書きを清書した。彼女はとても字がうまく、句読点ならお手の物だった。お上品な人の目を意識して注意深く考え抜かれた手紙で、書き手の身分については最低必要限の細部しか書いておらず、家賃については後日相談ということになった。

「みんなに説明するのは簡単だよ」と、マムフォードは手紙の投函から戻ると満足そうに言った。「君に話し相手が必要だってことは、ね。たしかに必要だよ。しばらく一緒に滞在してくれる女の友だち・・・そういうふうに言うべきかな」

一週間たったが、返事は来なかった。マムフォードは気にしていないふりをしていたが、エメリンにはその態度に新たな不安が読み取れた。

「包み隠さずに話してちょうだい、あなた」と、彼女はある晩せっつくように言った。「私たちの生活って、そんなに・・・」

彼は腹蔵なく答えた。冗談ではすまないほど、そんなに不安になる必要はまったくない。借金なんかしないで暮らせる収入が十分あるし、今後も常にそう思えるだけの理由がある。だけど、いつも年度末がかなり黒字であれば、それはそれで一安心ということになる。もう三五歳で――ちゃんと出世もしている。男たるもの、単なる生活の保障だけでなく、将来の備えもしなければならない――とか何とか、マムフォードは答えた。

「他の広告にあたってみましょうか？」

「ああ、ダメだよ。ぼくの目を特に引いたのは、これだけなんだから」

翌朝になって「ルイーズ・E・デリック」と署名された一通の手紙が届いた。手紙の主によると、広告に返事をくれた二百通ほどを読み比べ、よく考えるのに手間取ってしまったようである。「ホントに愚かでしたわ。全部を記憶することなんかできないんですもの。でも、あなた様の返事は読んですぐ気に入りました。それで、イの一番に返事を書いてる次第です。面談に行かせていただけますか？　お手紙よりずっとうまく自分のことを話すことができると思います。明日はどうでしょうか、午後などは？　よろしいかどうか、電報(4)を打ってください。タルス・ヒル、(5)エミリア・ロード、コーバーク・ロッジ(6)宛てに」

この手紙について考えていたマムフォードはいつもの汽車に乗り遅れてしまった。厳密に言えば、手紙は彼が期待していた類のものではなかったし、エメリンも同じ疑念を抱いていた。筆跡はまずまずに思えたし、綴りの間違いもなかった。しかし――洗練されたところは？　この若い女性の手紙の書き方もまた非常に無頓着なものだった。それから、家庭の状況についてはまったく何も記されていない。タルス・ヒルのコーバーク・ロッジ、問題なく上品な場所だが――

「会ってみても悪くはないわね」と、エメリンがようやく切り出した。「電報を打ってよ、クラレンス。実のところ、おあつらえ向きの娘さんかもしれないわ。すごく上品な方を想定して

たんで、むしろホッとしてるのよ。結局、ねえ、あなたは・・・その、ビジネスに携わって・・・」

「たしかに。それに、この人もビジネスに関係した家柄みたいだ。ただ、もう少しレディーらしい書き方だったらいいんだけど・・・」

エメリンは自宅を整理整頓し、客間を花でいっぱいにしてから、貸す予定の部屋をできるだけ魅力的にし、昼食のあとは長い時間をかけて自分の容姿もしっかりと整えた。彼女はスラっとした美しい三十前の女性で、顔の色つやはいいが少し青白く、髪はやや赤褐色ぎみで、正直そうな目をしていた。流行の小物類も、彼女のちょっとした虚栄心も、その根本に卑しい性格が見られるわけではなかった。他人の規律ただしい家庭生活を嫉妬することなく賞賛し、自分でも大事にしていた。収入を増やしたいという夫の願望にはかなり動揺させられたが、今日の面談が重要であることは十二分に理解していたので、そわそわしながらも精魂を傾けて成功裏に終わらせる決意であった――ただし、デリック嬢が一緒に暮らして行けそうな人だと分かればの話であるが。

四時頃に訪問者の呼び鈴が鳴り響いた。寝室の窓からエメリンはデリック嬢が近づいてくるのを見ていた。駅からの距離は歩いて五分たらずだったので、訪問者は当然ながら徒歩でやって来た。日焼けしていたが、かなり目鼻立ちの整った、ずいぶん衣装が凝ったお嬢さまである。ふるまいは手紙の書き方と一致していて、自由気ままな歩き方、顔をぐいっと上に向け、両肩をいからせたものだった。「ああ、悪趣味な方ではないと思うんだけど」とエメリンはつぶや

いた。「あんな歩き方、イヤだわ・・・ホントに。それに、あの取っ手の馬鹿でかい日傘ときたら！」

「マムフォード夫人は御在宅(アット・ホーム)かしら？」という澄んだ素直な声が階段の上にいたエメリンに聞こえた。よし、/h/音(7)がちゃんと聞き取れた・・・神様、感謝いたします！

客間に入るとすぐ、彼女はデリック嬢が自分と同じように緊張している様子だったので驚いた。お嬢さまの顔は紅潮していて、「はじめまして」と言う時に息がつまりそうだった。

「この家を見つけるのは造作なかったでしょうね。汽車のこと、書いてくだされば、駅までお迎えに行きましたのに。あっ、でも・・・私ったら、なんてお馬鹿さんなんでしょ！・・・あなたのこと、分からなかったでしょうにね」

デリック嬢は笑って、突然リラックスした感じになった。

「まあ、そんなことおっしゃるなんて」と、彼女は声をあげて陽気になった。「まさに同じこと、あたしも時たま言うんですよ。それに、めっちゃ嬉しいですわ、あなたが・・・怒らないでくださいね・・・つまり、あなたが怖い人じゃなくって」

二人は一緒になって笑った。エメリンは、お嬢さまが受入れ可能なレディーかもしれないと分かると、喜びを抑えることができなかった。衣装に欠点がいくつかあるのは否定できない。お金の使い方を誤った部分もある。とはいえ、目にさわるような、悪趣味などぎつさなどはない。そして、話し方については、厳密には洗練されていると言えないが、卑しい生まれを示す

ような欠点もない。それから、口もとに何か魅力的とは言えないようなものが見られはしたが、それでも気だてのよい女性に見えた。

「サットンは全然ご存知ないのでは?」

「以前こちらに来たことはありません。でも、雰囲気は気に入りましたよ。この家についてもそうです。このあたりには、お知り合いがたくさんおられるんでしょうね、マムフォード夫人?」

「えーっと・・・いえ、懇意にしてるのは一家族だけです。お友だちはロンドンに住んでおりますのよ。もちろん、こちらにはよく出てきてくださいます。ご存知かどうか分かりませんが、ウェスト・ケンジントン[8]のカービー・シンプソン夫妻とか、ハイゲート[9]のホリングズ夫人とか・・・」

デリック嬢は目を伏せて考え込んでいるように見えたが、急に話し始めた。

「あたしには、お話しできるような知り合いがいませんの。申し上げておく必要があるんですが、こっちには母が一緒に来てるんです。駅で待ってくれてます。あたしが戻れば、こっちまで会いに来てくれるでしょう。驚かれましたか? ところで、お伝えしておかないといけないんですが、あたしは家族の者たちとうまくやってけませんので、家を出たいと思ってます。母とはケンカばっかりしてまして、近ごろは最悪なんです。説明しておきますと、母は再婚してまして、ヒギンズ氏には・・・あたしの名前でなくて嬉しいんですけど・・・最初の結婚で

できた自分の娘がいます。あたしたちは・・・あたしとヒギンズ嬢ですが・・・お互いに相手が我慢できないんです。いつか、こちらの家に住めるようになったら、もっとお話しできると思いますわ。ヒギンズ氏はめっちゃ金持ちで、あたしに対して不親切ということは一切ありません。ほしいものは何でもくれるんですが、あたしを家から追い出すことができれば、間違いなく喜ぶことでしょうね。さらに不幸なことに、あたしには自分自身のお金が全然ないんです。ところで、あたしと母が一番いいと思ったのは、あたしが最初にひとりでうかがうことでした。それは・・・ちょっと、その・・・お互いに気が合いそうかどうか、確かめてみるためなんですよ。そのあとで母が来て、あたしについて言いたいことをすべて言うことになってるんです。どうせろくなことは言わないって分かってますがね。あたしは相当ヤバい性格だって言われてるんですよ、みんなから。そんなふうに自分じゃ思ってませんし、あなたのような方であれば、ケンカすることもないはずです。だって、めっちゃ素敵な方に見えますもの。でもね、実家じゃうまくやってけません。だから、あたしたち、別々に暮らした方がいいんです。あたし、今ちょうど二二歳で・・・もっと年上に見えますかしら？　働くための知識を何か身につけたわけじゃありませんし、そんな必要もないと思ってます」

「お付き合いをたくさんしてみたいんですか？」と、マムフォード夫人は質問したが、彼女はいろんなことを考えていた。「それとも、数名の本当に立派な人たちの方がいいんでしょうか？　あなたがどんな方たちとの交際を望んでおられるのか、まだよく分からないんです。有

閑階級の人たちか、それとも・・・」

その選択肢をエメリンはあいまいにしておいた。お嬢さまはしばらくの間また考え込んでいたが、いきなり意思表示してきた。

「あなたのお友だちは、あたしがまさに知り合いになりたい方たちで、それは間違いありません。とにかく、試してみたいと思ってます。重要なのは今すぐ実家を出て、どういう状況になるか、それを確かめてみることなんです」

二人はお互いに笑った。エメリンはもう少し話をしてから家を見てまわることを提案したが、デリック嬢は見るものすべてを声高に賞賛してくれた。

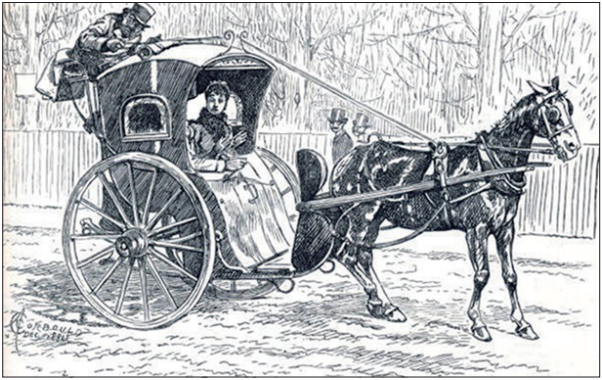
「あなたの良いところは」と、二階の寝室の窓から下の庭を眺めていたとき、お嬢さまが急に声をあげた。「気取ったところが・・・何を言いたいか、お分かりでしょ。あたしにとっては、みんな下品で無知か、あるいは高飛車で、横柄で、とても一緒にうまくやって行けないか、そのどっちかに見えます。あなたはまさに、あたしが見つけたかった人です。それじゃあ、今から母を呼んできますから、会ってもらいますね」

このまずいやり方にエメリンは異を唱えた。お二人、ご一緒にいらして、午後のティーでもいかがですか？　よろしければ、お母さまが話したいことをおっしゃってる間は、庭に出ておられるといいですよ。これに同意したデリック嬢は、ルンルン気分でサットン駅へと向かった。エメリンが十五分も待たないうちに、辻馬車(ハンサム)[10]が停まって、ヒギンズ夫人が家の正面をじっ

くり検分してから、娘に続いて細道を上がってきた。

でっぷりした年輩の婦人を見た瞬間に、マムフォード夫人は状況がすべて把握できた。ルイーズ・デリックは文明化への途上に――より良いものを意識的に求めて奮闘しているような段階に――いたのである。ヒギンズ夫人は、羽振りはいいが、ひとりよがりの悪趣味を絵に描いたような人物だった。顔色については娘よりもずっと化粧で白かったが、きめが粗いながらもまだ端正な――昔は酪農場で働いていた若い美少女だったのではないかと思えるような――顔立ちを保持していた。その顔立ちには情け深い性質と同時に怒りっぽい傾向が見て取れた。彼女は途方もない着飾りようで、重量感のある高価な装身具も加わって、息切れと汗に苦しみながらやって来たが、この家の女主人に注意を払う前に、じっと目を近づけて部屋を点検していた。

「マムフォード夫人」と娘の方が言った。「これが



あたしの母です。ママ、こちらがマムフォード夫人ですよ。それじゃ、お願いだから、二人で話をしてる間は、どこか別の場所に行かせてちょうだい」

「ああ、それがいいわ、そうしておくれ」と、ヒギンズ夫人が声を大にして言った。「まあ、なんであづいんでしょ！　庭にでも出てなさい、ルイーズ。小さくても立派なおだくですわね、マムフォード夫人。あなたにルイーズもぞっこんみたいですわ。簡単に人になつくような子じゃないんですが。もちろん、満足のいくような身元保証書はいただけますわよね？　何事もビジネスライクにやりたいって、いつもそう思ってますのよ。たんな様は、シティー(11)にお勤めと聞いてますが、それなら宅のイギンズの友だちを何人か知っておられることでしょうね。ええ、ええ、よろしければ、一杯いただきます。駅で一杯いただいたばっかりですが、やけに喉がかわく天気ですからね、今日は。それで、ルイーズのことですが、どう思われますか？　うまくやって行けないって思われるようなら、正直に言ってくださいな」

「いえいえ、実際、うまくやって行けそうですわ、ヒギンズ夫人」

「それについちゃ、恐悦至極に存じます。みんながみんな、ルイーズとうまくやって行けるわけじゃありませんもの。たぶん、あの子の義理の父とわたくしのことは、しこたま話したんでしょうね。あの子に文句を言われる筋合いは一切ございませんのよ。だって、待遇についちゃ・・・」

「いえ、お二人ともそれはもう親切だって、そう言っておられましたよ」と、マムフォード

夫人が口を差しはさんだ。

「もちろん、そうするようにしてますわ。それに、イギンズ氏は気前がよくって、何でもポンポンと与えてしまうんですのよ。信じられんかもしれませんが、あの子にプレゼントする時は、五ポンド紙幣が六ペンス硬貨になっちゃうんですから。ねえ、ラムフォード夫人・・・いや、マムフォードでしたっけ？・・・わたくし、とっても若い時に結婚しまして・・・十八そこそこでした。その二年後の結婚記念日でしたか、デリック氏が急に亡くなりまして、そのあとイギンズ氏が現われたんです。もちろん、しかるべき期間は空けましたわよ。一つだけ言えるのは、でいしゅを二回も持ったことのある女で、わたくしほどじあわせだった者などいないってことです。わたくしには大きくなった息子が二人おりますのよ。めちゃくちゃ元気にやってくれてます。このルイーズの厄介な問題さえなけりゃ・・・」

ここでヒギンズ夫人は顔を拭くために言葉を切った。「たぶん、あの子はもう話したでしょうが、イギンズ氏は初めて会った時は男やもめでして、最初の結婚でできた娘が一人おりました。ルイーズよりも年上なんです。かわいそうに、その子の出産時に母親は亡くなりましてね。あなたには話しておいても構わんと思うんですが、その子は二六歳ぐらいで、美貌の点ではルイーズにとても及びません。イギンズ氏は、親切そのものなんですけど、わたくしの娘と自分の娘との仲たがいについちゃ、まあ、自分の娘の肩をもっても、そりゃ当然ですよ。実は、背後にはもっと事情があるんですけど、たぶん見当がつきますわよね。ですが、あなたの関心が

ないことで、わずらわせることはいたしません。まあ、そういった状況でしょうか」

急いで計算してみたところ、ヒギンズ夫人はせいぜい四十歳ぐらいと分かって、エメリンは一驚を喫した。この婦人は少なくとも十歳は老けて見えるが、好き放題もはなはだしい生活を送ってきたに違いない。こういう望ましくない両親がいたということで、エメリンのルイーズに対する評価が影響を受けたことは言うまでもない。ルイーズの欠点の原因がどこにあるか、前よりはっきりと分かり始めた。確実なことが一つだけある。ルイーズが身内の者との決別を望んでいるという事実がなければ、彼女を受け入れることなど、とても考えられない。ヒギンズ夫人が予期せぬ時に突然サットンにやって来るなんて――とんでもない、考えただけでゾッとする。

「ヒギンズ夫人、お嬢さまはすべて私に任せるべきだ、そう思っておられるんでしょうか？」

「まあ、ラムフォード夫人、そんなこと、わたくしが望んだりするもんですか。あの子は我か家を出るって自分勝手に決めちゃったんです。ですから、わたくしにできることと言えば、ちゃんとした人たちと娘が知り合いになれるように見届けることだけですわ。あなた方がそうした人たちであることは確信しておりますが、もちろん身元保証書はいただけますわよね？」

その言葉を聞いてエメリンの顔は青白くなった。この問題を先に進めては困ったことになると思った矢先に、ヒギンズ夫人がさらに尋ねてきた。

「それから、全部ひっくるめて、お家賃はいかほどになるでしょうか？」

このとき女中が紅茶のセットを持って客間に入ってきたので、エメリンはとても狼狽し、住宅地としてのサットンの利点をいろいろと早口で述べ立てた。そして、ドアが再び閉まるまで、訪問客にはひと言も口出しさせなかった。それから、きっぱりした態度で、家賃が週に三ギニー(12)になることを伝えた。それは彼女とクラレンスが要求することに決めていた額より半ギニーほど高かった。ヒギンズ夫人は顔をしかめるだろうと思っていたが、そうした様子はまったくなく、至極妥当な額と思っているように見えた。そこで、お嬢さまは洗濯女から請求される代金ももちろん払うことになります、とエメリンは続けて言った。これに対してもヒギンズ夫人は即座に了承してくれた。

「一年で百六十ポンドか！」と、エメリン

はひとり心の中でつぶやいた。あーあ、残念！　もう少し要求しようと思えばできたであろう。身元保証書の問題は、二人の名前を出せば、切り抜けられるかもしれない。ブラックヒース(13)に住んでいる既婚の姉と、それからシティーの商社でまずまずの地位につき、ウェスト・ケンジントンの結構ちゃんとした地区に住まいがあるクラレンスの一番の親友ターリング氏がいるではないか。しかし、彼女は急に不安になり、夫が帰宅して鉢合わせになることを恐れた。

面談は三十分も長引いてしまった。エメリンは身元保証書を提示し、お返しに同じものをヒギンズ夫人に求めた。これには相手もびっくり仰天したようだった。まあ、わたくしのたんな様はフェンチャーチ・ストリートのイギンズ商会ですのよ。あら、ただの形式です――私の主人を満足させるためですわ、とエメリンはあわてて付け加えた。ということで、ヒギンズ夫人は即座にシティーにある二つの商会の名前をあげた。これで当座の交渉は終了した。

客間に呼ばれたルイーズは待つことにかなり疲れたような顔をしていた。

「置いていただけるのは、いつからでしょうか、マムフォード夫人？　あたし、すっかり決めましたわ、こちらに来ることに」

「一日か二日は待っていただかなくてはなりませんよ、ミス・デリック・・・」

「身元保証書の件よ、おまえ」と、ヒギンズ夫人がさえぎって言った。

「まあ、アホらしい！　問題なんかないじゃないの。誰だって分かるわ」

「そらまた始まった！　アタシが話してるっていうのに、いつも突然さえぎってばっかり。

そんなふるまい、ママは許しませんよ。マムフォード夫人がどう思われるかしら。しっかりと警告をしておきましたからね、マムフォード夫人には・・・」

二人は数分間ほど口論していたので、エメリンは気が重くなってしまい、上品な決まり文句で仲裁に入ることをしなかった。とうとう二人が帰ってくれたので、追っ払うことができた彼女は、溜息まじりに感謝の言葉を発した。今日の午後に他の訪問客がなかったのは不幸中の幸いである。

「クラレンス、まったくもって問題外だったわ」と言いながら、エメリンは夫の帰りを迎えた。「お嬢さまの方はなんとか我慢できるけど、ああ、母親の方がね。あのおぞましさといったら！・・・週三ギニーだって！　考えただけで泣きたくなるわ」

翌朝の最初の郵便配達でルイーズからの手紙が届いた。訴えかけるような、同情を禁じ得ないような書き方だった。「母に我慢できないのは分かってますが、どうか、どうか、あたしを置いてください。サットンも、あなたの家も、めっちゃ気に入りました。あなたのことも大好きです。実家の者は誰も会いに来させないって、命にかけて約束します。だから、怖がらないでください。もちろん、置いてもらわなくても、そうしてくれる方が他にもいます。二百人の中から選ぶことができますけど、それよりはお宅に行きたいんです。どうか手紙を書いて、来てもいいって言ってください。あなたの前で母とケンカしてしまい、めっちゃ申し訳ないと思ってます。ほしい物さえ手に入れば、あたしは腹を立てたりする人間じゃないんです」とか何

とか、同じような趣旨のことがたくさん書かれていた。

「ぜひとも置いてあげよう」とマムフォードは言い放った。「いまいましい連中が近寄らないんなら、いいんじゃないか？・・・ちゃんと/h/音が聞こえたのは間違いないんだろ？」

「ええ、間違いないわ。かなり良い学校に通ってたんだと思うわ。それに、たぶん、ドレスや帽子も買い替えるように説得できるはずよ」

「もちろん君ならできるさ。実際、お嬢さまを置いてやるのは、ほとんど義務のような・・・そんな気がしないかね？」

そういうふうに問題が解決したので、マムフォードは汽車に間に合うように楽しげに駆け出して行った。

デリック嬢がやって来たのは三日後のことで、半トンはあろうかと思える荷物を持ってきた。彼女は、はずむ足取りで戸口の階段を駆け上がり、玄関の広間で出迎えたマムフォード夫人に熱烈なキスをした。

「お話したいことが山ほどあるの！　ヒギンズ氏は生活を始めるにあたって二十ポンドもくれました――つまり、あたしだけが使えるようにって。もちろん他にもいろいろ払ってくれるはずよ。めっちゃ嬉しいわ、ここに来れて！　辻馬車の料金、払ってくださいな。小銭がないんですの」

この数時間前にヒギンズ夫人から手紙が届いていた。とてもありえないほど書体も綴りも素

晴らしかった。

「親愛なるマムフォード夫人」と書かれていた。「Lは今日の午前中にうかがうでしょう。後悔なさらないことを願ってます。言うつもりだったんですが、忘れてたことが一つだけありますので、今それを書いておきます。万一、お知り合いの殿方のどなたか、Lに好意を寄せてくださり、それが何かに発展するようなことがあれば、わたくしとH氏は二人とも感謝感激です。きっとH氏も娘に気前よくふるまってくれることでしょう。さらに言えば、あなたとM氏に対する感謝の念についても、まったく物惜しみすることなく、心から喜んで示してくれることでしょう――あらあらかしこ、スーザン・H・ヒギンズ」

第二章　お嬢さまの恋人

マムフォード夫妻の家の呼び名である「ラニミード」(14)は、サットンの住民に自分たちは田園生活を送っているのだと確信させるような、そうした木陰におおわれた道路沿いの小さな区画の土地に建てられていた。これは正面が左右対称のレンガ造りの家(15)で、木材と化粧漆喰(しっくい)の張り出し玄関がついている。玄関の片方が出窓で反対側が普通の平たい窓になっており、郊外の人たちの目には心地よいコントラストとして映っていた。小さな前庭には無塗装の木板で隙

間なく組まれたフェンスがあった。家の裏手は花壇で縁どられた長細い芝生になっていて、その奥では立派なトチノキが影を落としている。

エメリンは丘陵地(ダウンズ)[16]が近くて楽しいことをよく話していた。その話を聞いた人であれば誰でも、彼女がそよ風の吹く高原地を越えてバンステッド[17]やエプソム[18]まで、さらにはもっと遠くまで出かけていると想像したかもしれない。だが、実を言えば、ロンドン近郊のブリクストン[19]の住人のように、彼女が本物の田舎を見たことはなかった。自宅の窓からは近隣の家々と庭の樹木の葉っぱだけしか見えないのだ。時おり彼女はブライトン街道(ロード)[20]のアスファルト舗道――子守女の遊歩道と呼ばれている道――に沿って、ウェストミンスター・ブリッジ[21]から十二マイルであることを示す標石まで散歩することがあった。事実、ここまで来ると、丘陵地の空気を吸うことはできたものの、両側の大邸宅に視界をさえぎられ、むしろロンドンが正確な距離以上にずっと近く感じられた。友人や隣人と同じように、エメリンはサットンの生活を楽しんでいたが、それはこの場所が大都市の非常に体裁のよい地域の一つでありながら、空気はずっときれいだったからに他ならない。すべてが完全な田舎であれば、彼女は意気消沈してしまっていただろう。

この点でデリック嬢は気の合う話し相手であることが判明した。ルイーズは田舎が好きなふりなどしなかった。手の込んだ園芸が実を結んでいて、物静かな郊外で生活できるという理由で、いわゆる「木陰のアスファルト」を好んでいたにすぎない。

「まさにこんな家、あたしも持てればいいんですが」と、お嬢さまはラニミードに着いた最初の日の夕方、外の庭で大家さん夫婦と談笑しながら言った。「十分に広いですからね。もちろん、子だくさんでなければ、ですが。多いとうんざりするでしょ、きっと」と、彼女は悪びれた様子もなく言った。「それに、都会にも簡単に行けますからね。定期券はいかほどかしら、マムフォードさん？　あらまあ！　大したことないですね。ぜひ一つ手に入れようかな、あたしも」

「じゃあ、頻繁に行きたいの？」と、エメリンは責任が新たに増えそうなことについて考えながら尋ねた。

「まあ！　毎日ってわけじゃないわ、もちろん。でも、定期券があれば、毎回わずらわしい思いをしなくていいし、都会に行きたい時は、ねえ、いつでも行けるって気になれるじゃないですか」

これまでは夕食時に正装する習慣がマムフォード夫妻にはなかったが、今晩は明らかにデリック嬢を満足させ

るためだけに正装していた。お嬢さまは女主人よりずっと豪華なドレス姿で現われた。あとで、内々に、彼女はエメリンの注意を自分の衣装に引きつけ、率直な意見を求めた。

「とっても素敵よ、ホントに」と、この既婚女性は温厚な笑みを浮かべてつぶやいた。「ただ、ちょっと・・・」

「ほらほら、何を言おうとしてるか分かるわ。派手すぎるってお思いね。いいですか、どう思うか正直に話してほしいんです・・・どんなことでも。腹を立てたりしませんから。そんなに愚かじゃありませんわ、あたし。ここに来たのは、ありとあらゆることを学ぶためなんです。明日は一緒に、あたしのドレスをすべてチェックしていただきますよ。気に入らないものは全部処分しますからね。何が上品で何がそうでないか、今まで誰も教えてくれなかったんですよ。あたし、できればなりたいんです・・・まあ、その、何のことかお分かりでしょ」

「でも、ねえ、よく分からないことがあるんだけど。単刀直入に話してほしいとおっしゃるから、そうしますね。どうしてまた、知り合いになりたいと思うような人たちと、これまでお友だちになれなかったの？　まるで貧しい暮らしだったみたいだわ」

「家に連れてくるのが恥ずかしいのに、どうして上品な人たちと仲よくなれると言うんですか？　あたしの一番の親友はかなり貧乏です・・・一緒に学校に行ってた女の子たちのことですが。あたしなんかよりずっと良い教育を受けてるものの、自分で生活費をかせいでるんで、最近はあんまり会うことができないんです。彼女たちもきっと会いたいなんて思ってませんよ。

あたしがどう思われてるか、それが分かればいいんですがね。お下品って言われてるでしょうね・・・あたしが話してるような、そんな上品な人たちからは。さあ、おっしゃってくださいな、マムフォード夫人、あたしって下品でしょうか、マジで？」

「まあ、ミス・デリック・・・」と、エメリンは異を唱えようとしたが、すぐにさえぎられた。

「イヤ！　そんなふうに呼ばないで。よければルイーズって、あるいはルーって呼んで、思ったことを正直に言ってください。そうです、マジでめっちゃ下品なんです、あたしって。ですが、他に何が期待できて？　母を見てくださいな。あなたが義理の父のヒギンズ氏に会ったりなんかしたら、ああ！　あたしが犯した最大の過ちは学校をすぐやめちゃったことです。うんざりしてしまって、十六歳の時にやめたんですが、もちろん家のぼんくらども・・・愚か者たちという意味です・・・が、あたしの好きなようにさせたんです。あたしって賢い人間じゃないんで、学校ではうまくやれなかったんです。やる気があれば、ずっとうまくやれるのに、そう言われてましたが、たぶん愚かというよりは怠け者だったんでしょうね。本が好きじゃないのは事実です・・・好きならいいんですが。友人はたくさんいますが、長続きしないんです。あちらのせいなのか、こちらのせいなのか、それは分かりません。昔からの友だちはエイミ・バーカーとミュリエル・フェザーストンで、二人ともクラパム[22]の学校で一緒でした。エイミは今シティーでタイプライター[23]をやっていて、ミュリエルは写真屋[24]で働いてます。二人ともめっちゃ素敵な女の子で、あたしは大好きなの。ただ、そうは言っても、ねえ、いわゆ

る上品な生活を送るためには、お金が必要ですから・・・だから、ねえ、あたしのドレスやそうした類のことで、彼女たちにアドバイスしてくれるように頼むことなんか、とても考えられないの。前に一度、友だちの一人が何か言いだそうとしたんですが、とっても不愉快に思えて、それで彼女とは縁が切れちゃいました」

エメリンは手放しで面白がっていた。

「まったく、そういうことなんですよ」と、お嬢さまもざっくばらんに続けて言った。「あたしって、ヤバいほど激しい気性ですから、たいていの人とはうまくやって行けないの。昔はよく学校で女の子たちと物すごいケンカをしたもんです・・・お高くとまった連中でしたよ。それでも、ずっと友だちになりたいって、そう思ってましたのよ、マジで。とは言っても、自宅に連れてくることなんか、もちろんできなかったわ」

マムフォード夫人は、お嬢さまの性格が分かり始め、その複雑な性格が今のような生活ぶりを形成した経緯も理解できるようになった。それでも、この下宿人が自分自身の友人たちに与える印象について不安を覚えないわけではなかった。しかし、全体的に言えば、ルイーズが忠実に指示に従い、上品になるために最善を尽くしてくれそうに思えた。クラレンスの評価は依然として好意的だった。デリック嬢は「実に面白い人」で、説明を聞いて粗野な人だと思っていたけど、そんなことはないとはっきり言った。

女中の二人と子守女の手助けがあったので、エメリンにとって家事の重荷はさほどではなか

った。子供は二歳になる娘ということで、あまり注意を払う必要もない。お嬢さまは、最初のうちは赤ん坊[25]にめちゃくちゃ関心を寄せていたが、その気晴らしにたちまち飽きてしまい、育児のことが目にも耳にも入らず、エメリンと一緒にいる方が断然いいという態度を示してきた。

二日目の朝、二人は一緒にフェンティマン夫人を訪問した。この婦人は歩いて十五分の「ヘイゼルディーン」と呼ばれる家に住んでいた。二戸建て住宅[26]で、ラニミードよりもかなり小さく、家の外も中も見た目はさほど良い感じではなかった。フェンティマン夫人は背の高い、強面(こわもて)ながらも愛想のいい婦人だった。子供が二人いて、それに時間の大半をとられており、現在はその一人が病気で、この痛ましい事柄以外は何も話すことができない様子だった。それで、訪問は十分間しか続かず、エメリンはお供の者を失望させてしまったと思った。

「子供ってホントに厄介ですね」と、お嬢さまは家を出てから言った。「召使いをたくさん雇えなけりゃ、決して結婚なんかしちゃいけないわ。そんなに前のことじゃないんだけど、ある人をめっちゃ好きになったものの、お金がないという理由で振っちゃいました。まったく正しい判断だったと思いませんか?」

「正解でしたよ、たしかに」

「で、今は」と話を続けたルイーズは、歩きながら日傘で地面を突いていた。「別の人がいますの。それがあなたに話したいことの一つなんです。年収は三百ポンドほどで、もちろん大し

た額じゃないんですが、ヒギンズ氏が何がしかのことをしてくれますわ。でもね、それだけじゃ何にもならないでしょうね、きっと。さあ、家に戻って、たくさんお話しましょうか？」

ヒギンズ夫人から手紙が届き、エメリンと夫を大いに楽しませてくれた。しかしながら、同時に二人はよくよく考えてみなければならなかった。たしかに、彼らの知人の中には何かの拍子に、特にヒギンズ氏が義理の娘に「気前よくふるまい」たがっていることを知ったら、お嬢さまに魅了されるかもしれないような、目星を付けることができそうな、結婚適齢期の若者が一人か二人はいた。とはいえ、お嬢さまがすぐさま結婚する姿を見たいという気持ちは、マムフォード夫妻にはなかった。手紙の最後に書かれていた金銭的な誘惑については真剣に考えることができない。やっと「高級下宿人」を確保したわけだから、少なくとも一年か二年は一緒に過ごしてほしいと思った。しかし、すでにルイーズはエメリンであれば必ず理解してくれそうな、そんなことを少しほのめかしていた。恋人への関心が偽りのない真剣なものだとルイーズから告白されたことで、それはマムフォード夫人にとって驚きというより、むしろ悩みの種となった。

暑い日の午後のことだった。二人は外の庭にティーのセットを持ってきてもらい、葉がさらさら音を立てるクリの木の下で過ごした。

「サットンにはフェンティマン夫人を除いて、お知り合いは他に誰もおられないんですか？」と、お嬢さまは小枝で編んだ椅子で上体を後ろにそらしながら尋ねた。

「ええ、親しいという意味ではね。でも、ロンドンのお友だちが何人か、日曜日にいらっしゃるわ。四人ほど昼食に呼んだのよ」

「まあ、楽しそう！　もちろん、それまでにその方たちのこと、すべて話してくださるわね。でも、あたしは例のコッブのこと、もっと話したいわ。ええ、角砂糖は二つ、お願い。アイツとは一年半ほどの付き合いです。あたしたち、いわば旧友みたいな関係で、アイツは手紙を寄こしてきますが、あたしは何か言うことでもないかぎり、自分の方から返事は出しません。実を言うと、あんまりアイツのこと、好きじゃないの」

「旧友みたいな関係なのに、どうしてそんなことが？」

「そうですね、アイツはあたしのこと好いててくれますし、それで損することもないかなあ――ただし、アイツがちゃんと状況を理解してくれてれば、ですが。あなただって好きになんかなりませんよ、きっと。がさつで粗野な、めっちゃ怒りっぽい男なんですよ」

「あら、まあ！　その方の勤め先は？」

「ああ、あの何とかいう電灯会社と取引関係があって、ずっと営業で渡り歩いてますよ。そんなことは気にならないわ。亭主元気で留守がいいって言うじゃないですか。ちょうど今頃はアイルランドにいて、ほどなく手紙をくれることでしょう。あたしが家を出たことは知らないんで、知ったらきっと激昂するでしょうね。そうなんです、そんな男ですよ、アイツは。恐ろしいほど嫉妬深くて、すごいかんしゃく持ちなの。結婚なんかしたら、いつか絶対あたしをぶ

つでしょうね」

「まあ！　そんな男とどうしてまた関係がもてるんですか？」

「めっちゃ素敵な男に見える、そんな時があるんですよ」と、お嬢さまは思いにふけっているかのように答えた。

「でも、その方ががさつで粗野だなんて、本気で言ってるの？」

「ええ、ホントです。とうてい紳士だなんて言えませんよ。アイツの親きょうだいには会ったこともありません。どこか遠く離れた所に住んでるみたいで、たとえヤバい人たちだったとしても驚きはしませんよ。アイツの最後の手紙はめっちゃ無礼でした。言うに事欠いて・・・えーっと、何だったっけ？　そうそう・・『オマエのような情け知らずの馬鹿たれ女はいねえぞ。オマエのことを考えるなんて、そんなムダなことは金輪際、絶対しねえからな』でしたっけ？　どう思われますか？」

「異常としか思えませんね、まったく。思わせぶりなことを何もしてないのに、どうしてそんな手紙が書けるんでしょうか？」

「うーん、でも、してしまったような気もします。あたしたち、共有地(コモン)(27)で時たま会ったり、それから・・・まあ、あの、そういったことをしてたんです。ショックを受けましたね、マムフォード夫人。そんなこと、上品な人たちは決してなさらないんでしょうね。ですから、もう今後はやめておきますわ」

「お母さまは知っておられるの、その方のこと？」

「ええ、知ってますとも。まったく隠し事なんかありません。むしろ母はアイツのことが気に入ってるんですよ。もちろん、アイツも家に来た時は行儀よくしてます。あなたにも会っていただくため、こちらの家を訪問するようにアイツに頼もうかって思ってるんですよ。よろしいですかね？」

「ホントにそうしたいのなら、構いませんよ、ルイーズ。でもね・・・その方の欠点を誇張してるとしか、私には思えないんですが」

「とんでもない。かんしゃく玉が破裂した時は、そりゃもう野獣（けもの）そのものです」

「あら、まあ！」と、エメリンはそっと口をはさんだ。「それってレディーにふさわしい言葉とは思えませんよ」

「そうですね。ありがとうございます、マムフォード夫人。アイツは怖い・・・めっちゃ切れやすいって言うつもりでしたの。それから、お話ししたいことが他にもあるんです。シシー・ヒギンズは・・・ヒギンズ氏の娘のことですが・・・婚約したも同然なんですよ。相手はボウリングという男で・・・これまた、バチくそ間抜けな・・・」

「そういった言葉も、私は絶対に使いませんよ、あなた」

「ありがとうございます、マムフォード夫人。まったくもって愚かな男って言うつもりでした。でも、会社での地位はめっちゃいいんですよ・・・ウリッジ[28]にあるジャナウェイ兄弟商会の、

なにせ共同経営者ですから。まだ三十にもなってないのにね。ところで、どう思われますか？　ボウリングは決心がぐらついてるみたいで、このあたしに最近も、しょっちゅう秋波を送ってくるんで、とうとうシシーが逆上しちゃいました。ホントにホント、これが理由であたしは家を出たんです」

「なるほど」と、聞き手はまぎれもなく興味を覚えたようで、そうつぶやいた。

「そうなんですよ。実家の者たちもあたしを追い出したかったんです。シシーを出し抜こうとしてるなんて、そんな心配は少しもなかったのに。ですが、それが姉にとってめっちゃ困った事態であることは、あたしも認めます。ところで、こういったことって、上品な人たちの間じゃ絶対に起こりませんよね？」

「でも、ルイーズ、どういう意味ですか、ミス・ヒギンズと彼氏の・・・ボウリング氏が婚約したも同然っていうのは？」

「あら、その男の求婚を最初は断ったという意味ですよ、形式だけのために。ですが、シシーが受け入れるつもりだってことは、相手もよく分かってますよ。あなた方はそういったことはなされないんですか？」

「よく分かりません」と、エメリンはいくつか個人的なことを思い出し、顔を少し赤らめながら答えた。「どんなことがあっても、あなた自身はボウリング氏の言うことに耳を貸さないって、そう理解してよろしいですね？」

ルイーズはふふふっと笑った。

「さあ、どうでしょう。シシーに仕返しするためだったら、何をするか分かりませんよ。言うまでもないことですが、あたしたちは憎み合ってます。でも、あんな男と自分が結婚するなんて想像もできませんわ。なにせ馬面（うまづら）ですし、鼻のつまった声[29]で話すんですよ。サンキューをシンキューと言う始末で、うなった声でしゃべるなんて・・・ああ、アイツのうなり声ときた日には！　とてもじゃないけど、辛抱できないわ」

この会話中の困った問題をエメリンは夜になってから夫に報告した。コッブ氏もボウリング氏もラニミードに姿を見せることはなかろうということで意見が一致したものの、マムフォードの見解によれば、こうした連中は「礼儀知らず（キヤッド）」ということだった。だから、お嬢さまが新

しい交友関係を築きたいと思っても驚くことじゃない、と彼は言った。一方、自ら進んでコッブ氏と手を切ることはないだろう、とエメリンは心ひそかに思っていた。この男は、電気技師であれ、他の何であれ、お嬢さまが説明したような、そんな悪漢であるはずがない。「オマエのような情け知らずの馬鹿たれ女」と言ったからといって、必ずしも粗野な人間というわけじゃない。

「でもね、やつらは怒りっぽい連中だぜ！　ああした手合いは時間つぶしのためだけにケンカしたり、お互いの悪口を言ったりするんだ。なぐり合いを始めて警察裁判所に連行されるような、そんなゴロツキより多少はましだけど、お嬢さまが関わり合わないように、君も最善を尽くさなきゃいけないよ、ホントに。もっと良いものを手に入れる、そんな価値が彼女にあるのは間違いないからね」

「そうとも言えるわね・・・見方によれば」と、彼の妻は裁判官のように答えた。「でもね、教育をやめるのが早すぎたわ。彼女を大きく変えてあげるのは無理じゃないかしら。それにね・・・私、やっぱりコッブ氏と会ってみたいわ」

マムフォードは急に笑い出した。

「そら、また始まった！　女はいつもそうなんだから。半年もすりゃ、そいつの所に片づけてるぜ、君は」

「そんな下品なこと、言わないでよ、クラレンス。それに当分、ルイーズの話はもういいわ」

コッブ氏からの手紙がすぐ届くというお嬢さまの予感は正しかった。そのことは翌日に証明された。午後の便で到着した手紙はタルス・ヒルから宛て名を書き直されていた。この書簡がルイーズの急襲を受け、邪魔されずに読むために運び去られる時の彼女の異常な熱気を、マムフォード夫人はじっと観察していた。お嬢さまが半時間後に家を出て行く姿もまた注視していた。返信を投函するためであることは間違いない。しかし、驚いたことに、ルイーズは夕方中ずっと、この件について一言も触れなかった。

お嬢さまは学校時代にピアノの演奏を学んだそうだが、音楽はほとんど、いや、まったく好きではなかったので、数年間ほとんど鍵盤に触ったことがなかったようだ。ところが、練習を再開しなければという考えに取りつかれ、今日はピアノの練習に数時間を費やし、結果的にマムフォード夫人の神経にさわることとなった。夕食後、お嬢さまはマムフォードに演奏したいと申し出たので、お人よしの彼はそばに立って楽譜のページをめくってやった。エメリンは手芸品の刺しゅうを手にして二人を見守っていた。この妻は愚かな類の女性ではなかったが、クラレンスがその場を後にすると、なぜだか気が楽になった。

翌朝、お嬢さまは朝食に一時間ほど遅れてしまった。二階から降りてきたとき、マムフォードはすでに出勤したあとだった。彼女が外出の服装をしているのを見て、エメリンは驚いた。

「ちょっとコーヒーを一杯、お願いします。今朝は食欲がないですし、ヴィクトリア駅(30)行きの汽車にできるだけ早く乗りたいものですから」

「いつ戻ってくるの？」

「えーっと、よく分かりません。午後のティーの時刻までですかね」

お嬢さまは突如として寡黙になった。彼女の口もとに漂っていた感じのよさは、そのために消えてしまった。

第三章　楽しい交友関係？

お嬢さまは夕食時までに戻って来なかった。土曜日でマムフォードが午後の早い時間に帰宅していたので、彼女の不在はあまり悲しいことでもなかった。エメリンが庭で赤ん坊と遊んでいたのに対し、彼女の夫はパイプをくゆらしながら、いつものようにくつろいだ様子で眺めていた。二人ともすでに、第三者が加わったことで、家庭生活は以前とまったく同じというわけではないと感じていた。この新たな不自由さにすぐ慣れるだろうが、お嬢さまに食事の時間を乱されるのは迷惑である。七時半きっかりに彼らは夕食に降りて行き、食事をすませて立ち上がろうとした、ちょうどその時にルイーズが姿を見せた。

お嬢さまはルンルン気分で、朝の不機嫌さなどどこ吹く風といった感じだった。謝罪の言葉もない！　別に迷惑をかけるわけでもなし、まったく自由に出入りができないのなら、人生の楽しみなんかありませんわ。骨付き肉の薄切り、それだけで結構です。ということで、彼女は食べ終えるのに数分もかからなかった。

「トゥール劇場(31)ですが、月曜の晩のチケットを手に入れましたわ。二人とも来てくれなくちゃイヤですよ。来れますよね？」

マムフォード夫妻は互いにチラッと見た。「ええ、行けますよ。ご親切にどうも、ミス・デ

リック、でもね・・・」

「いいんですよ。うわっ、楽しくなりそう。ロンドンに行く汽車の中で思いついたんですよ。それで、ヴィクトリア駅から辻馬車に乗って、真っ先に座席の予約をしてきたんです。前から三列目の二階正面席(ドレス・サークル)(32)で、それがあたしにできる精一杯のことです。どうかひとりで夕食をとらせてください。マムフォード夫人、あとでちょっとお話したいことが・・・」

クラレンスはいつも土曜の夕方を雑談して過ごしている友人のフェンティマン氏の家に出かけた。エメリンはすぐに客間でルイーズと一緒になった。

「どうぞ、これ、読んでくださいな」と、お嬢さまは手紙を差し出しながら言った。「コッブからですよ。届いたのは昨日ですが、その時はまだ話す気になれませんでした。ええ、ええ、どうぞお読みください。読んでほしいんです」

しぶしぶ、とはいえ好奇心を覚えて、エメリンは手紙にさっと目を通した。コッブ氏はデリック嬢が実家を出たことを知らずに手紙を寄こしたようだ。簡単で形式的な手紙だった。アイルランドで今やっている仕事が簡潔に説明され、できれば土曜日の午後三時にストレタム・コモン(33)で会ってほしいと書かれていた。そして署名がなされ、「敬具」と書き添えてあった。

「すぐ心に決めました・・・アイツにはもう会うまいってね。こういうことはやめにしないといけません。アイツのこと、金輪際もう考えるつもりがないんです。すぐアイツには分からせた方がいいです・・・かね？」

エメリンは心から賛同した。

「でもね」と、ルイーズは非常に満足した様子で続けて言った。「今日の午後のことを考えて、実家に戻った方がいいって思ったんです。だって、あたしにコモンで会えないと、アイツ、絶対に実家にやって来ますからね。あたしの口から説明を聞かないうちに、あたしのことについて母やシシーから話を聞いてほしくないんです」

「手紙の返事は書かなかったの？」

「ええ、母に一行ほど書き送っただけ・・・家にいてくれないとダメなので、今日あたしが行くことを知らせるためです。いやはや、それで思ったとおりになりました。コッブのやつが三時半に自宅にやって来たんです。でも、その前にあたしはシシーにさんざん悪態（あくたい）をついちゃいました。これって上品な表現じゃありませんが、あたしたちにとってホントに今までで一番ヤバい、口汚い、ののしり合いでしたよ。あたしが家を出てからというもの、ボウリング氏が自宅に近寄らなくなったんで、シシーはそれはもうお冠です。姉がいろいろと言うから、売り言葉に買い言葉で、あたしもずけずけ言わずにおれませんでした。姉はホントに口から泡ふいて怒ってましたわ。『さあ、いいこと、あの人が今度サットンに行ったりしたら、何が起こるか分かんないわよ』・・・あたしが『あら、何が起こるって言うの？』と尋ねると、『パパが小遣いをストップするから、アンタは自分だけで精一杯やって行かなきゃならなくなるわ』・・・『あら、結構よ、その場合はボウリング氏と結婚してやるわ』とあたしが言った時の、姉の怒

りようといったら！・・・『年収一万ポンドでも、あの人とは結婚しないって、そう言ったじゃないの！』って、姉は金切り声で叫んでましたよ・・・『たぶん言ったと思うんだけど、生活の糧がないんだったら仕方ないわ』・・・『アンタはコッブと結婚できるじゃないの』・・・姉が声をあげて泣きそうだったんで、あたしをあんなに怒らせてなかったなら、かわいそうに思ったことでしょう。『イヤよ』って、あたしは言い返してやりましたわ。『アイツとくっつくことなんかできないし、アイツが連れ添う相手になるなんて夢にも思ったことないわ。それに・・・』」

ここでエメリンが口を差しはさんだ。「ホントに、ルイーズ、そんな話はまったくレディーらしくないわ。あなたは実家に帰るべきじゃなかったのよ」

「ええ、あたしもあとで後悔しました。当分はもう二度と帰らないわ、約束します。でもね、コッブが来てしまったんで、実は、こっそり二人だけで会いました。どういうことが起こってるか聞いて、アイツ、ぶったまげてたわ。このあたしにも驚いてましたよ・・・つまり、あたしの話し方に対してです。あたしたちの間には何もないってこと、アイツにすぐ分かってもらいたかったんで、どちらかと言えば・・・あなたが言われたような話し方で言ったんですよ」と、お嬢さまは顎を少しあげて上から目線で言った。「あら、大丈夫ですよ、あたしはきわめて上品にふるまいましたからね。でも、いつものようにアイツがムカッとして悪口をいろいろ言い始めたんで、あたしも堪忍袋の緒が切れちゃいました。「コッブさん、ここでは行儀よくふる

まってちょうだい。でなきゃ、今すぐ家から出てってもらいます」って、あたしはめっちゃ厳しい口調で言ってやりました。すると、アイツったら口調がガラッと変わって、まったく反対のこと・・・女の子が聞きたがるようなこと・・・を言い出したの。でも、そんなの絶対イヤってふりしてやったわ。『じゃ、オレたち、すべて終わっちまったんか？』って、とうとうアイツはどなり出し、ええ、ホントにどなったんで、みんなに聞こえたに違いないわ。『すべて終わったかですって？　そもそも、何も・・・真剣なお付き合いなんか全然なかったじゃない』って答えると、アイツったら『ああ、結構だ。じゃ、バイバイだ』と言って帰ってしまいました。たぶん、これで手が切れちゃいました・・・当分の間ですけどね」

「それじゃ、穏やかな生活をするように努めてくださいね。音楽の練習を続けて、毎日ちょっとでいいから読書もして・・・」

「はいはい、そうするつもりでしたよ、マムフォード夫人。それに、明日はお友だちがここにいらっしゃるし、めっちゃ静かな、素敵な日になるわ。そして月曜日は、一緒に劇場へ行きましょうね、気分転換のために。これからはそうした人たちのことを考えることにするわ。これで一件落着ね。ホントに穏やかな生活を送るようにしますよ」

彼女は十一時近くまでピアノを打ち鳴らし、ベッドに行く時は淑女ぶった、満足したような笑みを浮かべていた。

日曜の朝の来客はグロウブ夫妻、ビルトン氏、ダニル氏の四人だった。グロウブ夫人はエメ

リンの姉で、陽気で話し好きな、優しい女性だった。事情を知った彼女はすぐデリック嬢と仲よくなり、「上の階級の」話と肩のこらない卑近な話をうまく織り交ぜながら、この若いレディーを大いに楽しませてくれた。ビルトン氏は株式仲買人の事務員で、シティーに勤める善良な若者の典型――文武両道で元気はつらつとしているが、低俗なところが全然ない、さわやかで気さくな、健康そうな男――に見えた。彼は自転車(34)で来ていて、帰りも同じ手段ということだった。ルイーズはすぐ自転車の乗り方を学ぶことに決めた。

「ビルトンさんのお住まいがサットンであれば、あたしにも教えてくださるよう、お願いできますのに」

「それはまことに残念です」と、さりげなく上品に若者は答えた。

「あら、気になさらないで。誰か別の方を見つけますから」

四番目に到着したダニル氏は年上で愛想もよくなかった。彼は非常に物静かで幾分やつれた感じのグロウブ氏ともっぱら話をしていた。二人ともビジネスのことしか頭にないようだったが、その話題を同席した全員に押しつけることもなかった。その日は楽しく過ぎて行ったが、お嬢さまの意見では、相当しらけた雰囲気であった。彼女は懸命にビルトン氏を悩殺しようとしたが、彼の注意を独占できないことや、彼女がはしゃいで言葉を投げかけても、その対応はニコニコした愛想笑いで十分だ、そう相手が思っていることに少しがっかりしたみたいだった。こんなにイケメンで身なりがきちんとした男性の割に、彼女が受けた印象は不思議なほ

ど遠慮深いというものであった。でも、あの人はたぶんもう「言い交わした」相手がいるんだろう。そうだ、それしか説明がつかない。訪問客たちが帰ったあと、彼女はマムフォード夫人に率直に質問してみた。

「婚約はしておられないと思うんだけど」とエメリンは答えたが、お嬢さまの今日のふるまいには概して満足していた。

「あら！　でも、もちろん、あなたが知らないだけで、婚約してるかもしれませんよ。それっていつも新聞で公開されるんですか？」

「そうした規則はないわよ、あなた」

「とにかく、みなさん、大変結構な人たちばかりでしたわ」と、お嬢さまは少し溜息まじりに言った。「でも、お姉さまのこと、めっちゃ好きになりました。嬉しいことに、遊びに来てくださいって言われましたよ。ビルトン氏はよく彼女の家にいらっしゃるんでしょうか？・・・誤解なさらないでね、マムフォード夫人。殿方たちとのお付き合いがホントに好きなだけなんですから。悪いことじゃないですよね？　ビルトン氏のような人たちは、あたしの知り合いとはまったく違うんです。もっと頻繁にお会いしたいものですわ」

「そうした話をしたって、ちっとも悪いことなんかありませんよ、ルイーズ。でも、どうかがつがつしてるみたいに思われないよう、気をつけてくださいね。みんな、そういった不愉快なことを考えたり・・・言ったり・・・しますから」

お嬢さまは感謝して、穏やかな心でいること、謙虚であること、この二つを自分の人生訓にします、と言った。

月曜の夕べは、お嬢さまがトゥール劇場で子供のように喜びを全身で表わしたので、彼女の連れたちもうらやましく思わずにおれなかった。彼女の生気に満ちた感受性はそれはもう驚くほどで、「お嬢さまは正常な感性の持ち主だわ」とエメリンは嬉しそうに言った。ルイーズは愚行に走るかもしれないし、ある程度は悪趣味の欠点が見られるかもしれないが、自堕落なところは全然ないように見えた。

火曜日、お嬢さまは家で過ごし、少し読書をしているように見えたが、考え事にふけっているのは明らかだった。水曜日の午前は、お出かけして買い物をするために、一緒にロンドンへ行ってくれまいかと、いきなりエメリンに切り出した。すでに二人はルイーズの衣装類をひっくり返して調べていたが、その多くはマムフォード夫人の趣味に合わず、ダメ出しをもらっていた。お嬢さまはいそいそと捨ててしまったが、新しい服を購入するまでは心が落ち着かない様子だった。それで、二人は昼食を早めて、汽車でヴィクトリア駅まで行ったのだが、ルイーズはすべての費用を自分持ちにすると言ってきかなかった。五時までに十五ポンドほど使ってしまったが、彼女はいたく満足しているように見えた。そのあとは、レストランで午後のティーを楽しみ、マムフォードが帰宅する直前にサットンへ戻ってきた。

金曜日になると、グロウブ夫人を訪問するために、二人はまたもやロンドンに出かけた。お

嬢さまは今日をもって一週間の「お出かけ」は最後にすると約束した。彼女は、これだけでは満足できないので眠れそうにないと正直に告白したが、明日になれば、そうした気持ちに打ち勝ってくれるだろう。実際、その夜、お嬢さまは「奥さまをこんなに何度も家から連れ出して申し訳ありませんでした」と言って、マムフォードに正式な詫びを入れた。

「お願いですから、いつもこんなに飛びまわってるなんて思わないでくださいね。だんだん落ち着いてきてるような、そんな気がします。これからは静かに過ごすつもりです」

それで、どうしても一日だけロンドンに行きたいと言い出すまで、お嬢さまが一週間以上も我慢できたことは、マムフォード夫妻にとって予想外であった。お嬢さまの義父、ヒギンズ氏は新たに仕送りをしてくれていた。ルイーズには購入したいものがまだもう少しあったからである。彼女は、今回はエメリンの願いを受けて、ひとりでロンドンへ行くことになったが、その取り決めにも満足している様子であった。

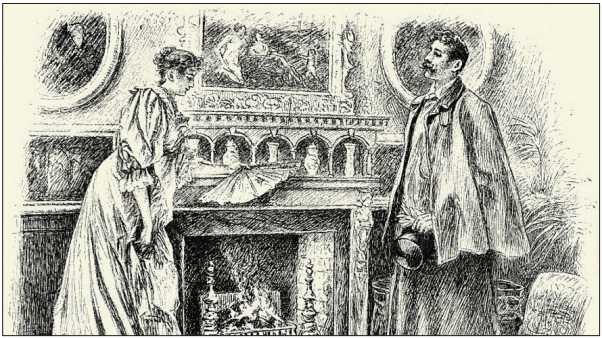
午後になって早い時間帯に、マムフォード夫人が外出の準備をしていると、召使いがやって来て、ある紳士がデリック嬢に会うために訪問されましたと告げた。デリック嬢が不在だと分かると、訪問者はいろいろと質問をし、最後にマムフォード夫人との面会を求めたそうである。それはコッブという名前であった。

「客間にお通ししなさい」と、エメリンはちょっと動揺して言った。「数分したら降りて行きますから」

いろいろな不安に襲われながら部屋に入ると、目の前には彼女が想像していた姿と丸っきり似ていないこともない男が立っていた。屈強な体格で、意思が固そうに見え、眉を寄せ、真一文字に口を結び、重そうな足でしっかりとカーペットに立っていた。見苦しくはない服装だったが、それ以上に目立った特徴はなく、手袋をしていない両手には油のシミがついた茶色の帽子を持っていた。熟練工といったところであろうか、話し始めると、そうした印象と一致するような、ぶしつけながらも丁寧な言葉づかいであった。教育を受けたような話し方ではないものの、品のない文法的なミスを犯すようなことはなかった。

「オレの名前はコッブ、迷惑をかけて申し訳ないです。オレのこと、ミス・デリックから聞いてますよね？」

「ええ、コッブさん、あなたの名前は話に出ましたよ」と答えたエメリンはそわそわしていた。「お掛けになりませんか？」



「ありがたいことで。そうします」

彼は帽子をひねり回し、苦労して次の発言の準備をしているようだったが、その言葉がしばらくしてやっと彼の口からもれた、というよりも急に飛び出した。

「ミス・デリックに会いたいと思ってました。アイツはまだ一緒に暮らすつもりなんですかね？　そう聞いてますんで」

激怒したら恐ろしい男だわ、とエメリンは思った。この男の言葉はきっと大きなハンマーのように振り下ろされてくるだろう。彼を怒らせるのに大した手間はかかるまい。それにもかかわらず、彼の表情には攻撃的なところが全然なかった。笑みを浮かべようとさえしており、その顔はやわらいで十分に愛想よくなった。この男をじっと観察すればするほど、お嬢さまが彼に抱いた関心も、エメリンにとって驚きではなくなった。

「ミス・デリックはしばらくここに滞在されそうですよ。今日はちょっと買い物にロンドンへ出かけられました」

「分かりました。最後に会ったとき、アイツはアンタさんのことばっかり話してましたよ、マムフォード夫人。アンタさんに会わせてもらいたいって思ったのは、そいつが理由でして。めっちゃ大きな影響力を持っておられるようで・・・」

「そうお思いですか？」と、まんざらでもなかったエメリンは答えた。「その力を彼女のために、うまく使えるといいんですが」

「オレもそう思ってます。けど・・・結局、こういう結果になるんですよ、マムフォード夫人。アイツは暗に・・・正確にはそう言ったわけじゃねえんですが・・・もうオレとは関係をもたねえように忠告されてるってんです。もちろん、オレはアンタさんのこと知らねえし、アンタさんもきっとアイツに良かれと思ったことをされとるんでしょうがね。オレのことをもう考えるなって、アイツにガチで説得されてんのかどうか、ちょっと教えてもらえりゃ、恩に着るんですがね」

それは不安を覚えるような返答の要求であった。エメリンは再び恐怖を感じた。暴力をふるわれるのではないかという気がしたのだ。男は次第にイライラし始め、激しい感情がうごめいていることが筋肉の動きを見ても分かった。

「お嬢さまにそんな忠告はしてません、コッブさん」と、エメリンは落ち着きと威厳を保ちながら返答した。「ミス・デリックの個人的な問題にはまったく関心がありませんもの。こういう問題については、実際もう自分で判断できる年齢ですからね」

「オレもそう考えるべきでした」と、コッブ氏はしっかりした口調で言った。「赦(ゆる)してやってください。無礼なやつだなんて、思われたかありません。最後に会った時にアイツが言ってたことからも、たいていの男なら、アイツの好きなようにやらせることでしょうが・・・なぜか、オレにはそれができねえんです。実際、アイツの言うことは信用ならんのですよ。日和見主義者じゃねえでしょうか、アイツは。でも、アンタさんが干渉しないって・・・つまり、オレの

不利になるようなことをするのは間違ってるって、そうおっしゃって・・・」

「保証しますよ。そんなことは絶対にしません」

しばらくの沈黙のあと、コッブ氏はまた無遠慮な大声を響かせながら言った。

「オレたち、どっちも気立てがいいってわけじゃねえんです。お互い知り合って一年ぐらいですかね。その間に五十回ぐらいはケンカしとるはずです」

「それじゃ、どうしてまた」と、エメリンは思い切って尋ねてみた。「そんな人たちが平和に暮らして行けるというんですか?」

「いやいや、行けますよ」というのが相手の確信に満ちた返事であった。「マウントをとる、そんな戦いになるんでしょうが、どっちが勝つか、火を見るよりも明らかで、そうなったら万事がまるーく収まっちまいますよ」

エメリンは笑いをこらえることができなかった。訪問者も一緒に腹を抱えて笑ったので、それによって彼の株も少し上がった。

「約束しますよ、コッブさん。あなたの不利益になるようなことは絶対いたしません」

「そいつはどうも。オレが知りたかったのはそれだけです」

彼は立ち上がった。エメリンはどうふるまってよいか分からなかったが、「ミス・デリックが自宅にいる別の日にまた来ませんか?」と言った。

「今日の午後、こっちに来れたんは、ホントにたまたまなんです。アイツの尻を追いかけま

わすような、そんな暇な時間なんかないもんで、そいつがオレの不利と言えば不利な点ですかね。誰か別の男がいるかどうか分からんのですが、アンタさんが知っておられても、聞き出すようなことなんかしやしませんよ。運に任せてやってみるしかねえんですが、アンタさんがオレの悪口を言われんかぎりは・・・アイツもアンタさんの忠告には一目おいてますし・・・」

「それが事実なら嬉しいのですが。私がしなければならないことは、自分の気持ちに忠実にふるまう、そうした義務を彼女に思い出させてやることだけです」

「それが一番大切なことですよ。それ以上のことは望みやしません」

エメリンはためらったが、握手をせずに彼を帰すことはできなかった。彼は社会的な劣等感をうっかり態度に表し、相手から誘われる前に握手を求めるようなことはしなかった。その点もまた彼の有利に働いたようであった。

第四章　三角関係のもつれ

デリック嬢はコッブ氏が帰って三十分もしないうちに戻ってきた。こんなに早く帰宅したことにマムフォード夫人は驚いた。彼女はハイ・ストリートへ買い物に行く途中だったが、お嬢さまと鉢合わせしたのは鉄道駅の近くであった。

「これで良かったんじゃないかしら？　もっと長く実家にいたら、わざわざシシーと口論しに帰ったことになりますからね。でも、売られたケンカを買わないように、ぐっと我慢してたんですよ。これから食料雑貨店に行かれるんですか？　ああ、ぜひ一緒に連れて行って、どういうふうに買い物をするのか、見学させてください。今まで食料雑貨店で注文したことなんか一度もない・・・ええ、ホントに一度もないんです。そういうことはいつも母とシシーの担当でしたの。家事の切り盛りのこと、もっと知りたいって思ってます。教えてくれるって約束でしたよね」

エメリンは家に着くまでコッブ氏の訪問について言及しなかった。

「アイツ、ここに来たんですか！」と、ルイーズは顔を赤らめながら大声で言った。「なんて厚かましい！　すぐ手紙を書いて、めっちゃ無礼なふるまいだって、そう言ってやるわ。こんなふうにあたしを付けまわすなんて！」

お嬢さまの怒りは正真正銘のものに思えたが、起こったこと全部を知りたくてたまらないようでもあった。エメリンは嘘いつわりなく報告してやった。

「ホントにそれだけですね？　まあ、アイツの無作法な行為といったら！　いやはや、アイツに会ったんであれば、絶対・・・絶対無理ってことは、お分かりになりますよね？」

「そのことについては何も言いませんよ、ルイーズ。私がすべきことでは・・・」

お嬢さまの顔には嵐の予兆が見て取れた。エメリンが動こうとすると、彼女は行く手をさえ

ぎった。

「どう思うか、何としても言ってもらいますよ。あたしが家にいない時に来るなんて言語道断だわ。あなたもアイツに会うべきじゃなかったんです。どう思うか、自分だけの胸にしまっておく権利なんかありませんよ」

マムフォード夫人は腹立たしい気持ちを抑えきれず態度に表わした。

「私にはそうする権利がありますし、そうします。お願いですから、内輪もめはやめましょう。あなたは好きかもしれませんが、私はイヤです」

お嬢さまは部屋から出て行って夕食の直前まで姿を見せなかったが、食事の時間になると威厳のある、やや傲慢な顔つきで下に降りてきた。マムフォードの発言に対して、彼女はぶっきらぼうに形式的な返事をしていた。こうした事態を覚悟していた彼の方は、やがて妻と楽しそうに会話を始めたので、ルイーズは黙したままだった。夕食後、お嬢さまは外の庭に出てしまった。

「うまく行かないね」とマムフォードが言った。「家の中がメチャクチャだ。厄介払いしなくちゃならないかもね」

「もし行儀よくできないのなら、仕方ないわ。私の責任よ。うまく行かないことは分かってたはずなのに」

十時半になっても、ルイーズはまだ外の暗闇の中で座っていた。夜の戸締りをしたかったの

で、エメリンは厄介な下宿人を呼びに行った。

「中に入った方がいいんじゃない？」

「ええ、でも、あなたはひどい人だわ、マムフォード夫人」

「ミス・デリック、あなたがそんなに不愉快な気分でいる時に、ひとりにしておく以外に何ができると言うの？」

「でもね、そうすべきじゃなかったんです。あたしって、ひとりにされると、すぐすねてしまうの。それで、みんな気まずくなっちゃうんです。いっそ腹を立てて、あたしに当然の報いを受けさせてもらえれば、それでたちまち一巻の終わりですのに」

「あなたはいつも上品な人たちの話をするけど、上品な人たちはそうしたもめごとを起こさないものよ」

「ええ、そうでしょうね。ホントに申し訳ないです。赦してもらえれば・・・。ほら、ほら、あたしたちって、数時間前でも、その気があれば仲直りできてたんですよ。アイツのこと、どう思ったか話してくださいなんて、もう頼んだりしませんわ。アイツの厚かましさにふさわしい手紙を先ほど書いてやりましたからね」

「結構です。そのことはもう話さないようにしましょう。もう少し穏やかな態度に、あなたがなってくれればいいんですが、ルイーズ・・・」

「そうなります、絶対に。約束します！　お休みなさいって、マムフォード氏に言わせてく

ださいな」

それから一日か二日は穏やかな(ハルシオン)(35)天気だった。土曜の午後、お嬢さまは辻馬車を雇ってマムフォード夫妻を田舎へのドライブに誘った。彼女のたっての望みで子供も連れて行ったが、最高に楽しかった。彼女は絶対いつかサットンに自分も家を持ちたいと言った。年がら年中、お互いに仲むつまじくできるように、マムフォード家の人たちはいつまでもここに住んでもらいたかった。

「お家賃はいかほどですか?」と彼女は尋ねた。じゃあ、最初はもっと小さな家で満足しないといけないわ。手頃な二戸建て住宅ですかね。ヒマラヤスギ通りの向こう側にある家みたいな——あれは文句なしに上品ですよね?」

そのような自分の境遇の変化がどのようにして起こるのか、ルイーズは何もほのめかさなかったし、その問題を深く考えているようにも思え

なかった。

ルイーズはその後また不安に襲われた。ある日、マムフォード夫妻には交友関係がほとんどないことに対して、彼女は失望をはっきり表明しそうになった。このことをエメリンは夫にそのまま伝え、良心の呵責をいくらか感じると言った。

「私ね、わざと彼女に誤解させたような、そんな気がするの。ねえ、クラレンス、最初の面談の際に、カービー・シンプソン夫妻やホリングズ夫人のことに触れたでしょ。きっと憶えてると思うのよね。嘘を言って彼女からお金をとってるのは、やっぱりマズいんじゃないかしら?」

「なに、心配無用だ。すぐ結婚するつもりの意中の相手がいるってことは、火を見るよりも明らかなんだから」

「そう思わないわけじゃないんだけど、いったい全体それは誰なんでしょうね。今朝、男性の筆跡の手紙が来てたけど、何も言ってくれないの。コッブ氏からじゃなかったわ」

翌日、お嬢さまは単刀直入に質問してきた。

「ウェスト・ケンジントンに知り合いが何人かいるって、おっしゃいませんでしたかね?」

「ええ」と、うっかりエメリンは答えてしまった。「カービー・シンプソン夫妻のことですね。ご不在なのよ、今は」

「それは残念。他に誰か、遊びに行けるような方はおられないんですか? または、こちら

にお呼びする方とか？」

「数日したら、たぶんビルトン氏がいらっしゃると思うんだけど」

お嬢さまはビルトン氏の名前を聞いて極端な関心を示すこともなく、この話題から離れて、家庭的な楽しみの話に甘んじているように見えた。

エメリンが大いに悩まされることになる手紙を姉のグロウブ夫人から受け取ったのは、同じ日の夕方のことであった。

「悪事千里を走るって、このことね！　しかも途中で尾ひれが付いちゃうのよ！　パウエル夫人って方がいらして、バーミンガムから手紙を書いて寄こしてくれたんだけど、あなたがどこかの成り上がり（パーヴェニュ）(36)の娘を受け入れたって聞いたそうなの。報酬目当てに上流社会の行儀作法を伝授してやってるって！　まさにパウエル夫人が喜んで話題にしそうな内容よ・・・そりゃもう意地悪な人なんだから。この情報、どこで仕入れたのか分からないし、おくびにも出さないの。夫人の言葉をそのまま繰り返すと、『私が聞いた話だと、その娘はまるで野蛮人、そりゃもう恐ろしい言動みたい。マムフォード夫人の勇気に天晴（あっぱれ）をあげたいくらいだわ。こういうことをする人もいるって聞いたことはあるんだけど、そんな人たちとどうして友だち付き合いなんかできますかしら』といった内容よ。そういう馬鹿げた内容だったんで、もちろん、反論する返事を送ってやったんだけど、ホントに迷惑千万だわね」

マムフォードははらわたが煮えくり返っていた。この作り話の出どころはビルトンかダニル

のどちらかだが、どちらにせよ、これまで人を困らせるような男だと思ったことなどなかった。では、いったい誰がこの件を知っているのか？　エメリンは記憶をたどっていると、面識のない一人の既婚女性、ルイーズと一緒にグロウブ夫人の家にいた時に訪問してきた一人の女性のことを思い出した。

「そう言えば、イヤな女・・・高慢ちきな人だったわ。偉い人たちと知り合いであることばっかり話してたけど、この情報源はさっきの男性のどちらかというよりも、この女からの可能性がずっと高いわ。モリーに手紙でそう言ってやりましょう」

マムフォード夫妻は暗鬱な気分になり始め、無分別にも受け入れたお荷物の処分を真剣に考えた。翌日、お嬢さまはエメリンをロンドンに連れて行こうとしたが、お供をしてもらえないと分かると、不服そうな顔になった。彼女は夕方遅くまでロンドンに滞在していたが、サットンに戻ってくると、数名の友人――以前マムフォード夫人に話したことがある女の子たち――と旧交を温めたことについて楽しそうに語った。そのうちの一人、ミス・フェザーストンと一緒にレストランで食事をし、そのあと彼女の下宿で一、二時間ほど過ごしたそうである。

「タルス・ヒルには近寄らなかったわ。あそこで起こってることをどんなに知りたいか、あなたにも分かっていただければ！　誰も一行だって手紙を寄こしてこないのよ。明日は母に必ず手紙を書くわ」

エメリンはお嬢さまに届いた手紙を差し出した。

「なぜ今まで黙ってたんですか?」と、ルイーズはイライラした大声で言った。

「まあ、ずっと私に話してばかりいたからよ。ひと息つくのを待ってたんです」

「実家からじゃないわ」と、お嬢さまは封筒をチラッと見てから言った。「ただの紙くずね」

ルイーズはお休みなさいを言ってから、自分の寝室のドアからエメリンに声をかけた。マムフォード夫人がルイーズの部屋に入ると、彼女の手に開封した手紙が見えた。その顔には何か告白したいという願望が読み取れた。

「あなたに話したいことがあるの。落ち着いてね、ほんの数分ですから。この手紙、実はボウリングのやつからなの。そうです、前にもアイツから手紙をもらったことがあって、その時は仕方なく返事を書きました」

「ラブレターっていう意味?」

「ええ、残念ながら。めっちゃアホらしくて、むかつくったらありゃしない。前にも言ったように、あんな男

とは関係を持ちたくないの、マジで」

お嬢さまは、知らない人が聞いたら、マムフォード夫人との付き合いがもう何年も続いていると思われてしまう、そんな言葉づかいをよくしていた。「アイツ、先週はじめて、手紙を書いて寄こしたんです。なんて馬鹿げた内容だったことでしょ！　読んでもらえれば分かるわ。それで、アイツが言うには、シシーとの関係はすべて終わった、オレが好きなのはオマエだけだ、今までだって、これからだって、いつもそうだ・・・いかにも男どもの書きそうなことだわ。今の自分は完全に自由だとも言ってます。シシーからは求婚を断られた、それだけで十分じゃないか、ですって。今はオマエが実家を出てるんで、手紙を書けるけど、今度いつか会ってもらえないか、ですって。もちろん、会いたくないって返事を書きましたよ。アイツのふるまいは全然なってないんですもの・・・とはいっても、ホントはそう思ってないの、あたし。だって、すべて悪いのは馬鹿たれ女の姉なんですから。あたしの行動はまったく正しかったと思いませんか？」

「そう思いますよ」

「嬉しいわ。アイツ、必ずまた手紙を書いてきますよ。ああ、まったくカスばっかりだわ！」鼻の詰まった声で話してんのが聞こえてきそう。次に何をしたらいいか、教えてくださいな」

「手紙のことはもう注意を払わないか、絶対に誤解されないような返事を出すか、どちらかにすべきね」

「口汚くののしってやれ、という意味ですか？」

「まあ、なんてことを、ルイーズ！」

「でも、そうするしかないわ。あんな連中に悩まされたことなんか、あなたにはないんですよ。手紙なんか書かない方がいいわ」

エメリンは最後のやり方に賛成した。あとに残されたデリック嬢はいろいろと考えにふけっていた。

翌日、コーバーク・ロッジはどうなっているか、その情報を得るために、ルイーズは手紙を書くという決意を実行に移した。それほど待つこともなく返事が来たが、それは実に驚くべき内容だったので、彼女はマムフォード夫人がいる子供部屋へ直行した。

「どうかお願い、すぐ下に降りてきてくださいな。あなたにお話ししなきゃならないことがあるの。母が何て言ってきたと思いますか？　すぐに実家に戻らなきゃならなくなったんですって」

「理由は何ですか？」とエメリンは尋ねたが、喜んでいいのか、気の毒がっていいのか、分からなかった。

「読んでみますね・・・『親愛なるルー』って書いてあるわ。『とんでもない騒ぎを起こしてくれたわね。さぞかし満足してることでしょう。上を下への大騒ぎになっちゃって、あんなに不機嫌なパパ』・・・とは、もちろんヒギンズ氏のことですが・・・『あんなパパ、今まで見た

ことないわ。初めて会った時から見たことないわよ。B氏は『・・・ボウリングのことです・・・『もうシシーに対する想いが消えたそうよ。だから、もう自分には何も期待しないでくれって、そうパパにはっきりと言ってるわ』・・・まあ、なんて素敵な手紙を書いてくるんでしょ、母は！・・・『それは、あの男に結婚の意思があるかどうか、パパが尋ねに行った時のことよ。シシーがやきもきしてたんで、パパはそうせざるを得なかったの。全部パーだわ。もちろん、アンタのせいよ、ルー。赤の他人みたいに責めたくはないけど、すべてアンタが悪いのよ、やっぱし。シシーは海水浴にでも行かなきゃ立ち直れないんだって。それでね、昨日、マーゲート(37)のアニー伯母さんの民宿に出かけて行ったわ。気分が完全に良くなるまで、そこに滞在するんだって。パパは週に二ギニーも払わなきゃならなくなって、『こうなったら、ルーにはすぐ戻ってもらわなきゃならん。両方の下宿代なんか、払うつもりはねえからな、オレは』って言ってたわよ。パパは本気よ。すぐ手紙を書けって言われたから、アンタもできるだけ早く帰ってきてちょうだい。パパは、マムフォード夫人に対して、あと一週間分しか家賃は払わんみたい』・・・そうなんだ！　でも、戻ったりするもんですか。ずいぶんだわ！　家族みんなを喜ばせるために家を出たっていうのに、今度は家族の都合に合わせて戻らなきゃならないなんて、絶対イヤよ！」

「でも、どうするの、ルイーズ？　ヒギンズ氏の決意は固そうだけど」

「どうするって？　えっ！　そんなこと、朝飯前よ。あの爺さんにすぐ手紙を書いて、何で

も上品にうまくやって行けますって言ってやるわ。だから、ここを出るなんて、そんな気はさらさらないわ。そんなの、論外ってことが今に分かりますよ」

その晩、エメリンは夫と話し合い、義理の父親に対するルイーズの訴えがどういう結果になろうと、これをいい機会に下宿人を追い出すことで意見が一致した。お嬢さまが交渉の結末を知らせてくるまで待っておればいい。彼女に退去を命じるのは面倒だが、それはたぶんヒギンズ氏が代わりにやってくれるだろう。やってくれない場合、やる必要があることは、厄介でも自分たちでやらねばなるまい。

「こんなふうに我が家をかき乱されるくらいなら」とエメリンが言った。「あらゆる点で費用削減した方がましだわね。こんなんじゃ、まったく我が家なんて言えないもの。ルイーズは本当に嵐みたい。彼女の滞在が長くなればなるほど、それだけヤバい状態になるわ、きっと」

「そうだね。そりゃまったく好ましくないよ」と、マムフォードも同意して言った。「ところで、今日ビルトンに会ったんだけど、デリック嬢は元気ですかって尋ねてたよ。やつの顔つきも口調も大嫌いだな。ぼくたちに迷惑がかかるような、そんな悪ふざけが出まわってることは間違いない。クソったれが！」

「気にしないで。一日か二日で収まるでしょうし、あなたにとっても教訓になるんじゃないかしら、クラレンス？」

「これを考えたのは、たしかにぼくだ。そりゃ認めるさ」と、彼女の夫はかなりイラついて

答えた。「でもね、お嬢さまを適任者として受け入れたのは、ぼくじゃないぜ」

「この私でないことも確かよ！　すみませんが、思い出してくださいな。私は何度も何度も・・・」

「ああ、よさないか、エミー！　ぼくたちは二人ともへまをやらかしたんだ。そのことで言い争うのはやめよう。もっと悪い事態になるからね。仕方がないんだ。ああいった階級の人間は家に悪影響をもたらすもんだよ。彼女がここに一年もいたら、ぼくたち、お互いに物を投げ合うようになってしまうよ、きっと」

お嬢さまの抗議の手紙への返事は、ヒギンズ夫人自身の形でやって来た。昼食直前に、この御婦人は辻馬車に乗ってラニミードに参上された。散歩からちょうど帰ったところだった彼女の娘は、母が来たという知らせを聞いて、びっくり仰天した。

「アタシと一緒に帰らんといけないよ、ルー」と、ヒギンズ夫人は汗まみれの顔を拭きながら話し始めた。「今日の午後までに連れて帰るって、そう約束したの。パパはめちゃくちゃ怒ってるわ。アンタには分からんだろうがね。全部アンタのせいにしてるわよ。だから、おとなしく一緒に帰った方が無難じゃないかしら？」

「そんなこと、するもんですか」と答えたルイーズは、怒りが込み上げていた。

ヒギンズ夫人は娘をにらみつけて毒づきだした。その声は、ちょうど玄関の広間を通り抜けようとしていたエメリンに、いやが上にも聞こえてしまった。お嬢さまが負けずにやり返した

ため、数分間にわたって壮絶なバトルが続いた。他人の家ということで声の高さと悪態の言葉が抑制されていた前回の衝突と比べると、今回はその比ではなかった。

「じゃあ、帰らんのだね？」と母親がとうとう大声で言った。「ここまで来たのは無駄足だったわけね？　それじゃ、何とかいう夫人をここに呼んできてちょうだい。言いたいことがいっぱい、いっぱいあるの」

「マムフォード夫人は不在です」と、ルイーズは大胆な嘘をついた。「ありがたいことだわ。そんな錯乱状態のママに会わせたりしたら申し訳ないもの」

「アンタよりましよ、ルイーズ！　ちょっとまあ、聞きなさい。アンタ、しっかからはもうびた一文(ファージング)(38)だってもらえんのよ。まだしっかがあるだけ、ありがたいと思わなきゃ。十中八九、アンタは自分で生活費をかせがなきゃならんようになるだろうね。どうやってそうするつもりか、聞きたいもんだよ、まったく。帰宅したらすぐ、アタシは何とかいう夫人に手紙を書いて、支払い義務のある週と解約予告の週の分を除いて、もう何も支払いませんって言ってやるわ。ねえ、自分のしてることが分からんかい、ルー？　アンタが考えもつかんような、そんなマズい結果になるかもしれんのだよ」

「ちゃんと考えてるし、これまでだって考えてきたわよ。ここに好きなだけ留まって、ママにも義父(パパ)にも、お金の負担はかけやしないわ」

この修羅場への参加を要請されなかったことに、マムフォード夫人は感謝の溜息をついた。

昼食の準備中だった召使いに、ヒギンズ夫人の下品で凶暴な口撃がはっきりと聞こえたのは、非常にマズいことだった。やっとのことで玄関ドアが閉まると、エメリンは喜びで気が高ぶったが、同時に身の毛もよだった。というのも、玄関の広間から彼女の耳に聞こえてきた言葉によって、お嬢さまがここに断固として留まることがはっきりと分かったからである。

第五章　窮余の一策

デリック嬢は客間に引き下がっていたが、エメリンが驚いたことに、そこにじっとしていた。この引きこもりは悪い前兆であった。お嬢さまは何か決心を固めているに違いない。エメリンもまた心に決めていた行動のために勇気を奮い起こした。昼食が待ち受けていたが、食卓に着く前に、お互いに了解が成立していた方がよい。彼女が部屋に入ると、ルイーズは椅子の背にもたれていた。

「ケンカの声は聞こえたでしょうね、たぶん」と、お嬢さまは冷静な口調で言った。「たいへん申し訳ありませんが、ああいったことは二度と起こしませんわ」

不穏な表情だったが、彼女は自分をなんとか制御しているように見えた。ただ、声を抑えるのに非常に苦労していた。

「どうするつもりなの?」と、エメリンは優しい口調ながらも、距離を置いた感じで尋ねた。

「一つ、お願いを聞いてもらえまいかって、思ってるんです、マムフォード夫人」

返事がなかった。お嬢さまはしばらく黙ってから、感情に駆られて再び話しだした。

「ヒギンズ氏の話だと、家に戻らないと、お金はもうくれないということです。あなたに手紙を書いて、今後はあたしの下宿代に責任が持てないって伝えるそうです。むろん実家には絶対に戻らないわ。そんなこと、間違ってもしません。自分で生活費をかせいだ方がましよ・・・皿洗いの女中をしたってね。お尋ねしたいのは、マムフォード夫人、このまま置いてくださって、あたしを信用して借金をあとで払わせてくださるかどうかなんです。長い間じゃありません。必ず払うって約束します、一ペニー残らずね」

エメリンの気質を考えると、お嬢さまを衝動的に優しく受け入れてしまっても、それはそれで彼女の自然な反応だと言える。彼女は当初の目的を保ち続けるのは非常にむずかしいと思った。普通の家主のようにふるまうことは――さもしい動機に駆り立てられているように思われることは――恥ずかしくてできなかった。しかし、家庭内のストレスも我慢の限界に達していたので、ここで弱みを見せてストレスが長引くようなことになれば、夫のクラレンスがブチ切れるのは必定だと思った。

「どうか忠告させてちょうだい、ルイーズ」と、彼女は穏やかに言った。「それって賢明な行動と言えるかしら? 家に戻った方がずっと良くはないですか?」

ルイーズは自制心をすっかり失った。怒りで顔がたちまち紅潮し、目をぎらつかせながら、突如として激しく叫びだした。

「あたしを追い出したいのね？　結構だわ。今すぐ出て行くわ。あることを伝えようとしてたんだけど、あたしがどうなろうが、構わないってわけね。あとで荷物を取りに人をやります。もう長くは迷惑をかけませんわ。未払い分は耳をそろえて払います。あなたがこんな人だなんて思わなかったわ。今すぐ出て行きますよ」

「お好きなようになさって。あなたの気性はホントにもう・・・」

「ええ、分かってます。いつだってあたしの気性のせいよ。他の誰も悪くはないの。この家にはもう一晩だっていません。たとえ丘陵地で寝なきゃならなくてもね！」

お嬢さまは部屋から飛び出し、二階に駆け上がった。エメリンは、このように不当な扱いを受けて腹の虫が承知しなかったので、近寄らないことに決め、彼女を好きなようにさせておいた。お嬢さまはもう大人なんだし、自分のことぐらい自分でできるし、いずれにしても、できなければならない。おそらく、みんなが陥った苦境は、こういった悲惨な結末にしかならなかったのだろう。ルイーズも彼女の両親も、道徳的に健全な人たちが好むような、そうした理性的で穏やかな方法では対処できるはずがない。お嬢さまを家から追い出すことが刻下の喫緊事であった。もし感情の嵐を起こしながら出て行きたいのであれば、それは自分たちの知ったことではない。彼女が実家に戻るのはほとんど確実だ。今日でなくとも明日にはそうなるだろう。

十五分もしないうちに、お嬢さまの足音が階段の方で聞こえた。エメリンがテーブルについていた食堂に入ってくるだろうか？　いや、まっすぐ玄関の広間を通り抜け、玄関ドアから外に出て行った。しかしながら、ドアは実に静かに閉められた。バタンと閉めなかったことはエメリンには意外なことに思えた。お嬢さまは完全な野蛮人というわけでもなかったのである。

ほどなくマムフォード夫人はもぬけの殻になった部屋を調べに行った。ルイーズは持ち物をすべて梱包していた。もちろん無造作に大型かばんの中にぶちまけたに違いない。引き出しは、空にしたことを見せるためであるかのように、開けっ放しになっていたが、その他の点では部屋は十分こぎれいに片づけられているように見えた。きちんとした整理整頓がお嬢さまにとって当たり前のこととは思えなかった。上品な家庭の習慣に従って生活するために、この家に来てからずっと彼女がどんなに骨を折っていたか、エメリンは知らなかった。

一方、ルイーズはヴィクトリア行きの切符を手に入れるつもりで、サットン駅まで来ていた。しかし、汽車の到着まで三十分ほどあったので、彼女はどうしたらよいか分からない精神状態で歩きまわった。一つには空腹を感じていたのだ。サットンでは常に食欲旺盛であり、彼女にとって食事の時間はいつも大歓迎だった。彼女は駅の食堂に入り、心の中でぶつぶつ言いながら食事をしたが、本当なら今頃は素晴らしい昼食を家で楽しんでいたかもしれない。食事中ずっと自分の状況をあれこれと考えてみた。結局、彼女はヴィクトリア行きの切符を買う代わりに、エプソム・ダウンズ(39)行きの切符を手に入れた。汽車の待ち時間もさほど長くはなかった。

それは七月最後の暑い日のことだった。田舎の広い高原は、涼しいそよ風が時おり吹いていたが、ギラギラ絶え間なく照りつける太陽と戦うには不向きな場所だった。物思いにふけって半マイルかそこら歩いたあと、ルイーズは疲れたので日陰を探した。目の前には競馬場の醜い姿の特別正面観覧席（グランド・スタンド）がそびえ立っている。この真ん前を友だちと馬車で通り過ぎたことがあったが、その際に見た時はすごいと思ったものの、今は注意を引かれることもなかった。別の方角を見ると、丘陵地のはずれに樹木があったので、彼女はそちらに向かった。暑さと疲れで完全に参っていたが、ひとり静かになれそうな木陰をなんとか見つけることができた。そして、腰を下ろしたあと彼女が最初にしたのは、思う存分に泣くことであった。

それから一時間ほど彼女は座って考えていた。考えていると、次第に彼女の顔が木陰の薄暗がりから現われてきた。それは、悪霊に鼓舞されて思わず偽装してしまう、そんなことがよくある少々おめでたいような顔だった。やわらいだ口もとには、面白いことがつぶやかれたかのように、笑みがこぼれている。夢想がちな目には、どうやら楽しい未来が見えているようだ。彼女は近くに生えていた草の甘い茎を無意識的に引き抜いて口にした。とうとう、太陽が移動して木陰がなくなったので、彼女は立ち上がって時計を見てから、周囲をチラッと眺めて別の木陰を探した。すぐ近くに小さな森が見える。嬉しいことに、そこは草におおわれて涼しげな、乗り越えようと思えば簡単にできるような柵に囲まれた場所だった。しかし、侵入者に対する厳しい警告としての立て札が見えたので、乗り越えるのは無理だった。「あの連中」の自己中

に小腹を立てた彼女は、ぶつくさ言いながら、ぶらぶら通り過ぎて行った。

この丘陵地のはずれに沿って絵のように美しい松の並木が見えたが、毎年の冬に吹き荒れる高地特有の強風で成長を妨げられ、身を切られ、ねじ曲がっていた。ルイーズはそれに気づいたが、なんて醜い木なんだろうと、ちょっと思っただけだった。目の前には南側を除いて樹木の多い景色が広がっている。夏空の下、落ちついた色合いで、はるか遠くに見える薄霧がかかった地平線まで、その落ち着いた美しさを広げていた。陽気な仲間たちが一緒にいれば、お嬢さまはそれをめっちゃいい眺めと言っただろうし、おそらくそう思ったことだろうが、実際にはひとりぼっちだったので、そうしたものに興味が湧かなかった。それは彼女に特徴的な無関心、その時の気分に左右されることが全然ない無関心である。やがて別の木陰ができたので、それに誘われて彼女はまた横になって休み、それからまた一時間かそこら瞑想にふけった。

灼熱の太陽が弱まり、気まぐれだったそよ風もたえず吹くようになったので、散歩は楽しくなった。リボン付きの帽子とエプロン・ドレスを着て、近くで午後のティーを楽しんでいた休暇中の生徒たちの姿が見えたので、ルイーズは自分もそうした軽食をとりたいなと思った。向こうの競馬場に近い宿屋であれば、間違いなく食事ができると思い、そちらに彼女は歩きだした。この頃には落ち着いて物事を考えられるようになっていた。その晩の計画についてはすでに固まっている。すべきことは、残り一時間かそこら暇をつぶすことだけである。軽い足取りで芝生の上を歩いていると、ゴルフ場を示すチョークで引いた線に気づき、ゲームのやり方が

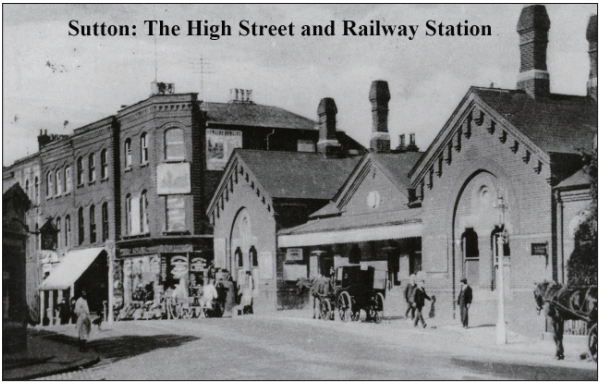
少し気になった。紅茶はすぐに買えたので、それを飲みながら彼女はできるだけ長くぶらつき、さらにしばらく丘陵地をさまよい歩き、六時半頃にサットン駅へ向かった。

サットン駅の先までは行かず、ロンドン・ブリッジ駅(40)からの汽車が到着するまで、そこの待合室でぶらぶらしていた。汽車が入ってくると、彼女は駅の出口の近くで待ち構えた。汽車から降りる人たちの中に、すぐ彼女の目はクラレンス・マムフォードの姿をとらえた。彼女はつかつかと近づき、彼の注意を引いた。

「おや！　あなたも同じ汽車でしたか？」と、彼は彼女と握手をしながら尋ねた。

「いいえ。あなたに会いたかったんで、ここでずっと待ってたんです、マムフォードさん。ちょっと一、二分、よろしいですか？」

「ここで？　駅の中で？」



「お願い・・・よろしければ」

あっけに取られたマムフォードは、脇に寄って彼女と一緒に長いプラットフォームの静かな方へ行った。ルイーズは、心配そうな表情を崩すことなく、午前中に家を出てから起こったことをすべて早口で述べた。

「非常識なふるまいで、家を出るとすぐ、申し訳ない気持ちになったわ。マムフォード夫人とあなたがしてくださった親切なことを考えると、あんな恐ろしいこと、どうしてしたのか分からないの。でも、母とのケンカで気が動転しちゃって、マムフォード夫人があたしのこと、お払い箱にしたいように見えた時は、そりゃもうみじめな思いだったわ。あたしを追い出したい気持ちなんか全然なかったでしょうし、あの方が思ってらしたように、あたしのためを思ってアドバイスしてくださっただけなのよ、きっと。でも、実家に戻ることなんてできないし、そのつもりも全然ないわ。今日の午後はずっと、あなたに会おうって待ってたんですよ。いえいえ、ここじゃありません。エプソム・ダウンズへ行って歩きまわり、それから間に合うように駅まで戻ってきたんです。それで・・・お宅に戻れるって思われますか？　今すぐってわけじゃなく、今晩で結構なんですけど。そんな愚かなことができますかね？」

純粋なあどけなさ、あるいはそう見せかけた顔で、彼女はマムフォードの顔をじっと見つめたので、目をそらさざるを得なかったのは彼の方だった。この若い男は大きな不安を感じた。

「ああ！　きっと、エメリンは喜んで今晩あなたを泊めてくれますよ、ミス・デリック・・・」

「ええ、でもね・・・マムフォードさん、あたしはもっと長く・・・数週間ほど・・・いたいんです。あたしのこと、マムフォード夫人は赦してくれますかね？　あたし、何をすべきか、とうとう決めたんです。あの方に伝えておくべきでしたわ。かんしゃくを起こしてなければ、そうしてたんですが・・・」

「そうですね」と、彼は相当とまどった感じで答えたが、他の選択肢はないと思った。「一緒に家に戻りましょうか？・・・」

「まあ！　できないわ、あたし。こんなこと、あなたに話したなんて、誰にも知られたくないんですもの。上品なことじゃありませんよね？もっとあとで、夕食後あたりに戻れればなって、そう思ってましたのよ。そうすれば、たぶん、あなたがマムフォード夫人と先に話して、そして・・・心の準備をさせられるだろうってね。

つまり、あたしが急に家を出たのはとても残念だって、そう言ってくださると思うの。そうすれば、おそらく、マムフォード夫人は・・・めっちゃ優しい方なんで・・・自分も残念だって、そうおっしゃるでしょう。そうすれば、あたしが庭に入って、そこに二人が座っておられる姿に気づいて・・・」

マムフォードは、この上なく不安な精神状態にもかかわらず、はからずも一瞬、それは実に面白いという態度を見せてしまった。お嬢さまの顔をのぞき込むと、相当うろたえた様子で、その美しい顔がパッと赤らんだ。これではさすがの彼も落ち着きを取り戻すどころではなかった。

「その間はどうするつもりなの？」

「まあ！　町に行って何か食べてから、ぶらぶらと歩きまわってるわ」

「もうすでに疲労困憊してるでしょうに」

「ほんの少しね。でも、構いません。当然の報いですから。めっちゃ感謝しますわ、マムフォードさん。帰るのを許してくださらないと、ロンドンに行って友だちの一人に頼んで泊めてもらわないといけませんからね」

「ちゃんと段取りをつけておくよ。じゃ、八時半頃に。それまでには庭に出てるからね」

お嬢さまの視線を避けるように、彼はその場をあとにし、階段を駆け上がったが、駅の出口からはゆっくりとした歩調になった。それは一つには気を落ちつけて普段の表情を装うため、

一つには今から演じる喜劇についてじっくりと考えるためであった。

エメリンは玄関口で彼を出迎えたが、彼女もまたあたふたしていたので、夫の顔つきに何か奇妙な点があることに気づかなかった。彼女は夫がすでに知っている話を繰り返して聞かせた。

「実際、いろいろ考えてみても、これで良かったと思うわ！」というのが彼女の結論だった。「ホントに出て行ってしまうなんて思いもしなかったわ。午後はずっと、また戻ってくるんじゃないかって思ってたのよ。でも、もう戻ってこないでしょう。ホントに不愉快なことが終わって良かったわ。みんなに真実だけを話してくれればいいんですがね。私たちが追い出したって、ひょっとしたらそう言うかもしれないけど、さすがそこまではしないんじゃないかしら。いろいろ欠点もあったけど、人をだましたり、悪意を抱いたりするようには見えなかったもの」

マムフォードは駅で起こったことを明かしたいという強い誘惑に駆られたが、明かそうが隠そうが、どちらも危険なことに思えた。

ほんの少しでも嫉妬の可能性が生じたら最後、夫は妻が理性的な生き物として行動してくれるという確信を持てなくなる。彼は恐ろしくて本当の真実が言えなかった。前もってデリック嬢と陰謀を企てたとはいえ、自分に悪気がなかったことをエメリンに信じてもらえなかったり、そうした状況に腹を立てて、その晩のデリック嬢の宿泊を拒んだりするといけないと思ったからである。この秘密はあとで簡単にばれてしまって、非常にマズい結果を招くかもしれないが、彼は同じような不安があったものの、最終的に秘密を守ることに決めた。

「じゃ、夕食にしようか、エミー。お腹がすいたよ。そうだね、お嬢さまがいなくなったのはいいんだけど、そんな別れ方はしてほしくなかったな。でも、かんしゃく持ちだったからね、あの子は！」

「あんなのは一度も、一度も見たことないわよ。あなたにヒギンズ夫人の言葉を聞かせたかったわ！　なんてヤバイ人たちなんでしょ、まったく！　いいこと、クラレンス、私、誓って二度と・・・」

「ぼくが悪かったよ。こんな恐ろしいことに巻き込んでしまって、ホントに申し訳ない。すべて、完全に、ぼくの責任だよ」

この点を十分に強調したことで、マムフォードはもちろん妻を上機嫌にすることができた。それで、彼女は夕食後また、お嬢さまが急に出て行ったことを残念がった。クラレンスは、家庭の平和が回復したことを祝って、今夜はいつものパイプではなく、奮発して葉巻を楽しもうと言って、すぐに妻を庭に連れ出した。

「たまらんな！　めちゃくちゃ暑かったよ。正午の事務所は華氏八五度(41)もあったんだ・・・八五度だぜ！　同僚はチョッキを脱ぎ捨てて、絹の腰帯(カマーバンド)(42)だけになってたよ。ぼくも流行を追わなきゃね。どんなふうに見えるかな、ぼくが着ると？」

「家賃がなくなること、あなた、ホントに気にならないの？」と、エメリンがほどなく尋ねた。

「馬鹿な！　十分にやって行けるさ・・・おや、誰だ、そこにいるのは？」

誰かが庭の脇道から入ってきた。その人物が誰かはすぐに明らかになった。うなだれた姿でやって来たのはルイーズで、その顔は疲労と苦悩を雄弁に物語っていた。

「マムフォード夫人・・・無理です・・・あなたの赦しを請うこともしないで・・・」

お嬢さまの声はすすり泣きで途切れた。彼女が謙虚な姿勢で立っていたので、エメリンは堪忍袋の緒が切れかかっていたものの、お帰りなさいの手を差し出すしかなかった。

「それを言うためだけに、わざわざロンドンから舞い戻ってきたの?」

「ロンドンには行ってません。ただ歩きまわって・・・一日中・・・それから、ああ、めっちゃ疲れて、みじめな気持ちだわ！　すみませんが、ひと晩だけ泊めていただけませんか？　そうしていただければ、めっちゃ嬉しいんですが・・・」

「もちろん泊まってくれていいわ、ミス・デリック。退去の予告もなかったから、あなたが出て行く姿を見るのは、本当にイヤだったのよ。でもね、あなたを止めることは不可能でした」

マムフォードは脇に寄っていたので会話が聞こえていなかった。この若い娘の性格を推測する時に、彼は心の中で困惑したことを忘れていた。お嬢さまが苦悶の表情と悔い改めを演じているなんて、彼にはとうてい信じることができなかった。実際問題として、彼女の不誠実なふるまいを非難する必要もあまりなかった。ちょっとした自分たちの隠しごとなど大した問題ではないし、それで状況の事実が変わることもない。しかしながら、一見とても非常識に思える彼女の生活の根底には何かあるのだろうか？　彼女は、自分自身の愚かな頭で考えても、おそ

らく認めたがらないだろうが、コッブという男と恋愛関係にあるはずだ、というのがエメリンの固い信念であった。実際そうかもしれないし、そうであれば、ルイーズはより興味深い存在である。というのは、彼女には人を愛する能力がない、と誰もが思ってしまうからだ。そうは言っても、マムフォードの方は、お嬢さまのことを好きにならずにおれなかった。駅でじっと見つめられてからというもの、彼女の眼がなかなか脳裏から去らなくなり、どうしても彼女のことを軽蔑のまなこで見れなくなったのだ。しかし、人妻になるとしたら、これはまた大変な女だ！　もしそうならなければ――そうならなければ――

お嬢さまが家の中に入ってしまうと、エメリンが夫に近づいてきた。

「ほーらね！　こうなるって思ってたわ。でも、困ったことになったわね」

「気にするなよ。明日か、あさってには出て行くさ」

「そうなればいいんだけど、どうだかね」

第六章　女心と秋の空

その晩はもうルイーズが姿を見せることはなかった。疲労困憊していたので、彼女は大型かばんを放置したまま、開いた窓の近くに座って、隣の家のピアノの音を聴いていたが、しばら

くするとベッドに飛び込んだ。そして十時から翌朝八時まで爆睡してしまった。

朝食時、お嬢さまの態度に見られる礼儀正しさは度が過ぎていた。彼女をもてなした夫妻の普段と変わらぬ丁寧な言葉に対して、彼女は物静かに、しとやかに返答したが、その様子は内気な少女のようだった。話しかけられた時を除いて、彼女は押し黙ったまま、頭をたれて座っていた。処女のような初々しさが漂っていた。ほとんど何も口には入れず、いつものように舌鼓を打つこともなく、どちらかと言えば、何か優美な儀式でも行なっているかのようだ。彼女がマムフォードの方へ目を向けることは一度もなかった。

ヒギンズ夫人からは切迫した手紙が届いていた。お嬢さまが降りてくる前に、エメリンと夫は手紙に目を通した。もしルイーズが一緒に住み続けるのであれば、コーバーク・ロッジからの支払いが期待できないことを十分に理解した上で、彼女をもてなすことになる。エメリンは前の日に一度ならず言及された下宿人の計画の全貌が明らかになるのを待った。提案される内容がたとえ何であれ、ルイーズがもう一日か二日ここに留まるなんて、とてもじゃないが許せることではない。今朝、エメリンは姉のグロウブ夫人からまた手紙をもらっていた。お嬢さまは生まれ育った場所に送り返すべきというのが姉の強い意見であった。

「今後いつも後悔することになるでしょうね」と彼女は夫に言った。「私たちはちゃんとした行動をとらなかった、とね。まるで詐欺行為みたいで、私はね、気がとがめてたのよ。幸運なことに、彼女のかんしゃくは我慢できないということで、弁解はできるかな。そうでなかった

ら、私は自分で自分がとても恥ずかしくなるわ」

マムフォードが出勤したあとすぐ、お嬢さまが数分ほど内々で話したいと言ってきた。

「この客間に入るたびに、マムフォード夫人、めっちゃきれいって思うんですよ。家具の備え付けに、さぞかし骨を折られたに違いありませんわ！　こんな素敵なカーテン、他で見たことなんかありませんもの。それから、あのちっちゃい衝立（ついたて）・・・あれ、めっちゃ好きだわ、あたし！」

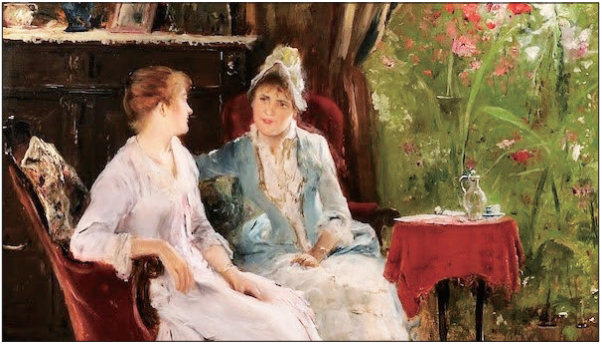
「旧友からの結婚プレゼントですよ」と、エメリンはいろんな色の刺しゅうで輝いて見える衝立を満足そうに眺めながら答えた。

「あたしが自分の家の客間に家具を備え付ける時も、手伝ってくださるかしら？」と、ルイーズが愛らしい表情で尋ねた。そして、相手を直視しながら付け加えた。「そんなに先のことじゃないのよ」

「ホント？」

「ボウリングと結婚するつもりなんです」

エメリンはお嬢さまのどんな言動にももはや腰を抜かすことはなかった。このような告白をした時のルイーズの口調や態度に、彼女は意表を突かれはしたものの、同時にまた、なぜ予想していなかったのか、自問せざるを得なかった。お嬢さまは謎めいたことを言っていたけれど、それに対する唯一の答えが、これではなかったのか？　彼女はずっとボウリング氏との結婚を



望んでいたのだ。ボウリング氏とミス・ヒギンズとの仲が決裂するように意識的に手を貸したかもしれないし、貸していなかったかもしれない。お嬢さまは義理の姉の失恋に便乗するのが本当にイヤだったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。いずれにせよ、彼女が良心を刺激されて、あらがい続けていたことは間違いない。そうだ、これですべての説明がつく。大ざっぱに言って、それはお嬢さまにとって有利な証拠となるように思えた。彼女はボウリング氏の容姿と性格をあざけっていたが、こうした新たな観点から見ると、それは自分の本当の気持ちにあらがいたいと思っていたことの証明になるのではないか。ミス・ヒギンズの前の恋人は忠誠の誓いを完全に捨てていた。そのことが明らかになり、お嬢さまは自分を犠牲にしても何にもならなかったので、本当の気持ちに従っただけのことである。

「こうしようって心に決めたのはいつなの、ルイーズ?」

「昨日のひどいケンカのあとよ。いいえ、あなたはケンカするような方じゃないわ。すべてあたしのいまいましいかんしゃくのせいよ。最後に届いた手紙の返事を午前中に書いて、ボウリングに言うわ・・・あなたに話したことを。めっちゃ喜ぶはずよ！」

「それじゃ、このことをホントに最初から望んでいたのね？」

ルイーズは椅子の肘かけのふさ飾りをグイっと引き、最後に清純な乙女のように包み隠さず答えた。

「あたしにとっては良い結婚になるって、いつもそう思ってたわ。でも、絶対に・・・どうか信じてちょうだい・・・シシーに取って代わろうなんて、そんなこと、絶対にしてないのよ。ホントのこと言うと、もう一人の・・・コッブの方がいいって思ってたんです。でもね、アイツとはマジで結婚できないと分かったの。恐ろしいことになるわ。ひどい取っ組み合いになるのは決まってるから。あたし、いつか殺される・・・きっとそうなるわ。かんしゃくを起こすと、めっちゃ暴力的になるんですもの。でも、ボウリングの方はめっちゃ立派な男だし、怒ろうとしても怒れないんです。それに、勤め先もコッブより格段上ですからね」

エメリンは先ほどまでの確信がゆらぎ、当然ながら、いらだち始めた。

「じゃあ」と彼女は冷淡に言った。「すぐ結婚するつもりなのね？」

「その話がしたいんです、マムフォード夫人。今朝、母から手紙をもらいましたか？　それじゃ、あたしの立場がお分かりですね。万事休すなんです。ここを出たら、どこに行けばいい

か分かりません。あたしがボウリングと結婚するつもりだと知ったら、たとえ戻りたくたって、ヒギンズ氏は実家に置いてくれないでしょう。シシーは怒り狂うに決まってます。あたしに対する父親の怒りが収まらないように、マーゲートからすっ飛んで帰ってくるに違いないわ。ほんの短期間でいいので、ここに置いてくださいませんか、マムフォード夫人？　ほんの数週間だけ！　この家からお嫁に行きたいんです、この家から」

聞き手は憤怒の形相で震えていたが、声を自在に操れないうちに、お嬢さまが熱心に言い添えた。

「もちろん、結婚したら、ここの借金はボウリングが払ってくれますよ」

「あなた、完全に勘違いしてるわ」と、エメリンは冷ややかに言った。「私が同意したがらないことと、お金の問題とが関係してるなんて、そんなふうに考えてるんであれば・・・」

「まあ、思ってもみませんでした・・・一瞬たりとも。あたしって厄介なお荷物なんですね、やっぱり。それは分かってます。でも、この家にいることさえ気づかないくらいに、めっちゃ静かにしてますから、マムフォード夫人。全部いったん片がついたら、八つ当たりなんかしませんから、どうか、お願い、置いてやってください！　あなたのことはめっちゃ好きです。普通の下宿屋から、お嫁に行かなきゃならなくなったら、それこそ悲劇だわ！」

「怖いの、ルイーズ・・・ホントに恐ろしいの、私・・・」

「あたしのかんしゃくが、ですか？」と、お嬢さまはさえぎって言った。「ひと言でも怒った

りしたら、その時はすぐさま追い出していいですから、マムフォード夫人！　ああ！　あなたが優しくしてくださらないと、あたし、どうしたらいいの？　我が家がないってことで、みんなに嫌われてしまうわ」

お嬢さまの顔には涙が流れている。彼女は悲嘆に圧倒され、椅子の背にもたれていた。エメリンも取り乱しており、良識が命じるままに行動するのは無理だと思ったけれども、これまでにも増して、お嬢さまの今後の行動に対する責任については、すべて御免こうむりたかった。この結婚がラニミードから始まると考えただけで、血が凍る思いだった。イヤだ、イヤだ、そんなことはまったく問題外だ。しかし、きっぱりと残酷な返事をするのも、同様にできないように思えた。また一時しのぎをしなければならない。勇気を出すのは別の日にしよう。

「私の主人と話をするまでは無理・・・はっきりした返事をするのは無理ですよ」

「ああ！　このお願いをきっと聞いてくれますよ、あの方なら」と、すすり泣きながらルイーズは言った。

「あの方」に少し強勢が置かれたので、マムフォード夫人は不快な印象を受けた。彼女は立ち上がり、近くのテーブルに置かれた花びんから盛りの過ぎた花を何本か抜き始めた。お嬢さまはほどなく静かになった。二人が話を再開しないうちに、家のドアの方から郵便配達人のノックの音が聞こえたので、エメリンはどんな手紙が配達されたのか確認しに行った。それはお嬢さま宛ての手紙だった。筆跡はエメリンに見覚えがあるコッブ氏のものである。

「もう、イヤ！」と、お嬢さまはマムフォード夫人からコッブの手紙を受け取りながらつぶやいた。「いやはや、あたしはみんなのお荷物だわ。最後は一体どうなることやら。こんなんじゃ、たぶん長生きはできんでしょうね」

「馬鹿なこと、言わないで、ルイーズ」

「そっこく家を出てってほしいでしょうね、マムフォード夫人？」と、お嬢さまは白旗をあげたように溜息をついた。

「いえ、いえ。一日か二日、じっくり考えてみましょう。やっぱり、あなたも完全には決心がついてないんでしょうから」

奇妙なことに、これに対してルイーズは返答しなかった。彼女は窓辺にたたずみ、そわそわしながら手紙を曲げたり丸めたりしていたが、開封することは考えていないようだった。マムフォード夫人は興味深げな視線を控えめに投げかけてから部屋を出て行った。日々の務めに注意を払う必要があったからだ。彼女はこれ以上ルイーズと話をしたい気にまったくなれなかった。お嬢さまは自分がひとりであることに気づくと、すぐにコッブ氏の手紙を開封した。肉太の筆跡で四ページ、長い手紙ではなかったが、いつものように力強い言い回しだった。「親愛なるミス・デリック」と彼は書いていた。「オマエが最後の手紙を寄こしたとき、いつものように虫の居所が悪い感じだったんで、オレは急いで返事をしなかったんだ。オマエがいない時に訪問したからといって、オレが悪いわけじゃねえぞ。たまたま思いがけずクロイドン(43)の

仕事があったんで、オマエに会えると思って、ちょっとサットンに立ち寄っただけさ。そこでオマエの友だちに言ったことは、すべて話してやっても構わんぞ。オレは、聞かれたくねえことを当人のいねえ場所で言うような、そんなたちの悪い人間じゃねえ。そこでしたことといや、もうオレと関係を持つなって、M夫人がオマエに説得しようとしてねえか、はっきり聞き出したことぐれえだ。あの人は、そんなことはしてねえって、あれこれ横やりも入れたくねえって、そう言ってたぞ。それだけ聞けばもう十分だってオレは答えたよ。あの人は物分かりのいい女(ひと)だったなあ。だから、オマエが害を受けることも大してあるめえ。もっとも、あの人たちにゃ害になりそうなほど、ドレスや娯楽やそんなことばっかり、たぶん考えてんだろうがな。オレが次にそっちに行こうと思った時は知らせてくれって、オマエ、手紙の最後で言ってたけど、オレに会えるのが嬉しいっていう意味なら、『ありがとよ』としか言えねえな。オマエのことは、まだあきらめるつもりはねえし、オマエもあきらめてもらいたかねえだろ。言いたいことはハッキリ言ってくれ。オマエのあとを追いかけて監視なんかしてねえからな。その点でオマエは勘違いしとるぞ。でもな、オレはほとんどいっつもオマエのことを考えてんだ。もっとオレの近くにいてくれりゃなあ。一週間か二週間したら、ブリストル(44)に行かなきゃなんねえかも。そこにゃ、たぶん一ヶ月かそこら、いることになるから、その前にオマエに会っとかないとな。七時以降で何日の都合がいいか教えてくれ。そっちの家に来てほしくねえなら、その時は好きな場所で会ってくれれば、それでいい。もう一つだけ言わなくちゃなんねえ・・・オレ

とは正直に付き合ってくれよな。待つのは構わんが、だまされたくはないからな」

お嬢さまは、時には手紙のこちらを、時にはあらちを見ながら、長い間あれこれと思案していた。彼女の表情は、笑顔とはほど遠いものであったが、何か愉快なことを考えている兆しが見て取れた。涙を流したことで、いつになく少しは真剣に思案している、そう思えるような痕跡が彼女の顔には残っていた。

正午頃、お嬢さまは二階の部屋に行って手紙を書いた。最初はシシー・ヒギンズへ・・・「親愛なるシシー、おそらくB氏があたしにプロポーズしたってこと、あんたは知りたいでしょうね。何か不服があるんなら、折り返し知らせてちょうだい・・・かしこ、L・E・デリック」・・・この手紙をマーゲートに宛てて、握りこぶしでゴツンとたたいて切手を貼った。

次の一通はボウリングに宛てられた。手紙自体は短いものだったが、少し考えて書く必要があった。「親愛なるボウリングさん・・・一番最近の手紙はめっちゃ思いやりがあって立派なものだったんで、すぐさま返事しなくちゃって思うんだけど、お望みどおりの返事は書けないわ。こういう重要な問題はじっくり長い時間をかけて考える必要があるの。共通の知り合いに対する例のふるまいについては全然とがめてないわ。すったもんだの挙句の果てに、アンタはまったく自由の身になったのよ。姉が正直にふるまわなかったのは、誰が見ても明らかで、そう言わなくちゃなんないのは残念だわ。実家にはもう二度と帰らないわ。それはもう完全に決めたことよ。こちらの家であたしに会うのは絶対に無理。特別な理由があるの。ホントのこと

言うと、お友だちのマムフォード夫人はめっちゃ気むずかしい、すぐに騒ぎ立てる人で、めっちゃ腹立たしい、かんしゃく持ちなのよ。だから、お願い、今はまだ来ないでちょうだい。あたしはすこぶる快調、穏やかに楽しい時間を過ごしてるわ・・・あらあらかしこ、ルイーズ・E・デリック」

お嬢さまは最後にコッブ氏に返事をしたためた。この手紙は、鉄道の時刻表をチラッと見ただけで、造作なく完成した。「親愛なるコッブさん」と彼女は走り書きした。「ブリストルかどこか知らないけど、行く前にホントに会わなきゃいけないんなら、土曜日にストレタム駅(45)で会った方がいいわ。あたしたちの中間あたりの駅よ。サットンから汽車で行くから、八時六分にストレタムに着くわ・・・敬具、L・E・D」

その日は木曜日だった。やがて土曜日となったが、ラニミードの状況には変化がまったく見られなかった。エメリンは勇気が出る時をまだ待っていた。お嬢さまはボウリング氏と実際に結婚するまで出て行かないだろう。そうした見通しをマムフォードは快く思っていなかったが、その可能性が十二分にあると思い始めていた。この見知らぬ男は婚約者が重ねている借金を皆済してくれるだろうか。それはまったく不確かなことに思えた。一方、お嬢さまは昼間のネズミのように身を潜めていた。事実、奇妙なほど静かだったので、まるで預言者のように、エメリンは何か――今までに経験したことのない、恐ろしい騒動――が差し迫っているのではないかという不安を抱いていた。

昼食前にデリック嬢は汽車に乗るために食事を中座しなければならないと言った。何も説明はなされなかったし、求められることもなかったが、その日は土曜だったので、エメリンは彼女の都合に合わせて食事の時間を早めましょうと答えた。ルイーズは嬉しそうにほほえんで、「それはどうも御親切に」と言った。

お嬢さまは指定した時刻までに難なくストレタム駅に到着できた。あいにく、その日の夕方は曇り空で、時おりパラパラと雨が降っていた。

「丘陵地まで散歩するのはイヤだろうな」とコッブが言った。駅の出口に立って待ってくれていた彼は、ルイーズが現われると、言葉では表わせないほど満足な表情を見せた。

「あら、アタシなら平気よ。そんなに降らないわよ。傘を持ってきたし、ぬれて困るようなものは着てないわ」

実際のところ、彼女の服装は相手に何かをアピールするようなものではなかった。コッブはいつもの外出用の服を着ていたが、それは先日ラニミードを訪問した時よりも上質なものだった。しばらく二人はひと言も交わすことなく、お互いにチラッと見ることもなく、ストレタム・コモンに向かって歩いた。やがて彼は咳払いしてから、ぶっきらぼうに「オマエが来てくれて嬉しいぜ」と言った。

「あら、アタシも会いたかったわ」

「どうして？」

「マムフォード家に留まることはできんと思うの。めっちゃ立派な人たちなんだけど、正確にはアタシのタイプというわけじゃないわ。うまくやって行けんのよ、マジで。どこに行ったらいいと思う、アタシ？」

「どこって？　そりゃ、もちろん、実家だぜ。オマエにとっちゃ最高の場所じゃねえか」

激怒して言い返されるのではないかとコッブは覚悟していたが、そんなふうにはならなかった。しばらく思案したあと、ルイーズは静かに言った。

「実家には戻れんの。めっちゃひどいケンカをやらかしたからね。最近ママとは会ってないでしょ、アンタ？じゃあ、どういう状況か、話さんといけんわね」

彼女はすべて隠し立てすることなく説明した――ただし、ボウリング氏との手紙のやり取り、そしてマムフォード夫人に話した彼との重要でないこともない関係を除いて。コッブと話す時のルイーズは、社会階級の階段を一段か二段ほど降りているようだった。言葉づかいは、

マムフォード夫妻と話す時よりも、ずいぶんとぞんざいになっていたし、声も口調も上品でなくなっていた。彼女が本来の自分に戻っていることは一目瞭然だった――自分の性格を意識して偽装することなどない人間について、そういう言い方ができればの話だが。

「それじゃ、今いる場所にいた方がいいぞ、当分の間はな」と、注意深く耳を傾けていたコップが言った。「オマエなら、やろうと思えば、そうした連中と十分うまくやれるかもしれん」

「それで結構よ。でも、支払いの方はどうすんの？　毎週いるだけで三ギニーの借金よ」

「そりゃ大変だ。そんなら結構な食事を出してもらわんと割にあわんな」と、相手はかなり意地の悪い笑みを浮かべて答えた。

「下品なこと、言わんで。毎週数シリングで生活すりゃいいって思ってるんでしょ、アンタ」

「たいていの人間はな。けど、オマエまでそうする必要はねえぞ。あのな、いいか、オマエ。今さら、あんなボウリングのやつのことで、どうして実家の連中とケンカしとるんだ？　やつとはもう会ってねえんだろ？」

彼が一瞬チラッと目をやると、ルイーズは挑戦的に頭をふって答えた。

「そうよ、会ってないわ。それでもやっぱり、アタシのせいにされんのよ。アイツをものにしようとしてるって、当然、そう実家の連中に思われてんでしょうね」

ルイーズは傘を開いた。大きな雨つぶが落ち始めており、コップの固い中折帽（フェルトハット）にもパラパラと当たっていたので、彼女は自分だけでなく彼も傘に入れてあげようとした。

「オレはいいから。ほら、オレがそいつを持ってやる。腕を組むだけで、さしやすくなるぞ。そう、それでいい。オレが一歩で、オマエが二歩だ。そう、その調子だ」

ふたたび二人はしばらく黙っていた。すでに丘陵地に到着していたが、コッブはもっとも人が行きそうにない小道に沿って進んだ。風は吹いておらず、雨は数えることができそうな、小さなつぶとして絶え間なく降っている。空も暗くなっている。

「ところで、オレにできる提案は一つだけだ」という男らしい声が聞こえてきた。「オレと結婚すりゃ、オマエ、そこから抜け出せるぞ」

ルイーズは少し笑ったが、それは冷笑的というよりも、おどおどした笑いであった。

「そうね、できるかも。でも、それって危ない方法だわ。ニワトリをさばくのに牛刀をもってする[46]ようなもんよ」

「遅かれ早かれ、そうなるさ」と、コッブはにっこりと自信ありげに断言した。

「それがアンタの胸くそ悪いとこよ」と言って、ルイーズはすねてしまい、自分の腕を引き抜いた。「アンタって、いっつも、アタシが自分で自分のこともできんような、そんな言い方すんのね。他の選択肢がないとでも思ってんの？」

「たくさんあるだろうさ、もちろん」と、相手はにこりともせずに言葉を返した。

「アタシたちって、ケンカし出すといっつも、アンタが原因なのよ」と、デリック嬢は続けて言ったが、いつになく節度のある口調だった。「アンタみたいにふるまう男なんか、今まで

いなかったわ。脅しさえすりゃ、誰でもアンタのような人間になるって、そう思ってるみたいね。アンタが愛想よくしようとしてくれてたら、ずっとうまくやって行けてたはずよ」

「全部ひっくるめて考えても、うまくやって来れたと思うがな、オレは」と、まるで疑うこともひっくるめたかのようにコッブは答えた。「別々に離れてるくれえなら、一緒にいた方がずっといいような気がするがな、オレは。でなきゃ、なんで、いつまでも会ってんだ、オレたち？　それに、オレは誰も脅したかねえ・・・特にオマエはな。そんな話し方はしてねえはずだ。オマエは男を口調じゃなく、本人の意思と行動で判断しなきゃなんねえ。どんなにオレがオマエのこと考えてるか、よく知ってるじゃねえか。オレをもてあそぶような、そんな話し方しかされねえと、もちろんムカッとするけどな。誰だってそうだぞ」

「アタシ、めっちゃ真剣よ」と、ルイーズは相手に傘をさそうとしながら言った。ただ、結果的に彼の首の後ろを水滴でぬらしただけだった。「それに、こんなに難儀するはめになった責任は、アンタにもあるんよ」

「なんでそんなことが言えるんか？」

「アンタがいなけりゃ、アタシ、ボウリングと結婚するわ、たぶん」

「えーっ、求婚されたんか？」と、コッブは彼女をじっと見つめながら声高に言った。「もっと前にどうして言わんかったんだ？・・・オマエの邪魔はしたかねえ。オマエには似合いの男だからな、やつは。いずれにしたって、決心がぐらついてる点で、やつはオマエそっくりだ」

「続けて！　どんどん言って！」と、ルイーズはぞんざいに大声で言った。「時間はたっぷりあるから。言いたいことがあれば、すべて言ってちょうだい」

うす暗い西の空から雷鳴がピストルの発射音のように聞こえてきた。すぐにコッブは歩みをゆるめた。

「これから先は行っちゃいかん。ずぶぬれになっちまうぞ。雨はやみそうにねえからな」

「何か結論が出るまでは戻らんよ、アタシ」とルイーズは答えた。彼女はコッブの前に立って目を伏せていたが、彼の方はどんどん暗くなる空を見上げていた。「アタシ、自分がどうなるか知りたいの。マムフォード夫妻はそんなに長くは置いてくれないわ。それに、必要とされない場所にいたくないの、アタシ」

「丘を下りようぜ」

ルイーズは雷の閃光にハッとした。雷がまたゴロゴロ鳴りだしたが、まだ小さい雨つぶしか降っていない。彼女は動こうとしなかった。

「アタシ、自分がどうしたらいいか知りたいの。助けることができんのなら、そう言って、アタシの好きなようにさせてちょうだい」

「もちろん、助けられるさ。つまり、オレに対して誠実になってくれればな。イの一番に知りてえのは何かといや、オマエがあのボウリングという男に気を持たせてねえかってことさ」

「そんなことしてないわ」

「結構だ、信じてやるぜ。それから、まっとうな提案を一つしてやるよ。準備ができたらすぐにでもオレと結婚してくれ。そうすりゃ、オマエ、借金はすべて払ってやるし、オレが一軒もてるようになるまで、どこか快適な下宿におれるようにしてやるぞ。ブリストルに行く前に、そうしてやれると思うぜ。その時にゃ、もちろん、オマエも一緒に行っていいぞ」

「アンタの話し方って」と、しばらく黙って聞いていたルイーズが言った。「まるで召使いと契約でもしてるみたいね」

「馬鹿なこと言うな。ちゃんと分かってるくせに。オレがどう思ってるか、何度も手紙で伝えたじゃねえか。口じゃうまく言えんのだ。おいおい、馬鹿じゃねえのか、雷雨なのに丘陵地の真ん中で突っ立ってるなんて。どんどん歩こうぜ。その傘、たたんだ方いいぞ」

「アタシが雷に打たれたって、アンタの迷惑にはならんでしょ！」

「勝手にしやがれ。そう思っとけ。わざわざ反論なんかせんからな」

ルイーズが彼の忠告に従ったので、二人は坂を下りて足早にストレタム駅に向かって歩きだした。大きな道に戻るまで、どちらも口をきかなかった。強い風が雨雲を別の方角へ運んでいたが、すでに雷鳴はやんでいた。うす暗い黄昏（たそがれ）になり、ガス灯が列をなして、ぬれた道をきらきらと光らせていた。

「どんな家、借りてくれんの？」と突然ルイーズが尋ねた。

「ああ、ちゃんとした家だ。どんなのがいいんだ？」

「マムフォード夫妻の家みたいなものかな。めっちゃ大きい必要はないんだけど」と、彼女はすぐに付け加えた。「上品そうな道路沿いにあって、恥ずかしくない地区にあるような家よ」

「オレの好きな家もそんな感じだ」と、コッブは機嫌よさそうに言った。「オレがオマエの階級を引き下げたがってる、なんて思ってるみてえだが、すげえ誤解だぞ。オレはかなりうまくやってるし、自分で分かるかぎりじゃ、もっとうまくやれそうだ。オマエに金をケチったりなんかしねえからな。その反対だ。オレが知りたいのはただ一つ、オマエがオレのために結婚してくれるかどうかってことだけだ」

彼は声を落とした。愛情を表現するためというよりは、他人が近くにいたからである。しかし、ルイーズを喜ばせる効果があったので、彼は微笑を返してもらえた。

「結構よ」と、彼女も同じように抑えた口調で答えた。「じゃ、それで手を打ちましょう」

その後の残りの時間は二人とも仲よく話しながら過ごすことができた。それは一時間ほどであったが、そんなに長い時間うまくケンカもせずに話ができたことは今まで一度もなかった。ルイーズは心も軽く浮かれ騒ぐほどだった。コッブの方は、あまりその場の雰囲気に身を任せはしなかったが、それでも希望に満ちた表情をしていた。この男に関しては、粗野は粗野なのだが、たとえルイーズが彼の表面的な怖さについて何と言おうとも、間違いなく彼女の印象に残るような、そうした容姿の繊細な美しさが際立っていた。別れ際に、彼はいつものように彼女と握手をしただけだった。

第七章　破れ鍋に綴じ蓋

その日の夕方は暇だったので、食後、エメリンは嬉しそうにフェンティマン夫人の家まで出かけた。お嬢さまは、サットンにおけるマムフォード夫妻の唯一の親友、フェンティマン夫妻との代わり映えしない交際から距離を置いていた。その主な理由は、フェンティマン夫人には家庭的な話題ばかりを好む傾向があり、懇意でない人がいるとリラックスできなかったからである。この日は夫人ひとりであったのと、子供たちもちゃんとベッドで寝ていたため、エメリンは心から歓迎された。彼女は初めて腹蔵なく厄介な下宿人のことを話すことができた。その日の雑談は穏やかで楽しいものになるはずだったが、この年長の婦人が発した言葉は彼女にとって非常に望ましくないものだった。フェンティマン夫人は夫から聞いたことを何の悪気もなく話したのであるが、マムフォード夫人は態度にこそ出さなかったものの、居ても立っても居られなくなり、その話を聞くとすぐに退散し、暗い顔で家路を急いだ。

すでに夜の十時になっていた。お嬢さまはまだ帰っていなかったが、もうじき戻ってくるはずだ。夫と二人だけで話をしたかったので、エメリンは読書中の夫を寝室に呼びつけた。

「で、今度は何ごとだい?」と、マムフォードが声高に言った。「こんなことが長く続くようじゃ、ロンドンに下宿を借りたくなるね、まったく」

「とても奇妙なことを聞いたのよ。信じられないの。何かの間違いに決まってるわ」

「いったい何だね？　ホントに、イライラしてくる・・・」

「ホントなの？　木曜日の夕方、あなたとミス・デリックが駅で一緒に話してたってのは？　木曜日よ。彼女が出て行って、夕食後にまた戻ってきた日だわ」

マムフォードは、たとえ嘘をついてでも、この自ら招いた難儀から抜け出せれば嬉しかったであろうが、そんなことをしても無駄だとすぐに分かった。彼は自分の無分別な行為の結果にむかつき、すべての男がそうであるように、自己弁護をしなければならないという見苦しい状況に憤慨し、かんしゃく球を破裂させた。

「そうさ、ホントだ。だから何だと言うんだね？　お嬢さまに待ち伏せされ、君との間を取りなしてくださいって頼まれただけさ。もちろん、そのまま帰宅して、この問題を明らかにした方が良かっただろうさ。そうしなかったのはなぜかって？　そんなことをすりゃ、馬鹿げた立場に置かれるような気がしたからさ。お願いだから、こんなアホなこと、すっかり忘れてケリを付けてくれよ！」

エメリンは、つまらない嫉妬を超越できるほど理性的な人間ではなかったが、無教養な女の本性に従って自分の感情を爆発させていたら、さぞかし恥ずかしい思いをしていただろう。彼女は「もちろんケリが付いたわ、もう興味はないけど、今まで一度だって疑ったことがないのに、そんな秘密主義の人だったことが分かって、残念に思えて仕方ないだけよ」と冷たく高慢な口調で答えた。結局のところ、お嬢さまのために自らの名誉の命令に従って沈黙を選んだ彼は、はるかに馬鹿げた立場に置かれてしまったのである。

「結論はこうだ」と、マムフォードは大きな声で言った。「お嬢さまには家から出てもらう。必要なら、ぼくが自分で彼女にそう言ってやる」

ふたたびエメリンは冷たく高慢な口調になった。

「もうこれ以上、お嬢さまとあなたとが意思疎通をはかる必要はありません。この問題は完全にミス・デリックの手に委ねましょう。実際、これ以上は彼女のことに関係しないよう、特にあなたに対して、お願いしないといけないわ」

ここでマムフォードは向かっ腹を立てた。

「ぼくのふるまいに、すでに告白した軽率な行動以外にも、何か不謹慎なことがあるとでも言いたいのか?」

「いいえ、ありがたいことに、そんなさもしいことは何も勘ぐってません」

「それじゃ、これを最後に、お互いにとって胸くそ悪い、この仲たがいをやめようじゃないか」と言って、彼は部屋を出て行った。

その場に彼の妻が残っていたのはせいぜい一分間ほどで、その後は客間に座ってデリック嬢の帰りを待っていた。マムフォードは少し離れた、夫婦で書斎と呼んでいた場所にいた。エメリンは、感心なことに、真実はすべて分かったと懸命に思おうとしていたし、当然ながら、自ら断言したように、低俗なことを心の中で想像したりもしなかった。しかし、夫を無罪放免したからといって、ルイーズに対しても寛大になる必要はまったくなかった。これまでは自分の判断に自信がなかったが、どんなに良い条件であっても、今となってはお嬢さまは下宿人としてもてなされる資格が完全にないことを確信し、ホッと胸をなでおろした。今回の鉄道駅での事件で、お嬢さまのふるまいに非難される点がないにせよ、彼女は自尊心だけでなく女性らしい淑やかさにも欠けることが証明されたではないか。エメリンは、これまで尻込みしていた状況に、今では自信をもって目を向けることができるようになった。お嬢さまの退去を主張する必要があると前からずっと思っていたが、今なら間違いなく喜んでそうできる。

お嬢さまは帰宅後すぐさま部屋に入ってきたが、この上なく明るい表情を浮かべ、大きな声で愉快そうに言った。

「あら、あたし、お待たせしたりしませんでしたよね。おひとりですか？」

「いいえ、外出してました」

「こちらも嵐になりましたか？　お話を長引かせるつもりはありません。お疲れのようですから」

「かなり疲れました」と、エメリンは遠慮がちに言った。彼女は今から話すことの本当の原因をルイーズに感づかせないようにするつもりだった。気づかれると彼女の体面を傷つけるように思えたものの、エメリンは自然な口調で話すことができなかった。

「でも、ちょっと腰かけてくださったら、嬉しいんですが」

お嬢さまは着席し、手袋を脱ぎだした。彼女には何が起ころうとしているか分かっていた。エメリンの表情に出ていたからである。

「何かおっしゃりたいことがあるんですか、マムフォード夫人？」

「私のことを薄情と思わないでいただきたいんですが、いつになったら新たな準備をされるのか、お尋ねしないといけません」

「すぐ出て行ってほしいんですね」と、ルイーズは指の爪を点検し、イライラした様子も見せずに言った。

「ここを出られた方がいいって、残念ながら言わないといけません。こういう手っ取り早い言い方をして申し訳ありませんね、ミス・デリック。ですが、単刀直入に話すのが一番いいんじゃないかしら？」

こうした当てこすりの威圧を感じたかどうかは定かでないが、お嬢さまは善意に解釈した。ある考えがやっとのことで心に浮かんだかのように、彼女は機嫌よさそうに顔を上げた。

「まったくおっしゃるとおりです、マムフォード夫人。めっちゃ親切にしてくださいましたんで、めっちゃ楽しい時間をここで過ごせました。でも、これ以上あたしがいるのは好ましくないですよね。ですから、明日いっぱい、水曜の朝まで、手紙の返事をもらうまで待ってもらえませんか？」

「構いませんよ、それ以上は遅くならないことが完全に了解されてるんであれば。すべて話してしまえないような事情が・・・個人的な事情が・・・あるんです。でも、水曜の午後までに退去なさるんであれば、大丈夫ですよ」

「それは間違いありませんわ。今から一筆したためて、できるだけ早く届くように、今晩、投函してきます」

そう言ってルイーズは立ち上がり、ほほえみながら退室した。エメリンは安心すると同時に驚いた。お嬢さまが、この重大事に、あんなに完璧な礼儀作法で、ふるまうことができるなんて思いもしなかった。かんしゃく玉の突然の破裂、横柄な言葉の突然の噴出の方が断然ありう

るように思えたからだ。よくて涙を流すか懇願するか、それぐらいだろうと彼女は予想していた。でも、まあ、すべて終わった。水曜日までに我が家ははるか昔の静けさを取り戻すだろう。はるか昔の・・・ホントに！　お嬢さまが初めて表玄関に入ってきた時から、ほんの短い日数しか過ぎていないなんて信じられない。残すはもう一日だけだ。

「あゝ、未來についての無智は、神の定めた領域を埋めるための有難い賜物なのだ！」(47)――この詩句をエメリンは学校で教わって暗唱したことがあったが、ずいぶん久しぶりに思い出した。

お嬢さまは十分間ほどで手紙を書き終えた。投函に出かけ、戻ってきてから、楽しそうな笑みを浮かべて客間に立ち寄った。「おやすみなさい、マムフォード夫人」

「おやすみなさい、ミス・デリック」とエメリンは答えたが、できれば「ルイーズ」と言いたかった。そちらの方が愛らしいからだが、その名前を自分の口から発する気にはとうていなれなかった。

約一年前のことだが、マムフォード夫妻の間でちょっとした誤解があった。それは二十四時間ほど続いたが、その間お互いにまったく口をきかなかった。気がつくと今晩も同じような状況になっていた。二人とも前回の仲たがいを思い出し、よくもまあ仲むつまじく夫婦生活が続いたものだと思った。それから何ら反感を抱くことなく十二ヶ月が経過したのだから、本当に驚きである。そのことを顧みると、マムフォードは頭を枕に置くやいなや、こう言わずにいら

れなかった。

「エミー、馬鹿な真似をしてたな、ぼくたち。何をしてたか、ちょっと振り返ってみてくれよ」

「私がどうして馬鹿な真似をしてたんですか？」というのが彼女の明快な返答であった。

「じゃ、どうして怒ってるんだい？」

「だまされるのがイヤなんです」

「ぼくだって同じように絶対イヤだぜ。お嬢さまが出て行くのはいつかね？」

エメリンが成立した取り決めを知らせると、夫は「めっちゃありがたい」という感嘆の言葉をささやくように発した。しかしながら、安らかな時を完全に回復させることはできなかった。

別の部屋では、お嬢さまが横になったまま黙って考え込んでいたが、その考えはまったく不愉快なものではなかった。彼女はすでにコッブへの手紙を書き終えていた。その中で起こったことをすべて語り、自分が何をすればよいか、水曜の朝までに知らせてくれるように頼んでおいた。アタシはもう実家に戻れない。そうしろってアンタに命令されるのはイヤだけど、アンタが好きな所に下宿してもいいのよ。今の状況はロマンチックだし、楽しい気さえするわ。アタシがどうなったか、実際に結婚するまでは、実家の者たちには知らせないでほしいの。もっとも大事な野心を完全に捨ててまで、結婚しようとしてるんだからね。それでも、やっぱり他の誰よりも、アンタの奥さんになりたいわ。もうシシーの邪魔をせず、ボウリングとの結婚を真剣に考えることがないと分かれば、すぐ義理の父は前みたいに優しく、気前よくしてくれる

はずよ。

お嬢さまはボウリングとの結婚を真剣に考えたことは本当になかったのだろうか？　しかしながら、そうした疑問が彼女自身の心に浮かぶことはなかった。もし浮かんでいたならば、この問題についての適切な反対尋問をすり抜けることはできなかったであろう。

マムフォード夫人は、翌日ルイーズと一緒に自宅で過ごす場合の苦痛を見越し、朝になると夫に対して、今日は早めの昼食をとってグロウブ夫人に会ってくると言った。

「それから、仕事が終わったら立ち寄って、私を呼び出してほしいんだけど」

「うん、いいよ」と、クラレンスは二つ返事で答えた。妻が今後は永久に自分に対して指図したりしなければいいんだが、そう彼は心の中で言い添えた。そうでなければ、こんなもめ事なんてまだ序の口にすぎないことになる。

お嬢さまは朝食時も相変わらず非常に慎み深かった。明日の退去について、彼女はそれがずいぶん前に決着したことで、今の不愉快な状況とはまったく無関係であるかのように話していた。子供の世話で忙しかったマムフォード夫人は、午前中の半ばになってやっと、早めの昼食とロンドン行きをルイーズに伝え、ひとりで放っておかれても大丈夫ですよね、と尋ねた。

「あら、構いませんよ。やることがたくさんありますから。グロウブ夫人によろしく伝えていただけますか？」

それで、二人は正午に食事をともにしたが、言葉数が少なかったものの、お互いに顔はやわ

らいでいた。エメリンは最後に育児室をのぞき、汽車に間に合うように急いで家を出て行った。彼女に不安はまったくなかった。不在中もいつもどおり特段の問題は起こるまい。

女主人の留守中、お嬢さまは気楽に過ごし、七時になると腹いっぱい食べた。今晩はコッブから返信が来ることは期待できない。出張から戻ってくるまでは、昨晩の手紙を受け取る可能性がないのだから。とはいえ、誰か、何か、言ってくるかもしれない。いつも彼女は郵便配達人が来るのを心待ちにしていた。

その日は気がめいるような天気だった。八時ちょっと過ぎに、女中が点灯したランプを持って客間に現われ、それを黒い四本脚の小テーブルの上にいつものように置いた。それと同時に、玄関ドアのノッカーを強くたたく音がドン、ドン、ドンと響いてきた。来客の合図だ！

第八章　焼け棒杭に火がつく

「誰か、あたしを訪ねてきたのかも」と、ルイーズは召使いに言った。「招き入れる前に、名前を聞いてきなさい」

「了解です、お嬢さま」と、この生意気な奉公人はなれなれしく言って、ゆっくり時間をかけてランプの傘を調整した。玄関から戻ってくると、コッブ氏がデリック嬢との面会を望んで

おられますと、ニヤニヤしながら言った。

「招き入れてちょうだい」

お嬢さまは目を輝かせながら、嬉しさのあまり興奮した様子で立っていた。しかし、彼女は最初にチラッと見ただけで、恋人が自分と違ってまったく陽気な気分でないのに気づいた。コッブは大股でやって来て、厳しい目つきで彼女を凝視していたが、何も言わなかった。

「で、アタシの手紙、受け取ったんでしょ？」

「何の手紙だ？」

彼は朝食をとってから家に戻っていなかったので、アドバイスを懇願したルイーズの手紙はまだ彼の帰宅を待っている状態だった。もどかしい気持ちで彼女は事の顛末（てんまつ）を詳しく述べた。彼女が述べ終わるとすぐ、

コッブは帽子を脇に投げ、荒々しい口調で言った。

「一体どういうつもりで姉さんに手紙を書いて、ボウリングと結婚するなんて言ったんだ？それが知りたい。今朝オマエの母親に会ったんだが、そう聞いたぞ。オマエが手紙でそう言ったのは、ほんの一日か二日前だったはずだ。こんなんじゃあ、まったくやりきれねえぞ、オレは。ホントのこと、絶対オマエに言ってもらうからな」

彼の怒りがこのような形をとったことは今まで一度もなかったので、初めてルイーズは彼のことが本当に怖いと思った。彼女は後ずさりしたが、心臓はドキドキし、舌は思うように動かなかった。

「言ってみろ、どういうつもりだ！」と、コッブは繰り返して言ったが、それは低い声だったので余計に恐怖を抱かせた。

「そういう手紙を姉さんに書いたのはホントか？」

「ええ・・・でも、本気じゃなかったわ・・・ちょっと怒らせたかっただけよ・・・」

「そんなこと、信じられると思うか？　それがホントなら、オマエ、立派なお嬢さまなんて呼んでもらえるわけねえぞ。とにかくオレには信じられん。ここに来てからというもの、オマエはやつのこと、ずっとそんなふうに考えて、手紙を書いたり会ったりしてやがったな。よくもまあ、そんなふるまいができるもんだぜ」

お嬢さまは落ち着きを取り戻しつつあった。すぐ向かっ腹を立てる気質だったので、彼女は

次第に勇気が湧いてきた。

「そうしたからって、何だって言うの？　アタシ、昨晩までに何か約束したことがあって？　自分の好きな相手と自由に結婚できたんじゃないかしら？　こんな所に来て、こんなふるまいをするなんて、一体全体どういう了見なの？　あの手紙についちゃ、ホントのことを書いたし、何でもホントのことをいつも言ってきたわ。それが気に入らないってんなら、そう言って帰りゃいいのよ」

コッブは彼女の強烈な答弁に感心させられた。彼は相手の目をまっすぐ見つめ、しばらく思案してから、激しい口調を抑えて言った。

「ホントのこと、すべて言ってないだろうが。ボウリングと最後に会ったのがいつか知りてえんだ、オレは」

「家を出てから会ってないわ」

「最後に手紙を書いたのは？」

「シシーに書いた日と同じよ。これ以上はもう質問に答えないからね」

「もちろん、いいさ。これで十分だからな。オマエは二股かけてやがったんだ。嘘ついてないとしても、人をあざむくような行動をしてたんだぞ。よくもまあ、そんなんで奥さまになろうなんて考えるな？　オマエの言うことがどうして信じられるんだ？　これ以上、もうオマエとは付き合わんからな」

彼は立ち去ろうとしたが、激しい動きのせいでオモチャのような小さい椅子をひっくり返してしまった。それは上品な家具が備え付けられた客間の床に置かれていた、完全に無用であると同時に、厄介で邪魔なものの一つであった。怒り心頭に発していたため、彼は身をかがめて元どおり立てることもせず、大股でドアの方にどんどん進んで行った。ルイーズは彼のあとを追いかけた。

「帰ってしまうの？」と、彼女はあせったような声で言った。

コッブは完全に無視したが、あと少しでドアの所に着くところで、彼女が手をかけた。

「行っちゃうの？」

その手の感触と声のせいで彼は立ち止った。そして、ふたたび彼は急にふり向き、腕に置かれていた彼女の手をつかんだ。

「なぜ止めるんだ？　今さら何の用があるというんだ？　オマエがはまり込んだ窮地から、オレは助け出してやらんといかんのか？　これでもまだ、オマエのために下宿を見つけて、骨惜しみせずにがんばれってか？　一週間もすりゃ、金輪際オレとは付き合わん、そんな手紙をもらうことになるんだろ、このオレは、結局のところ」

お嬢さまの顔は、怒りと恐怖に加えて、その小さな心と頭に浮かぶ激しい、いろんな感情で青ざめていた。この時の彼女はいつものような魅力に欠けているように見えた。いや、それどころかむしろ逆だった。その目の中に何か、相手に新たな魔法をかけてくるようなものが見て

取れた。彼はまだ彼女の片手を握ったまま、もう片方の腕をつかんで、できるだけ彼女から離れたまま、激怒した目で言った。

「まだ何か用があるんか?」

「ねえ・・・すべてホントのこと言ったのよ・・・」

彼につかまれて痛かったので、彼女は身を振りほどこうとし、後ずさりした。コッブはしばらく彼女を自由にしておいたので、彼女はさらに後方に下がったが、同時に魅力的な目で彼の心を強く引きつけていた。彼女は自分のパワーを感じていたが、この程度の力の行使では満足できなかった。

「あら、そうなの? 帰ってもいいのよ、そうしたけりゃ。でも、分かってるわよね、そんなことしたら・・・」

コッブは、欲望と嫉妬で気も狂わんばかりになり、ふたたび彼女を捕らえようとした。ルイーズはひょいと逃れたが、すぐ後ろには彼がひっくり返した馬鹿に小さな椅子が、そしてその少し先には、彩色ガラスの器と開いた笠と一緒に重いランプを支えている、同じく馬鹿に小さなテーブルがあった。彼女は後ろによろけると、そのテーブルに全体重をかけて倒れかかり、ランプを床にガシャーンと落としてしまった。ガラスが壊れる音に交じって、ルイーズからは「キャー!」という悲鳴が、彼女の恋人からは「危ない!」という叫び声が発せられた。それと同時に大きな炎がパッと天井の高さの半分あたりまで上がった。ランプの笠がメラメラと燃

えている。マムフォード夫人の結婚プレゼントである刺しゅうが施された衝立も、カーペットに広がった火炎の舌で即座に火がついた。お嬢さまのドレスも、ランプの灯油が全体に飛び散っていたので、ますます火災を手助けしてしまった。コッブが死の危機に瀕した彼女だけに気をつけたのは言うまでもない。彼は毛織の敷物をつかみ、それで彼女をぐるぐる巻きにしようとした。しかし、「痛い！」という金切り声や発狂したような身もだえで、ルイーズはありったけの力で彼の目的を阻止してしまった。

窓が開いていたこともあり、召使いが何の騒ぎかと思って駆け込んできたせいで、炎がその通風の恩恵を受けて

しまった。

「水を持ってこーい！」とコッブが叫んだ。彼はちょうどルイーズのドレスの消火に成功し、もがき苦しんでいた彼女を部屋の外へ運び出そうとしていた。

「こら、オマエたちの誰か、ミス・デリックを隣の家まで連れて行け。おーい、水を持ってこいったら！」

三人の召使い(48)は金切り声で叫びながら玄関の広間を走りまわっていた。コッブは一人を捕まえ、その腕を付け根から抜けんばかりにねじった。彼の荒々しい命令を受けて、その女はルイーズを支えて外の庭に出し、一分か二分ほど気を失っていた彼女を、そこから隣の家の門まで連れて行った。その家の住人たちはたまたま新鮮な空気を吸いに前庭の芝生にいた。すかさずルイーズは家の中に運び込まれた。その家の主人は元気いっぱいの人だったので、できるだけの手伝いをしようと火事の現場に直行した。

ランプの笠、衝立、小さなテーブル、小型の椅子は激しい炎に包まれ、悪臭を伴った煙をもくもくと出していたため、コッブは後退せずに火と戦うことができなかった。お嬢さまがその場を離れたので、彼は冷静になって、いろいろな対策を考えついた。炎が窓まで達する前に、彼は薄いカーテンを引き下ろして窓の外に放り投げ、なかなか来ない水を求めてどなり声を発した。暖炉前の敷物をはがし、火のまわりに置いて効果をあげたが、たえず新鮮な空気を吸うために後ろに引き下がる必要があった。それから、やっと手おけと金属容器が来たので、その

中の水をすべて効果的に使った。次の瞬間に聞こえたのは、隣の家の主人の声であった。

「庭にホースはあるかね？　それを蛇口につないで、ここまで引いてきてくださらんか」

庭のホースが大活躍し、ほどなく最後の炎もゆらいで消えたが、あたりは水びたしになっていた。すべての危険がなくなると、子守女が急に金切り声をあげた。この時になって初めて、二階で寝ていた幼児のことを思い出したというしるしである。子守女は女中と一緒に育児室へ駆けだし、幼児をベッドから抱きあげ、この坊やを戸外の夜風にあてさせたが、不幸な目にあった男の子は、声のかぎりにギャーギャーと泣いていた。

コッブは、家が焼け落ちるという不安がなくなると、急いでルイーズの具合を確かめに行った。彼女は化粧着に身を包んで寝椅子に横たわっていた。というのも、彼女が着ていたドレスの脇の部分と片方のそでが焼けてしまっていたからだ。彼女の悲しげな声がやむことはなかった。顔の下側に火傷（やけど）の跡ができており、彼女は近づいてくる者は誰に対しても、恐怖と苦悶の表情でにらみつけていた。医者がすでに呼びにやられていたので、コッブは彼女にラニミードはすべて大丈夫だと報告した。すぐにでも彼女自身の寝室に移動させたかったし、部外者たちも手伝おうとしてくれた。

「ああ、マムフォード夫妻は何ておっしゃるかしら？」と、ルイーズは急に体を起こしながら尋ねた。

「すべてオレに任せとけ」と、コッブは彼女を安心させようとして答えた。「オレが全部ちゃ

んとやるから、オマエは心配すんな！」

神経性のショックから彼女は動けなくなっていたので、椅子に座ったままラニミードへ、それから二階の寝室へ運んでもらった。この作業が終わった後すぐ、駅からゆっくり歩いてきていたマムフォード夫妻が庭の門に到着した。静かな通りにできた小さな人の群れ、何かこげたような臭い、興奮した召使いたちの低い声に気づいた二人は、不安そうに走ってきた。エメリンは、火事になったのが間違いなく自分の家だと知って半狂乱状態となり、大声で子供の名前を叫びだし、マムフォードは気が狂ったように庭を走り抜けて行った。

「大丈夫です」と、戸口に立っていた男が言った。「マムフォードさんですか？　大丈夫ですよ。火事になりましたが、なんとか消せました」

エメリンは子供に怪我がなかったことを知らされたが、子供の顔を見て自分の腕に抱くまでは落ち着かなかった。その間ずっと、コッブとマムフォードは廃墟と化してローソクで照明された客間で話し合っていた。

「不幸な出来事でした、マムフォードさん。オレの名前はコッブです。たぶんオレのこと、お聞きになっとるでしょうね。ミス・デリックに会いに来たんですが、ぶざまにもランプをひっくり返してしまいまして」

「ランプをひっくり返しただって！　どうしてそんなことが？　酔ってたのか？」

「いえ、でも、そう尋ねられるのも当然ですね。何かに・・・小さな椅子だったと思うんで

すが・・・つまずいてしまい、ランプの載ったテーブルに倒れかかったんです」

「どこだね、ミス・デリックは?」

「二階です。相当ひどい火傷じゃないでしょうか。医者を呼びにやったとこです」

「ここにいますぞ、わしなら」という声が背後から聞こえた。「これは残念ですな、マムフォードさん」

二人は一緒に二階へ行き、最初の踊り場でエメリンと出くわしたが、彼女は子供を両腕に抱いてヒステリーを起こしたように泣き叫んでいた。夫はなだめるように話しかけた。

「ああ、いけないよ、エミー。ビリングズ先生がミス・デリックの往診に来てくださったよ。怪我をしたのは彼女だけなんだから。おとなしく下に行って、手伝ってくれる者をミス・デリックの部屋にやってくれ。今の君じゃ、まったく役に立

たんからね」

「でも、どうしてこんなことが？　ああ、どうしてなの？」

「大丈夫、あとですべて残らず説明するよ、ぼくが。坊やはまた寝かせつけた方が良くないかね？」

エメリンは正気を取り戻すと、この忠告を受け入れて子守女を子供のベッドの横に残し、残骸と化した自分の持ち物を調べに降りて行った。あわれな光景だ。彼女が最後に出た時は、郊外に住む中流家庭の奥さまであれば、誰でも自慢するような応接室であったのに、その時に彼女が見たものは、水がしたたる壁や汚れてしまった天井に囲まれ、以前はカーペットだった所に山積みになった家具類の単なる塊だけであった。

「そうだ！　そうだ！」と、やがて彼女は強く確信したような声で叫んだが、その恐ろしい光景を前にして崩れ落ちんばかりだった。「アイツがやったんだわ！　アイツのしわざよ！私が出て行くように言ったからだわ。わざとやったに決まってる！」

マムフォードはコッブと料理女と女中を外に出しながら部屋のドアを閉めた。そして、コッブから聞いた話を繰り返して彼女に聞かせ、妻の言い分があり得ないことを力説した。お嬢さまはひどい火傷でベッドに伏している。火事は偶発的だったに違いないが、たしかに事故としては実に奇妙だ、ということを彼は指摘した。そこで、マムフォード夫人の怒りの矛先はコッブに向けられた。

「あんな男が――下層階級の野蛮人が――私の客間に何の用があると言うの？　今日の夜は私たちが留守だと知ってて来たに違いないわ」

「質問したければ、できるよ。彼は外にいるからね」

エメリンがドアを開けるとすぐ、二階から苦痛の叫び声が聞こえてきた。その声を耳にしたマムフォードは、玄関広間のランプの光でコッブの痛々しい顔が見えたので、妻にささやくように言った。

「二階に行った方が良くないかい？　ビリングズ先生が変に思うかもしれんからね」

こうしたことを考慮するように言った方が、人助けするように直に嘆願するよりもずっと賢明なことであった。エメリンは、自分自身の心労による身勝手さから、同居している友だちの苦しみに対して無関心になっている、そうした噂をされるのがイヤだった。とはいえ、コッブの前を通り過ぎる時は、厳しい口調で話しかけずにいられなかった。

「で、この原因はアンタだったのね？」

「そうです、マムフォード夫人。お宅に損害をかけたことなんですが、精いっぱい償いをさせてもらいます。オレに言えるのは、それだけです」

「償いですって！　メチャクチャにされた財産の価値について、ずいぶん変わった考えを持ってるようですね」

横柄な言動は決してマムフォード夫人の特性ではなかったが、彼女は悲惨な出来事によって

逆上してしまっていた。それは彼女本来の口調ではなく、カーペットとカーテンと装飾品をダメにされて屈辱を味わった女としての口調であった。

「オレに償わせてください」と、コッブは謙虚な態度で言った。「どんなに時間がかかっても。それから、あの哀れな子を怒らねえでください、マムフォード夫人。アイツのせいじゃないんです、まったく。オレが来るってこと、知らんかったはずです。来てくれって頼まれもしてねえんです。オレの責任です、一から十まで全部」

「テーブルをひっくり返したことが偶然だったと言うつもりなの？」

「ホントにそうなんです。アイツの代わりにオレが火傷すりゃよかったんですが・・・」

ところで、それから何週間も、彼の両手を見れば分かったように、彼は相当な火傷を負っていたが、これについては彼自身ほとんど気づいていなかった。しかし、この上ない軽蔑の視線をチラッと投げかけ、エメリンは彼をあとに残して、医者がせっせとデリック嬢を治療している部屋へと上がって行った。マムフォードは、自由に行動してよいと思ったので、コッブに手招きし、自分に続いて前庭に連れ出してから、そこで男同士の落ち着いた会話をした。

「今晩はサットンに泊まります」とコッブが言った。「明日の朝はイの一番に、アイツの具合を知りてえんで、たぶん面会は許してもらえますよね？」

「もちろんさ。先生が降りてきたら会ってみよう。でもね、君がものの見事にランプを落としてしまった、その経緯がはっきりすりゃいいんだが」

「正直に言いますと、オレたち、ケンカしてたんです。アイツのことで何か向かっ腹が立つようなことを聞いたのが原因で、馬鹿な真似をしちまいました。自分の喉をかっ切っちまいたい、今はそんな気分です、マジで。アイツに何かあったら、絶対にそうしますよ。とにかく、オレなんか、そうした方がいいんです。もうアイツは見向きもしてくれんでしょうが」

「おいおい、そんな悲観的な見方をしちゃいかんぞ」

医者が出てきたが、何か必要なものを取りに行く途中だった。二人は医者と一緒に次の道路沿いにある彼の家まで歩いて行った。お嬢さまの怪我は危険というほどではないと分かった。彼女の回復は時間と治療の問題にすぎないそうだ。コッブは火事について詳しく説明したが、話を聞いた二人は火事の結果がその程度ですんだことに驚いた。

「オマエさんも少しは火傷してるはずだ」と医者は言ったが、この奇妙な出来事について見聞きしたことに好奇心を刺激されている様子であった。「そう思ったんだが、その手は放っておいてはいかんぞ」

その間ずっと、エメリンはルイーズのベッドのそばに座って、ヒステリーを伴った悲嘆の声でなされる今回の事故についての彼女自身の――嘘いつわりのない――説明にじっと耳を傾けていた。すべては自分のせい、責任はすべて自分が負うべきだから、ヒギンズ氏に頭を下げて壊れた家具の代金を払ってもらう、せめてマムフォード夫人が赦してくだされば、などと彼女はかわいそうに体の痛みでもだえながら言ったが、血管の中の血までが熱っぽくなっていた。

第九章　災い転じて福となす

「受け取るかですって？　もちろんよ。アイツに償う能力があるのに、受けた損害をどうして我慢しなきゃならないの？　独身の割には、めっちゃ裕福みたいじゃないの」

「ああ」とマムフォードが答えた。「でも、結婚するって言うし、どうやら・・・いや、結局のところ、その、損害を出した張本人は彼じゃなかったんだし、ヒギンズ氏がお金を出してくれてたら、ぼくも躊躇なんかしなかったんだが・・・」

「損害を出した張本人はアイツに間違いないわ。アイツの粗野な、というか暴力的なふるまいのせいよ。保険に入ってたんなら、大した問題じゃないんだけど。お願いだから、今回のことを教訓にして、すぐ保険に入ってちょうだい。あなたの見方がどうであれ、絶対アイツに払ってもらいますからね」

エメリンは、お嬢さまと知り合ってからというもの、堪忍袋の緒が切れないように辛抱してきた。以前であれば、いろんな意見について検討できたが、今は違う意見がちょっと出ただけで、すぐに女の武器――気色ばんで自分の主張を繰り返すという武器――にたよるようになった。生まれつきの繊細さも退化してしまったようだ。マムフォードは口をつぐんで、今回は気だてのよい妻の長所が一時的に隠れてしまっただけだ、きっとそうだと思うしかなかった。

事件の一週間後、コッブはブリストルから手紙を送り、マムフォード夫妻が受けた金銭的な損害はいくらか、はっきり述べてくれるように正式に要請してきた。彼は弁償する覚悟ができており、その金額が分かり次第、できればそうするつもりだったのである。マムフォードは損害の証拠が必要となる、そんな申告をすることに恥ずかしさを少し感じていた。多めに見積もって、塗装と壁紙の費用を入れても、実際の損害はせいぜい五十ポンドほどだったし、エメリンでさえ過度な請求をして体面を繕いたいとは思わなかった。焼けた部屋で値のはる唯一のものはピアノだったが、それはほとんど無傷で、その他のいろんな家具も簡単に修復できた。というのは、コッブと手伝いの仲間はアマチュア消防士として無謀なことを一切していなかったからだ。床がまだ水びたしだったので、ローソクの光だけでは実に悲惨な状況に見えたが、その後の調査では、それほどではないことが判明した。安ピカ物が横行する今の時代、郊外にある一般住宅の客間に当世風の家具調度品を備える場合の費用がいかに少なくてすむか、それはもう驚くばかりである。それで、マムフォードは手紙の相手に対して、完全にダメになったのは「ほんの少しの物品」なので、お金を要求するのは自分の本意ではないけれど、コッブ氏がどうしても弁償したいと言われるのであれば、まあ、五十ポンドほど、などなど、と報告した。数日後、その金額が届いたが、ちゃんとした銀行宛ての小切手の形をとっていた。

言うまでもなく、自宅は嘆かわしいほど散らかった状態にあった。室内装飾の職人たちだけでもイヤだっただろうが、さらにイヤだったのはヒギンズ夫人が娘のベッドのそばに常駐した

ことであった。当然ながら彼女は客人として食事を一緒にすることになったし、彼女が下の階に来たい時はいつも、我慢して会話に付き合わなければならなかった。マムフォードは妻に夏季休暇をとってはどうか、万事が元どおりになるまで――それはお嬢さまが実家に戻ることを含めた言いまわしなのだが――子供と一緒に家を離れてはどうかと勧めてみた。しかしながら、これについてはエメリンがどうしても承服しなかった。そんなことをすれば、たぶんヒギンズ夫人と娘はランプを投げ合うようになるかもしれないのに、そんな状況で一時間でも気を休めて楽しく過ごせるはずがない。それから、うっかり言葉に出して相手に感づかれることはなかったものの、彼女の嫉妬心はまだ消滅していなかった。クラレンスは、お嬢さまの容態について尋ねる際に、まったく不必要なほど心配しているように彼女には見えた。お嬢さまがラニミードから永久に姿を消すまでは、彼女は既婚女性として監視と警戒を続けるつもりであった。

ヒギンズ夫人は、今回の恐ろしい事故がどうして起こったのか理解できないと、少なくとも日に二十回は言っていた。いくら娘が完璧な説明をしても糠(ぬか)に釘だった。どうやら、この出来事を解明できない謎と考えているようで、マムフォード夫人となれなれしく話す時は、小さな声でルイーズの恋人だけを非難していた。

「娘はアイツをかばってるんですよ。間違いありません。あまりいい評判は耳にしませんからね。わたくしの同意なしには、結婚なんか絶対させるもんですか」といった類の発言に対して、とうとうエメリンは快く返答するのをやめてしまった。彼女はヒギンズ夫人に対して虫唾(むしず)

が走るようになり、ありとあらゆる作戦によって彼女との付き合いを避けた。

「まあ、なんて嬉しいことでしょ」と、エメリンは苦々しい口調で夫に言った。「この通りでは、みなさんが私たちのことを軽蔑して噂してるんですからね、まったく！　もちろん、素敵な噂を広めてくれたのは召使いたちでしょう。それにウィルキンソン夫妻も」――これは隣の家の人たちだ――「私たちのこと、ちゃんとしてない人間として見てるでしょうね。フェンティマン夫人でさえ、どうしてまたあんな娘を家に置くようになったのか、まったく想像もできないって、そう昨日おっしゃってたわ。正気を失ってましたと、私も素直に認めましたよ」

「気が動転してしまってる間は」と、マムフォードは妻の取り留めのない話にイライラしながら言った。「ぼくたち、家を出て、できるだけ遠くで生活した方がいいんじゃないか？」

「ホントにそう。そうできるといいわ。サットンじゃ、幸せになれそうにないもの」

クラレンスは女の不合理さと身勝手さについてブツブツ言いながら部屋を出て行った。

お嬢さまは非常に具合が悪くて寝込んでいたが、一週間か十日ほどすると、生まれながらの強靭な体がもとに戻り始めた。顔にできた焦げ目が傷を永久に残すことはないと分かると、体も一気に回復へ向かった。マムフォード夫人は一日に一度はルイーズの部屋に来て何分間か座っていた。二人とも必要以上に言葉を交わしたくなかったものの、なんとか見かけだけは親しそうに質問や意見をやり取りしていた。例の五十ポンドがコッブから届いても、エメリンはそのことに触れなかった。しかし、翌日、エメリンが部屋をのぞくと、ヒギンズ夫人がいなかっ

たこともあり、お嬢さまは満足したような様子で言った。

「じゃ、お金を送ってきたんですね！　めっちゃ嬉しいわ」

「コッブ氏が払うと言ってきかなかったの」と、マムフォード夫人は腫れ物に触るように言った。「固辞すると、感情を傷つけることになりますからね」

「じゃ、万事オーケーってわけですね？　あたしのこと、もう悪く考えたりしませんよね？　もちろん、金輪際あたしの姿を見かけたりしないといいのにって、そう思っておられるでしょうが、それも当然ですわ。あたしだって、あなたの立場なら、きっと同じ気持ちになるでしょうからね。でも、お金は払われたことですし、いつまでも私のことを悪く思ったりなさいませんよね？」

お嬢さまは枕で体を支えて横になっていた。その青白い顔は、良くなりつつある傷とともに、彼女が何の被害者であるかを雄弁に物語っていた。片方の腕は全体に包帯が巻かれていた。エメリンは彼女に対して心をやわらげることはなかったものの、相手の率直な物言いや多少なりとも哀れを誘う微笑のために、礼儀として優しい返答を余儀なくされた。

「私はあなたの幸せを願ってますよ、ルイーズ」

「ありがとう。具合が良くなったらすぐ結婚することになるでしょうが、どこでするかは分かりません。母は、あの人の名前が出るだけで嫌気がさすみたいで、あの人のことを悪く思わせようと血まなこになってますが、まあ、言いたいように言わせておきます。実は、ちょっとまたケンカを始めてます・・・あたしたちの声が今朝も聞こえましたでしょ？　声は抑えるようにしてますが、もう長くはこちらの厄介になることもないでしょう。まずは実家に戻ることにしますわ。義理の父が思いやりのある手紙を書いてきましたんで、あたしがコッブと結婚すると知って、もちろん嬉しいんでしょうね。でも、実家で結婚するつもりはありません。むかついた顔で教会に行くのって、立派なことじゃないですからね。母とシシーが見てると、そういう顔にもなりますよ、マジで」

このことで、ラニミードから結婚式に出たいという、そうした気持ちが彼女によみがえる危険性もあったので、エメリンはすかさず話題を変えた。

ヒギンズ夫人はコーバーク・ロッジに帰宅していた。この大混乱の日々の間ずっと、あとに

残された彼女の夫は召使いたちの言いなりになっていたようだ。その晩も遅くなって、ヒギンズ夫人は戻ってくるや、汗をかきながら、あわただしく家に入り、召使いに「マムフォード夫人はどこ？」と尋ねた。

「旦那さまと一緒に書斎におられます、奥さま」

「すぐお話したいって、そう言いなさい」

エメリンが出てきたが、食堂にはランプが灯されていた。客間の方はまだ修復されておらず、住める状態ではない。エメリンは静かに、やれやれといった陰鬱な気持ちで、今度はどんな不快な思いをさせられるのかしらと思いながら、視線をそらして座っていた。でっぷりした婦人の方は、モップのようにハンカチで顔をぬぐってから、こんな天気の日に出かける辛さについて、まとまりのない話をしていたが、最後にやっと肝心の話になると、急に語気を強め、はっきりと言い放った。

「とうてい我慢できないほど腹立たしいことを聞きましたのよ。娘の評判をおとしめるなんて！　そんな連中がいるなんて、信じられますか？　シシー・イギンズのしわざですわ。あの子にはまだ確証を突きづけてませんが、これは間違いありません。途中で友だちの家に立ち寄って、たまげてしまいました。その方の名前は当然ご存知でしょうが、バクスター・ルーキン商会のバクスター氏、その姪っ子にあたるジョリフ夫人ですよ。で、みんなから何て言われてるか、彼女がこっそり教えてくれましてね。ルイーズはボウリング氏と結婚するつもりだった

けど、このサットンでどんな種類の人たちと一緒に住んでるか分かって、婚約を解消されたんですって。それから他にも、お話しできないようなことがたくさん。このことで、どう思われ・・・」

エメリンは目をギラリと光らせ、気色ばんで言葉をさえぎった。

「まったく評価する値打ちもありません、ヒギンズ夫人。そんな人たちの話を聞く耳は持ち合わせておりませんよ」

「そう言われて、腹の虫が承知しないのは当たり前です、マムフォード夫人。こんな陰口を聞いた人なんかいないでしょう！　あなたのお知り合いであれば、あなたの体面を汚すようなこと、絶対おっしゃるはずがありませんもの。ジョリフ夫人にも言ったんですが、明日か明後日にでも好きな時にここに来て・・・」

「私に会うためじゃないでしょうね。お断りし・・・」

「まあ、ちょっと、わたくしの考えを言わせてください」と、自分が口をはさんだことも忘れて、この丸ぽちゃの婦人は話

を続けた。「ルーのためにも、あなたのためにも、わたくしたち全員を納得させるためにも、これはちゃんと正す必要がありますよ。ルーが我が家を出て、知らん人たちと一緒に暮らし始めたことで、人を煙に巻こうとしてる、そういう連中が実際いるんです。それに、シシーが躍起になって、みんなに何か変だって思わせてるんですわ・・・ホントに意地の悪い子だこと！これを正す方法は一つしかありません。ルーがドレスを着て下に降りれるようになって、客間が使えるようになったらすぐ、あの子にはわたくしたちの友人を全員ここの五時のティーに招待してもらいますわ。それは自分自身の目で確認・・・」

「ヒギンズ夫人！」

「もちろん、費用はあなた持ちじゃありませんよ、マムフォード夫人・・・びた一文も。わたくしが一切ご用立てします。あなたにお願いしたいのは、ご自身の客間にただ座っていただき・・・」

「ヒギンズ夫人、すみませんが、私の話を最後まで聞いてください。とんでもないことです。そんなことをしようなどとは夢にも思いません」

相手は驚いて、にらみつけてきたが、驚きは激怒に変わりつつあった。

「でも、お分かりにならないんですか、マムフォード夫人！　これはわたくしどもだけでなく、あなた自身のためでもあるんですよ。あなたの名前が引き合いに出されるような、そんなことになってもいいんですか？」

「そんな人たちにどう思われようが、どう言われようが、それが私にとって何だって言うんですか?」と、エメリンは憤怒に駆られ、身を震わせながら大声で言った。

「そんな人たちですって！　誰のことを言ってらっしゃるか、分かっておられんようですね、マムフォード夫人。わたくしとあなた、それぞれの友だちの社会的地位が同じって、そう言わ・・・」

「そのことで言い争うつもりはございません」と、エメリンは席を立ちながら言った。「どうか記憶に留めておいてください。すでに私は面倒なことや不快な思いでひどい目にあいました。あなたが提案なさったことは、とても耐えられるもんじゃありません。きっぱりと言いますが、そんなことをしようなどとは夢にも思いません」

「それじゃ、これだけは言わせてください、マムフォード夫人」と話し相手は言って、厳然たる態度を示しながら立ち上がった。「あなたのふるまいって、あまりレディーらしくはないですわね。よくご存知のように、わたくしはケンカ好きな人間じゃありません。できれば、イヤなことは言いたくありませんが、一つだけ言わないといけない、いや、言いたいことがあります。ここで最初にお会いしたとき、あなたはご自分のことを、あとで判明することとまったく違う説明をされました。わたくしと娘にハッキリ言われたことですが、まさに最高の交友関係をお持ちということで、そのためにルーはこちらに参ったんです。あなたはそのことをご存知でしたし、今さら否定なんかされませんわよね。こちらにうかがってからというもの、あの

子の交友関係がどのくらい広がったか、知りたいもんですわ。それがわたくしの質問です。お会いできたのは、合計しても、せいぜい三人か四人でしょ。まずまずの上品さだったかもしれませんし、それを否定するような人間じゃありません、わたくしは。ですが、わたくしどもが期待したような、そんなレベルではなかったですし、その点は認められますわよね、マムフォード夫人」

ヒギンズ夫人はひと息つくために話すのをやめた。エメリンはすでにドアの所まで移動していたが、そこに立ったまま、見苦しい言い争いに発展しそうな女性特有の怒りと戦っていた。黙って引き下がったりすれば、それこそ自分に向けられた非難を恥じ入って受け入れるようなものだが、それは完全にいわれのない非難でもなかったので、彼女は少なからず苦しい思いをした。

「とても残念なことでしたわ、ヒギンズ夫人」という言葉が彼女の口から飛び出した。「私たちと社会的に同等の人でないことを知っていたのに、娘さんの受け入れに同意してしまったのです」

「社会的に何ですって?」と、その思いもよらぬ言葉に腰を抜かしたかのように、相手は声を荒げて言った。「あなたはわたくしどもよりも上だとお考えで? そりゃまあ、ありがたいことで・・・」

このようにヒギンズ夫人が皮肉を込めて話していると、ドアが開いて、ある人物が入ってき

たので、彼女は驚いて黙ってしまった。それは化粧着とスリッパ、上半身はショールだけのルイーズだった。

「口論してる声が聞こえたもんで」とルイーズが口火を切った。彼女の寝室はすぐ上で、静まり返った時刻だったので、婦人たちの怒号はベッドに横たわっていた彼女に筒抜けだったのだ。「これは一体全体どういうことなの？　さすがにヤバすぎやしない、ママ・・・」

「ルイーズったら、そんな姿で降りてくるなんて！」と、母親は娘に八つ当たりした。「マムフォード氏がいらしたら、どうするんですか？　恥を知りなさい！　今すぐ二階に戻って！」

「マムフォード氏がいらしたとして、何が悪いのよ」と、お嬢さまは平然と答えた。

「たしかに、ベッドを離れるなんて、とても軽率よ」と、エメリンはルイーズの体調を心配して言ったが、実際はお嬢さまの滞在が無期延期されることを恐れたからであろう。

「あら、ちゃんと着込んでますよ。ヨロヨロしますが、それだけです。腰を下さなきゃ」と言って、彼女はもよりの椅子に座ったが、いつもの力が出ないので苦笑いした。

「ねえ、二人とも、ケンカしないでちょうだい。マムフォード夫人、母の言うことなんか、気にしないでくださいね」

そこで、ルイーズの母親は突如として今回の不和の理由を激しく述べたてた。ジョリフ夫人の家で耳にした中傷的な話から始まり、最後はマムフォード夫人の傲慢無礼な締めの言葉についてだった。ルイーズは笑みを浮かべて聞いていた。

「ほら、いいこと、ママ」と、しばらくの沈黙のあとで彼女は言った。「あたしのためだけに、この家に大勢の知らない人たちを来させるなんてこと、マムフォード夫人に期待しちゃダメよ。あたしたち全員にうんざりしてらっしゃるし、できるだけ早く立ち退かせたいって、そう思っておられるんですから。あなたを怒らせるために言ってるんじゃありませんよ、マムフォード夫人。事実、そのとおりですよね。それじゃあ、今後のことをお話しますわ。明日の朝、あたしは実家に戻ります。ええ、マジで。もうママはここにいちゃダメよ。知らない人は誰も、ここに訪問なんかさせやしません。あたしは辻馬車で、この家からまっすぐ実家へ戻るわ。まさか危害を加えられたりはしないでしょうから」

「お医者さまの許可が出るまではやめた方がいいわよ」と、マムフォード夫人が心配そうに言った。

「朝の十時に来られるそうだから、許可を出してくださると思うわ。もう何も言うことはありません。ですから、マムフォード夫人、安心してベッドでお休みください」

その物言いに無愛想なところは全然なかった。その場にヒギンズ夫人がいなかったら、エメリンは少し優しい反応を見せていたであろう。しかし、その後も荒い鼻息の形で続いていた丸ぽちゃ婦人の非難に憤って、彼女はできるだけ厳しい口調で答えた。

「すべてお任せします、ミス・デリック、いつ退去するかの判断は。あなたに軽率なことはしてほしくありませんが、ヒギンズ夫人がここに滞在されるかぎりは、私のことを赤の他人と

思っていただいた方がよろしいですわ。私と何か連絡をお取りになりたければ、召使い経由でお願いします」

このように自分の意見を述べてから、エメリンは部屋を出て行った。そのあと彼女は書斎にいたが、ドアが少し開いていたので、お嬢さまと母親が静かに二階へ上がって行く足音が聞こえた。マムフォードは、不幸なことに自分の家でまた騒動が起こったため、読書をして気づかないふりをしていた。エメリンは、ルイーズの部屋のドアが閉まる音が聞こえてから、やっと彼に話しかけた。

「ヒギンズ夫人には明日の朝食をひとりでとってもらうわ」と、彼女は厳しい口調で言った。「たぶん昼食前には帰るはずだけど、とにかくもう二度と食卓を一緒にすることはないわね」

「分かったよ」と、マムフォードは好奇心のこの字も読み取られないように注意して答えた。

ということで、翌朝、二人は朝食を書斎に運ばせた。定刻どおり二階から降りてきたヒギンズ夫人は、食堂が自分専用になっているのに気づいたが、孤独の食事とはいえ食欲の方はいつもどおりだった。エメリンの経験したことが、もし心の奥底まで低俗な女たちの間でなされたものであったならば、この最後の数時間でヒギンズ夫人が見せた意外な沈黙と自己抑制に、彼女は一驚を喫していたであろう。こうした状況下で起こったことが実際に起こっていなかったならば、今日の朝は彼女にとって本当に忘れられないものとなっていたであろう。ヒギンズ夫人は寝室のベルをかなり頻繁に鳴らしただけだった。召使いに対する彼女の要求は、ホテルや

宿屋で発するような命令と化したが、八つ当たりするような言葉が彼女の口から出ることはなかった。これはまったくもってルイーズの影響によるものだ。というのも、お嬢さまは母親に対して、「騒動を起こすこと」はマムフォード夫人が客人たちよりも社会的に上であるという、そうした主張の正当さを間違いなく証明することになると念を押していたからである。

医者は、お嬢さまの体調の具合を見て取ると、患者が窓を閉ざした馬車で移動することに異を唱えることもなかった。単純明快な予防措置をとれば、彼女はいつでも好きな時に移動できるということである。これを見越して、ヒギンズ夫人はすでに持ち物の荷造りをすべて終えており、移動のためにルイーズもできるだけちゃんとした服装で身なりを整えていた。

「ママが自分で馬車を予約してくれるんでしょ？」と、彼女はまた二人だけになると母親に言った。

「そうね、馬車の代金を交渉するためにも、やっぱしアタシがやらなきゃね。それにしても、アンタって、すばらしい金食い虫だったわね、ルイーズ。これからはアイツに一ペニー残らず払ってもらわなきゃ」

「そう言っとくわ。間違いなく払ってくれるでしょう」

ヒギンズ夫人が外出の身支度を整えている間も、このことで二人は激しい舌戦を繰り広げていた。母親が家を出るとすぐ、お嬢さまは忍び足で階段を下り、ドアが半開きの客間に向かった。エメリンは背中を向けて暖炉の前に立っていたが、何か新しい装飾の計画について考えて

いるようで、お嬢さまの軽い足音が聞こえなかった。壁塗り職人や表具屋の仕事はすでにすんでおり、新しいカーペットも敷かれていたが、絵画はまだもとの位置に戻されていない。家具はすべて部屋の中央にまとめてある。ルイーズが部屋に入ると、やっとエメリンがふり向いた。

「マムフォード夫人、さようならを言わせてください」

「ええ、いいですよ」と、エメリンは丁寧に返答したが、笑みは見られなかった。「さようなら、ミス・デリック」

エメリンは握手をしようと前に進み出た。

「心配しないでください」と、お嬢さまは相手の顔を見ながら愛想よく言った。「お望みでなければ、二度とふたたび会うことはありません」

「あなたの幸せだけを祈ってるわ」というのが、エメリンの当惑した返答であった。「それから・・・あなたの結婚の知らせがあれば嬉しいわ」

「それについては手紙を書きますね。でも、あたしが出て行ってしまったら・・・あなたとマムフォード氏は・・・あたしのこと、悪く言ったりしませんよね？」

「ええ、ええ、そんなことしませんとも、もちろん」

ルイーズは他にも何か言おうとしたが、うまく言えなかった。彼女はエメリンの手を握りしめ、さっと向きを変えて、姿を消してしまった。三十分後、ヒギンズ夫人が予約していた馬車が到着した。すぐさま母と娘は家を離れ、馬車に乗って去ってしまった。マムフォード夫人は

なんとか退去の約束を厳守させたわけである。二人が帰ったあと、荷物類はその日のうちに取りにくると、彼女は女中から聞かされた。

＊　＊　＊　＊　＊

それから二週間が過ぎた。マムフォード夫妻は平穏で楽しい生活を取り戻したが、エメリンは完全に以前の自分に戻れたわけではなかった。二人とも自分たちが経験した恐ろしいことを口にすることはなかった。マムフォードの休暇が近づき、ある朝、二人が海辺での滞在の準備をしていると、運送業者が荷車で大きな荷物を運んできた。それは予期せぬことで中身も分からなかった。梱包材をはぎ取ってエメリンが目にしたものは、彼女が火事で失ったものと似ていないこともない客間の衝立だった。もちろん、送り主はルイーズで、憤懣やるかたないと言っていたマムフォード夫人も、コーバーク・ロッジに宛てた短い手紙で感謝の念を伝えるしかなかった。

二人は三週間ほど自宅を離れていた。戻ってくると、前の日にエメリン宛ての手紙が届いていた。それはルイーズからで、結婚報告の手紙だった。「親愛なるマムフォード夫人――一件落着と聞いて喜ばれることでしょう。あたしたちの家の準備ができるのは十月末の予定でした。ホロウェイ(49)にめっちゃ立派な家を借りたんです。ですが、言うまでもなく、ヤバいことが起こりました。ママとシシーとあたしは、めっちゃひどいケンカをしてしまい、あたしは家を出て下宿を借りることになったんです。それで、トムがすぐ結婚しなきゃいかんって言うので、二人だけでそうしたんですが、騒ぎ立てられることもなかったんで、めっちゃ良かったな

って思ってます。粗末なドレスを着て、友だちもおらず、何も持たないで結婚するのは絶対イヤって言う女の子もいますけどね。結婚したあと、トムとあたしはあることで少し気まずい空気になりましたが、もちろん彼が折れてくれたんで、これからも仲よく一緒にやって行けると思います。義理の父はめっちゃ親切で、すべての家具の支払いをしてくれて、その他いろいろと約束してくれました。あなた同様に、あたしを家から追い出せたんで、もちろん大喜びです。お分かりと思いますが、あたしはハネムーンを楽しんでるブロードステアーズ(50)で手紙を書いてます。どうかマムフォード氏によろしく伝えてくださいね。誠実な友より。あらあらかしこ。ルイーズ・E・コッブ」

そこには結婚報告のカードが同封されていた。「マムフォード夫妻へ」という金箔(きんぱく)をほどこした文字がカードの中央を占め、右上の角には「ルイーズ・E・デリック」と書かれていたが、結婚前の旧姓にはキューピッドの矢が突きささっていた。

【注】

(1) 一八四七年にロンドン・ブライトン・サウスコースト鉄道の開通でサットン駅ができてから三十年あまりで、サットンはロンドンへの通勤者が住む典型的な郊外の町となって発展し、富裕層の大きな邸宅やシティーで働くマムフォード氏のような人たちの一戸建て住宅など、あらゆるサイズのヴィクトリア朝様式の家が激増した。サットン駅はチャリング・クロス駅から南南西に直線距離で十一マイル弱。

(2) ロンドン中央部、トラファルガー・スクウェアの南側にある賑やかな広場。この辺りでテムズ河が曲流していることから生まれた地名。産業革命以降、東京の日本橋のように、道路元標としてロンドンからの距離を測る時の基準点となった。

(3) チャリング・クロスから三キロほど東、ロンドン・ブリッジの北側から北北東に走るシティーの通り。フェンチャーチ・ストリート駅は一八四一年の開業。

(4) 一八五八年に通信ケーブルが大西洋を横断して以降、イギリスは帝国主義の進展とともに電報のネットワークを国内外に築き、一九〇〇年までに世界最大の電報利用国となった。コナン・ドイルの「悪魔の足」(“The Adventure of the Devil’s Foot,” 1910) の冒頭で、ワトソン博士はシャーロック・ホームズが「電報を使える場所で手紙を書いた事実はない」と言っている。

(5) チャリング・クロスから八キロほど南南東にあるランベス区のブリクストンから南南東に走る通り。

タルス・ヒル駅は一八六八年の開業。

(6) 広告主の実家の名前。イギリスでは、家の戸口に居住者の名を書いた表札を掲げる代わりに、自分の家に名前（日本の屋号のようなもの）を付ける文化がある。コーバーク (Coburg) には綿や絹を混ぜた薄い裏地用の服地、上に十字の切れ込みのある丸パンの意味がある。

(7) ロンドンのイースト・エンド方面の下町で生まれ、そこで一生を暮らす人 (Cockney) には言語のなまりがあり、語頭の /h/ を発音しなかったり、/eɪ/ を /aɪ/ と発音したりする。

(8) ケンジントンはハイド・パークの西側の地区。一六八九年から一七六〇年まで王宮だったケンジントン宮殿の庭園としてのケンジントン・ガーデンズが有名。

(9) ロンドン北部の閑静な住宅地域。晩年ここに住んでいた詩人のコールリッジは「ハイゲートの聖者」と呼ばれた。

(10) 建築技師・発明家のジョゼフ・ハンサムが一八三四年に考案した二人乗り一頭引き二輪馬車 (hansom cab) で、御者台は後方の高い場所にある。

(11) ロンドンの旧市街地で、ロンドン市長および市会の支配する約一平方マイルの地域で、英国の金融・商業の中心地。

(12) 一九七一年以前の二一シリング（一ポンド一シリング）に当たるイギリスの通貨単位。弁護士や医師などへの各種謝礼・賞金・公共団体への出金などに常用される。ギニア産の金で鋳造したことにちなむ。

(13) ロンドン南東部、グリニッジ公園の北側の地区で、十八世紀の家々が立ち並ぶ住宅地。ワット・タイ

ラーの乱（一三八一）の中心地、イングランドで最初にゴルフ（一六〇八）が行なわれた地として有名。

(14) マムフォード家の名前は、ロンドン南西のテムズ河南岸の草原から来ており、ここは一二一五年にジョン王がマグナ・カルタに調印した地として有名。

(15) 正面玄関の両側に左右対称で主室の窓がある二戸建て住宅（double-fronted house）。

(16) イングランド南部および南東部地方の低い丘陵地帯。南部中央を西から東に広がるノース・ダウンズとドーセットシャー州西部からサセックス州の東部に延びるサウス・ダウンズがある。

(17) サットンの南五キロにあるサリー州の町。ロンドン・ブライトン・サウスコースト鉄道にバンステッド駅ができたのは一八六五年。

(18) サットンの南西五キロにあるサリー州の町。郊外に有名な競馬場があり、近くの鉱泉では下剤用の瀉利塩（Epsom salts）が作られた。

(19) 一八六六年以降、鉄道でロンドン・ブリッジ駅やヴィクトリア駅と連結されたことで、ブリクストンは九〇年代にかけて中産階級の郊外として急激に発展した。

(20) 一七五〇年のウェストミンスター・ブリッジの建設に続いて完成したロンドンからイギリス海峡に臨む英国最大の海水浴場ブライトンまでの幹線道路。

(21) ビッグ・ベンからテムズ河を東に渡る橋（一八六二年建造）。

(22) ブリクストンの西側にある地区で、十八世紀から十九世紀前半にかけてシティーの裕福な商人などの住宅地になった。ロンドン留学中に引っ越しを繰り返した漱石の最後の下宿は公園（Clapham Common）

の北側にあった。

(23) タイプライターという言葉が最初に使用されたのは、一八七三年の発売で商業的に成功したアメリカ・レミントン社で、印字した文字が見えるようになったのは、『下宿人』の出版年である一八九五年のイタリア・オリベッティ社のもの。

(24) 一八八八年にアメリカの実業家・発明家のジョージ・イーストマンがコダックカメラを市場投入し、現像サービスを提供する写真屋が登場した。

(25) イギリスでは赤ん坊の年齢について二歳前後までは通し月数（例えば、十八ヶ月）で数える場合が多い。ここでは女の子だが、作品の後半（第八章）で男の子になっているのは作者の勘違い。

(26) 仕切り壁で続きながらも二所帯がそれぞれ独立しており、二軒全体でマムフォード家のような二戸建て住宅の外観を呈している住宅 (semi-detached house)。

(27) 公園として競技や催し物などに使用される市町村の中央にある共有地で、もとは囲いがされていない牧草地・荒地などであった。

(28) ロンドン東部のテムズ河南岸にある地区で、ドックや兵器庫などがあり、もと陸軍士官学校があった。現在はグリニッジ区の一部。

(29) /m/ 音と /n/ 音が /b/ 音と /d/ 音に響いて聞こえる。

(30) ヴィクトリア駅は隣接した二つの駅を一体化したもので、西側（サットンを通るロンドン・ブライトン・サウスコースト鉄道の側）が開業したのは一八六〇年。

(31) チャリングー・クロスの北側にある劇場。一八六九年の開業で、七九年から九五年まで俳優のジョン・トゥールが舞台監督を務め、喜劇や笑劇を上演した。

(32) この座席では夜会服（evening dress）を着る慣例があった。

(33) チャリング・クロスの南八キロ（サットントンとの中間）にある共有地。ストレタムは都市化によって一八八九年にロンドンの一部となった。

(34) 十九世紀後半にフェミニストの理想を体現した女性として「新しい女（New Woman）」という言葉が流行するが、彼女たちは「家庭の天使（Angel in the House）」のような従来の伝統的女性像から逸脱し、参政権など男性と同等の権利を主張した。男性的な服装で自転車に乗るのはその象徴の一つ。

(35) 冬至前後の二週間（halcyon days）は穏やかな天候が続く。ギリシャ神話のアルキュオーンは冬至頃に海上で巣ごもり、風波を鎮めて卵をかえすと想像された鳥で、カワセミと同一視される。

(36) ヒギンズ氏は自助の精神と特別な縁故で社会的地位を得て金持ちになったと思われる。前夫の娘を連れたヒギンズ夫人もまた、その美貌で彼と再婚することで、上の階級へ成り上がっている。

(37) イングランド南東のケント州の東端にある海岸保養地。

(38) ファージング硬貨（farthing）のこと。一八六〇年から一世紀ほど使用された青銅貨で当時の最小通貨単位。否定構文で使用する。

(39) ここには大きな競馬場（最初のレースは一六六一年）があり、有名なダービーやオークスの競馬が行なわれていたので、エプソム・ダウンズ駅が一八六五年に開業した。

(40) ロンドン・ブリッジの南東に隣接するロンドン・ブリッジ駅は一八三六年の開業。
(41) 摂氏温度（華氏温度から三二度を引いて九分の五を掛ける）で約三十度。華氏温度は、ドイツ人のファーレンハイトが一七二四年に提唱した温度目盛りで、水の氷点を三二度、沸点を二一二度とする。
(42) 男の夜会服でチョッキの代わりとなる絹地などの幅広のサッシュ・ベルト。
(43) ストレタム・コモンのあるランベス区の南側の自治区で、ロンドン盆地南部の丘陵地帯。
(44) イングランド南西部、エイヴォン川の河口に近い商工業都市。
(45) 現在のストレタム・ヒル駅（ロンドンのヴィクトリア駅から九キロ）の前身で、一八五六年の開業。鉄道は当初からロンドン・ブライトン・サウスコースト鉄道によって運行されていた。
(46) 英語は「クルミを割るのに大ハンマーを使う」で、小さなことを処理するために大袈裟な方法をとることを例えた表現。
(47) 出典はアレクザンダー・ポウプの『人間論』(Alexander Pope, *An Essay on Man*, 1733-34)「書簡一（三）」岩波文庫、上田勤訳、一九五〇年、二〇頁。
(48) 中産階級のステータス・シンボルは召使いがいることで、最底辺の家庭でも体面維持のために通いの子供を雇って無給で食事を与えるだけのことがあった。裕福な大家族の場合は七人（料理人、女中、女中頭、執事、従僕など）以上も雇っていた。
(49) ロンドン北部のイズリントン自治区には北西から南東へ大通り (Holloway Road) が走っている。女囚を収容したホロウェイ刑務所（一八五二年完成）が有名。

(50) マーゲートの南東に位置する海岸保養地。一八三七年から五一年まで毎年のように夏をここで過ごしていたディケンズは、「我がイングランドの海水浴場」(“Our English Watering Place,” 1851) の中で、この場所について「空、海、海岸、そして村がまるで絵を描いてもらうためであるかのように眼前に静かに横たわっている」と記している。

あとがき

【作者について】

ギッシング（George Robert Gissing, 1857-1903）は、一八五七年一一月二二日（日曜日）、イングランド北部の都市リーズの南十六キロにある大聖堂の町、バラ戦争の古戦場として有名なウェイクフィールドで生まれた。彼の父親は町の中心街に店を構えていた薬剤師で、地方の植物を調査して出版した書物も何冊かあり、古典を中心とした文学や教養を志向する点において息子に大きな影響を与えた。一方、無教養で福音主義を妄信していた母親は愛情に欠け、息子を愛撫することもなかったので、ギッシングは嫌って避けていたようである。

ギッシングは十三歳の時に父親を肺充血で亡くした。それは一八七〇年の暮れで、彼が尊敬する先輩作家で父親が居間の壁に肖像画をかけていたディケンズの死の半年後だったので、文学を中心とする学問に秀でた教養人を目指していたギッシング少年にとって、父親とディケンズが心の中でメンターとして重なっていたことは想像にかたくない。ギッシングには四人の弟妹たちがいたが、まだ幼すぎて彼の知的な話し相手になれなかったため、彼の生活に孤独と不幸の影が射すようになった。それで、ギッシングはチェシャー州の寄宿学校に入れられることになり、そこで睡眠を五時間半に定めて猛勉強し、特に古代と現代の言語と文学に興味を覚え

た。十五歳になると、秀才の誉れが高かったギッシングは、オックスフォードかケンブリッジの学者になるだろうと将来を嘱望され、やがて奨学金を得て現在のマンチェスター大学の前身であるオーエンズ・カレッジに入学した。

マンチェスターで一人暮らしを始めたギッシングは、勉学中心の生活による孤独のせいで、十七歳の街の女、ネル（Mariamne Helen Harrison, 1858-88）を愛するようになった。オーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた一八七六年二月、ギッシングは淋病に感染したにもかかわらず、ネルを社会の犠牲者と考え、お針子として更正させるために大学のロッカー室で友人の金、書籍、衣類を盗んでミシンを買い与えたりしたが、彼女は飲酒癖があって金のために売春をやめなかった。最終的に、ギッシングは三月末に張り込み中の刑事に逮捕され、有罪の判決を受けて放校処分となっただけでなく、一ヶ月の監禁と重労働を言い渡され、合格していたロンドン大学入学の許可も取り消されてしまった。この事件は、「堕ちた女」のために学者としての将来を棒にふることになったギッシングのトラウマとなり、自分を社会から追放されたエグザイルと考えた彼は、自己否定的な言動と悲観的な人生観に支配されるようになった。

釈放後、ギッシングはウェイクフィールドに帰郷したが、犯罪で後ろ指を差された「黒い羊」は新天地アメリカへという当時の慣習に従い、一八七六年九月、リヴァプール港からボストンへ出立した。ギッシングのアメリカ生活は一年あまり続いたが、同時に彼の文学的才能を発揮させることにもなった。ボストンでは美術館で見た絵画についての記事を定期刊行物に書いた

り、シカゴに移って餓死の恐怖におびえた時には、ホテルの談話室に座って二日で短篇小説を書いたりした。この最初の作品「親の因果が子に報う」(“The Sins of the Fathers”)は十八ドルで売れ、一八七七年三月一〇日の新聞『シカゴ・トリビューン』に掲載された。この作品の冒頭部分にはギッシングの初期作品群に特有の労働者階級の貧困に関する自然主義的な描写がすでに見られる。それから、ギッシングは地元の雑誌に短篇小説を売りながら生計を立てていたが、ミシガン州のトロイでは数日間をピーナッツだけで食いつなぐほど金欠病に苦しんだ。そして、旅の写真屋のアシスタントとして数ヶ月ほどニューイングランドを放浪したのち、同年九月、万策つきたギッシングはイングランドへ帰国することになる。

ボストンから船に乗ったギッシングがリヴァプール港に着いたのは一八七七年一〇月三日で、六週間ほど故郷のウェイクフィールドに滞在したが、直ちに作家として身を立てるべくロンドンへ上京し、その後すぐ呼び寄せたネルと同棲を始めた。それは強烈な孤独感と抑圧された性欲に耐えられなかったからである。一〇月二七日、彼はリージェンツ・パーク東のセント・ジェイムズ教会でネルと正式に結婚したが、アルコール中毒の彼女が隣近所で起こす頻繁なトラブルや反抗的な言動のせいで、彼の生活は生き地獄さながらであった。

そうした中で、ギッシングが家庭教師や不定期な仕事をしながら仕上げた処女作『暁の労働者たち』(*Workers in the Dawn*, 1880)は、一八七三年から始まるイギリスの慢性的な経済不況による労働者たちの貧困が原因の様々な社会問題に対する抗議の書であったが、出版拒否の憂き

目にあっただけで、結局は父親の遺産を使って自費出版せざるを得なかった。一八八二年になると、ギッシングはもはやネルとの生活に我慢できなくなり、定期的に少しの手当を与えて別居するようになった。その後もギッシングは短篇や中篇を書いていたが、出版社からは買い取りを拒まれ続けた。だが、『無階級の人々』(*The Unclassed*, 1884)はチャップマン・アンド・ホール社の原稿閲読者で、夏目漱石が大きな影響を受けたジョージ・メレディスに高く評価された。「芸術家は、自分自身の苦しみが極限にある時でさえ、それを作品の素材にできなければならない」(第二五章)と述べる売れない小説家で、容姿も作者によく似た主人公のオズモンド・ウェイマークは、ギッシングの一連の代表作に登場する貧乏な若い知識人たちの露払いとなっている。

これら初期の作品群で、ギッシングは都市の中心部でゲットー化されたようなスラム街の貧困と悲惨な生活を同情的に描いているが、同時に貧民たちに対しては非常に反感的な描写が見られる。それは自堕落な労働者たちが貧民街で身についた生活習慣をどうしても改めようとしなかったためである。彼らの悪癖が直ることはないという確信は、人間の意志や努力では変更できないとするギッシングの人生観と合致している。その結果、ギッシングは自分の作品で真理を追究すべきテーマは下層階級の人間ではなく、商業社会における生存競争で必要とされる実践的な知識のない、自分とよく似た教養のある知的な若者の苦悩であることを悟るようになった。その証拠に、オーエンズ・カレッジ時代からの学友であるモーリー・ロバーツに宛て

た一八九五年二月一〇日付けの手紙では、「私の作品でもっとも特徴的な、もっとも重要な部分は、私たちの時代に特有の十分な教育を受けて育ちもいい、しかし金がない階級の若者たちを扱っている部分です」と語っている。

一八八〇年代後半になると、ギッシングは貧困やスラム街といった社会問題の路線から一時的にそれ、若者たちが都会の貧困生活から逃れて結婚によって上の階級に入ろうとする作品を書き始めた。初めて貴族的な田園を背景として書かれた『イザベル・クラレンドン』(*Isabel Clarendon*, 1886)は、ギッシングの作品に典型的なタイプの自己否定的で内省的な主人公、バーナード・キングコートに関する性格小説である。同様に社会小説から離れようとして一八八五年に完成していた『人生の夜明け』(*A Life's Morning*, 1888)は、ギッシングを世に出してくれたメレディスの『リチャード・フェヴェレルの試練』(*The Ordeal of Richard Feverel*, 1859)の影響が大きい作品である。教育を受けたために生まれ育った環境から離れたものの、貧乏でどこにも所属できずにエグザイルの生活を余儀なくされるギッシングの主人公たちの女性版、エミリ・フッドは道徳的・精神的問題においてジョージ・エリオットを想起させるような性格分析がなされている。

下層生活の場面を切り捨てないように忠告したメレディスに従って、ギッシングは『民衆』(*Demos*, 1886)で貧民街のテーマに戻ったが、労働者たちの目標や能力への期待を裏切られたことで、この小説では彼らに対する共感が消えてしまった。「個人としての貧乏人に対しては

所持金のすべてを与えるが、連中が階級として立ち向かってくる時は、情け容赦しないぞ」（第二九章）という斜陽階級のヒューバート・エルドンの言葉は、労働者の個人と集団に対するギッシングの両価感情を示している。次の作品『サーザ』(*Thyrza*, 1887) では、ウォルター・エグレモントという若い裕福な理想主義者が労働者階級の知的解放の手段として講演によって労働者たちを教化しようとするものの、その試み自体が辛辣に批判されている。この小説でも、ギッシングの初期小説群と同様に、階級間の境界を越えた愛は破滅する運命にあり、社会のそれぞれの階層は互いに交わらず、自分の階級の流儀に従うべきだということが再認識される。

一八八八年二月の後半、ギッシングはイギリス海峡に臨む行楽地イーストボーンで気分転換をしていたが、その月の二九日の夕方にネルの死を伝える電報をもらい、ロンドンのランベス区にあった彼女の下宿へ向かった。翌月の一日に妻の遺体が置かれた汚い下宿を見て、ロンドンでの青春時代に体験した社会的な不公平に対する激しい怒りがよみがえったギッシングは、その後すぐ正視に耐えないほど悲惨な貧困の場面を活写した『ネザー・ワールド』(*The Nether World*, 1889) を完成させた。

悪妻を養う義務から解放されたギッシングは、この小説の版権料百五十ポンドを旅費にあて、一八八八年九月二六日、長年の夢であった大陸旅行に出かけた。汽車でマルセイユまで行き、そこから船でナポリに渡り、ローマ、フィレンツェ、ヴェニスなどを五ヶ月かけて旅した。この旅行が特筆に値するのは、それを境にギッシングの関心の対象と作風が大きく変化し、一線

を引いたように彼の作家人生を二つの時期に区別できることである。ギッシングは、それまでの社会批判の視座としての労働者階級と貧困に関する自然主義的な描写をやめ、自分が帰属意識を持つ中産階級の人々とそのマインドセットの探求を志向するようになったのである。具体的には、中産階級で教育を受けた繊細な性格で精神的に脆弱な若者が、ヴィクトリア朝後期の時代精神と社会風潮になじめずに犠牲となる様子を活写し、女性の社会的束縛、現代文明の卑俗性、利己的な競争心、文学の商業化、自己欺瞞的な道徳観といったテーマを論じた。

その結果、小説家としてのギッシングの素晴らしい作品が陸続と誕生した。大陸旅行中のヴェニスで着想を得てから帰国して書いた小説『因襲にとらわれない人々』(*The Emancipated*, 1890) で、ギッシングは教育を受けて自由を謳歌する聡明な美しい女性が嘘つきな洒落者との結婚生活に幻滅する姿を描き、十九世紀後半に最高潮に達する「ウーマン・クエスチョン」を提起している。この小説が完成した一八八九年一一月、ギッシングは二度目の地中海旅行に出かけたが、最後のナポリ滞在中に四年後の彼の死因となる肺病の兆候が現われ始めた。翌九〇年三月の初旬にロンドンに戻ったギッシングは、『三文文士』(*New Grub Street*, 1891) の執筆に取りかかったが、実際には仕事がなかなか進まなかった。その主な原因は、ドイツ人の友人エドゥアルト・ベルツ宛ての九月二四日付けの手紙で、「教養があっても貧乏な男は自分と同じような女性が貧困を共にしてくれるなどと期待すべきでない」と語っているように、そばに女性がいないことによる孤独感であった。

『三文文士』の校正刷りを読んでいた九月二九日、孤独に耐えられなくなったギッシングは、オックスフォード・ストリートのミュージック・ホールで出会った労働者階級の二三歳の女性イーディス(Edith Underwood, 1867-1917)に声をかけた。翌九一年二月二五日、ギッシングは彼女とリージェンツ・パーク北東部のセント・パンクラスの戸籍登録所で結婚したが、その場にギッシング家の者は誰も同席していなかった。最初の妻が売春とアルコール中毒で見るも無残な最期を遂げたあとも、ギッシングがイーディスと同じような結婚をしたのは、中産階級の知的な女性とは結婚できないという悲観的な自己否定の結果であると同時に、性欲を抑制できないために女性の教養の欠如を無視せざるを得なかった結果だと言ってよい。しかし、精神的および肉体的に満たされない気持ちから労働者階級の女性と関係を持って陥ることになる流離落魄の境遇にもかかわらず、彼の教養に対する深い傾倒は死ぬまで揺らぐことがなかった。

このような作者自身の体験が色濃く反映され、文筆生活の苦難を描いた『三文文士』は、出版当時の書評家の多くが好意的に評価し、現代の批評家たちからもギッシングの最高傑作と見なされている。文学もまた当時の商業主義に支配されており、芸術至上主義を唱える主人公エドウィン・リアドンは破滅する運命にある。この小説では、商売としての文学や俗受けを狙ったジャーナリズムの読者に迎合することなく、貧困にあえぎながらも世に認められようと苦闘する作家の姿がリアルに描かれ、そうした時代の影響力が人間関係をいかに歪めているかも明らかにされている。

ギッシングはイーディスと結婚してから、『三文文士』で得た百五十ポンドをもとにロンドンの喧騒を逃れてイングランド南西部デヴォン州の田舎町エクセターで新生活を始め、その年の一二月に長男ウォルターが生まれた。彼が結婚後の半年で仕上げた『流謫の地に生まれて』(*Born in Exile*, 1892) の舞台はエクセターである。作者同様に父親が薬剤師の資格を持ち、学問的なハードワークで出世しようとする主人公、ゴドウィン・ピークは自分を環境の犠牲者と思って現実逃避し、自分の道徳観念の欠落を無産階級だった祖先からの遺伝のせいにする点で、ギッシング作品の底流をなす自然主義の代表的人物だと言える。三巻本形式のヴィクトリア朝の長篇小説の伝統を破って、ギッシングが初めて一巻本形式で書いた中篇小説『デンジル・クウォリア』(*Denzil Quarrier*, 1892) は、同名の主人公が過激化した政治思想のために政府転覆の危険な陰謀に巻き込まれる政治小説であるが、その妻の心理描写を通して女性の権利に関する作者の好意的な見解も示されている。

次の作品『余計者の女たち』(*The Odd Women*, 1893) は女性の権利がメインテーマとなっており、フェミニズムの古典として今なおフェミニスト批評家によって論じられることが少なくない。この小説の出版後、「どんな社会平和も女性が男性と同様に知的な訓練を受けないかぎりは成就されない」と言ったギッシングが、従来の良妻賢母型の「家庭の天使」に代わる「新しい女」のヒロインを描き、教育の機会、職業の選択、財産の相続における男女不平等の実態に読者の目を向けた。ただし、彼が共感を示すのは、あくまで教養としての教育を受けて洗練

された感受性を持つ女性たちであった。

この頃、『三文文士』でも述べられているように、一般大衆は短い形式の読み物を要求し始めており、三巻本形式の小説は文学市場から消え去ろうとしていた。一八九四年四月に完成した『女王即位五十年祭の年に』(*In the Year of Jubilee*, 1894)は、ギッシングにとって最後の三巻本形式の小説であった。これは結婚問題と産業社会における価値観の腐敗についての物語で、大量生産による商業主義や卑俗な広告、大衆教育によって新たな力を得た労働者階級が社会全体に及ぼす影響に対するギッシングの嫌悪感が見られる。

ギッシングは、一八九四年から九八年にかけて、いつもの長篇小説とテーマから離れて四つの中篇小説、すなわち悲喜劇的な恋愛と自己犠牲の物語『イヴの身代金』(*Eve's Ransom*, 1895)、ギリシャ旅行を終えた作者の古典を中心とした教養への傾倒が十八歳の若者を通して示される『埋火』(*Sleeping Fires*, 1895)、成金の義理の娘が上の階級の礼儀作法を学ぼうとして失敗する『下宿人』(*The Paying Guest*, 1895)、訪問販売をしながら他人の噂話を楽しむ男と短気で元気いっぱいの若い女性がロンドンを縦横に歩きまわる『都会のセールスマン』(*The Town Traveller*, 1898)を書いた。これらは出版社に依頼されて金稼ぎのために書かれた作品だが、遺伝と環境の因果律の影響下にある人間を赤裸々に描出する自然主義の作家と思われていたギッシングは、ここでコントラストの技巧によって読者が悲劇的あるいは喜劇的な状況を予見できるようなアイロニーの隠れた才能を示している。これらの小説は出版社によって戦略的

に市場に出され、売れ行きも悪くなかった。ギッシングのキャリアの中期において、長篇小説の売れ行きは相変わらず芳しくなかったが、中篇小説と短篇小説の方は比較的高値で出版社に買い取られ、結構な儲けとなっていた。

ギッシングの二番目の妻、イーディスは最初の妻ネルと同じように無知で、怒りやすく、凶暴な女、つまり彼が労働者階級のほとんどの女に見出した否定的な性質をすべて持ち合わせていた。そうした妻との結婚生活が厄介な状況の中で書いた『渦』(*The Whirlpool*, 1897) において、ギッシングは未知の分野として有閑階級に所属する社交界の人々を扱った。そして、女性解放への要求が高まり、男性の役割がますます不明確になっていた時代における結婚の問題に焦点を当てている。イーディスとの間には二人の息子が生まれていたが、彼女は結婚して数年後に精神異常の兆候を示し始めていた。最初の妻ネルの時と同じように、ギッシングは短気を起こして家庭を混乱させるイーディスと別居し、やがて妻が保護されて精神病院に収容されたことを知ることになる。

一八九七年九月、ギッシングは三度目のイタリア旅行に出発し、それが彼とイーディスにとって今生の別れとなった。この旅行によってギッシングはノンフィクションの分野に進出することになる。一つは彼が子供時代から愛読していた先輩作家についての批評的研究『チャールズ・ディケンズ論』(*Charles Dickens: A Critical Study*, 1898)、もう一つは南イタリアの日常生活を絵画的に描写した周遊記『イオニア海のほとり』(*By the Ionian Sea*, 1901) である。

一八九八年四月中旬にイギリスへ戻ったギッシングは、イングランド南東部のサリー州にある市場町、ドーキングに家を借りて一人暮らしをしながら執筆を再開した。父親と同じ肺の病気の悪化による健康の不安とは逆に、作家としてのギッシングの晩年に関しては、金銭的な不安が薄らいでいた。折しも、その年の六月に、ガブリエル・フルリ(Gabrielle Marie Edith Fleury, 1868-1954)というマルセイユ港の税関所長の娘から、『三文文士』の翻訳許可を求める手紙が届いた。ギッシングより十歳以上も若かったフランス人の彼女は、流暢な英語に加えてドイツ語とイタリア語にも通じ、彼が今まで結婚はおろか交際すら諦めていた中産階級の洗練された知的な女性であった。翌九九年の春、彼は離婚も正式の結婚も約束できないまま、彼女とその母親とともにパリで暮らし始めることになる。しかし、一九〇二年になると、弱った肺の養生のために温暖な気候の地、スペインとの国境に近いフランス南西端の漁港町、サン・ジャン・ド・リューズに転地した。

最後の作品群としては、ロシア文学に通暁していたギッシングが十八世紀のロシアで兵役を拒否した「霊の戦士」と呼ばれるドゥホボル教徒の平和主義的な信念をイギリス帝国主義に対する解毒剤として示した『命の冠』(*The Crown of Life*, 1901)、進化論を政治問題や社会問題に適用することを攻撃した喜劇的な作品『我らが大風呂敷の友』(*Our Friend the Charlatan*, 1901)、架空の人物に託して胸に浮かぶ様々な思いを春夏秋冬に分けて書いた回想録のエッセイ集『ヘンリー・ライクロフトの私記』(*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903)がある。このエッセ

イ集はイギリスで人気を博しただけでなく、鴨長明の『方丈記』（一二一二）や吉田兼好の『徒然草』（一三三一）のように名利の巷を離れ、もののあわれ、幽玄、わび・さびの伝統を持つ日本人の心の琴線に触れる随筆として、日本でも昔から愛読されている。

一九〇三年の夏、ギッシングは暑気を避けるために海岸から離れたピレネー山麓のサン・ジャン・ピェ・ド・ポールに引っ越し、最後は北隣の村イスプールでガブリエルと一緒に暮らしていたが、すでに慢性の肺気腫で弱っていた肺の病気（直接の死因は心筋炎）で、肺充血で死んだ父親の三三回忌の日と同じ一二月二八日（月曜日）の午後一時一五分に息を引き取った。ギッシングはサン・ジャン・ド・リューズにあるイギリス人の共同墓地に埋葬されている。

ギッシングの死後に出版されたものとしては、ユスティニアヌス帝の治世中の六世紀イタリアを舞台にした彼の唯一の（未完の）歴史小説『ヴェラニルダ』(*Veranilda*, 1904) と、社会階級を落として雑貨屋になる主人公の諦めの境地が、恋愛、芸術、商業といったギッシングの常用するテーマと絡めて、軽いユーモラスな筆致で描かれる『ウィル・ウォーバートン』(*Will Warburton*, 1905) がある。

ギッシングは生涯に二二冊の長篇・中篇小説に加えて、随筆集、旅行記、批評書を著しただけでなく、生活費を稼ぐために百以上もの短篇小説を書いているが、短篇小説のほとんどは『人間がらくた文庫』(*Human Odds and Ends*, 1898)、『蜘妹の巣の家』(*The House of Cobwebs*, 1906)、『境遇の犠牲者』(*A Victim of Circumstances*, 1927)、『小話小品集』(*Stories and Sketches*, 1938) に

まとめられている。

＊　＊　＊　＊　＊

より詳しいギッシングの生涯と作品の解説については、訳者が編集した以下の二冊の研究書（絶版）がＰＤＦ版として一般公開されているので、関心のある読者諸氏に利用していただければ幸いである。

『ギッシングの世界：全体像の解明をめざして――没後一〇〇年記念』（英宝社、二〇〇三年一二月）http://victorian-studies.net/gissing-no-sekai.html

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化――生誕百五十年記念』（溪水社、二〇〇七年一一月）http://victorian-studies.net/gg-150.html

【作品について】

ギッシングの祖父はつつましい靴職人だったので、彼の父親が薬剤師として地方の典型的な下層中産階級の人間になれたのは、たゆまぬ努力による独学と自助の精神のおかげであった。この父親は秀才だったギッシング少年に高等教育を通して中産階級の上層まで出世させたかったが、息子が十三歳の時に亡くなってしまった。それ以後、ギッシングは常に貧困に苦しめられ、街の女のために犯した罪で高等教育から締め出され、アメリカを放浪した後にロンドンへ出て作家となってからも、スラム街に近い安い下宿で生活せざるを得なかった。しかし、そうした生活によってギッシングは労働者階級の貧民たちの惨状を冷徹な眼で観察できるようになり、その実体験は彼の初期作品群における自然主義的な描写に大きく貢献した。このような描写は人生や生活の暗い面を暴き出すために娯楽性に欠け、ギッシングが敬愛した先輩作家であるディケンズのユーモアや笑いにあふれた写実主義とは違って作品の売れ行きにつながらず、彼の貧困生活は長く続くことになった。

一般に、ギッシングはヴィクトリア朝後期の自然主義作家で、その小説は悲観主義や運命論に支配された陰鬱なトーンの作品ばかりだと思われている。しかし、『チャールズ・ディケンズ論 —— 批評研究』（一八九八）やロチェスター版ディケンズ全集の各作品に寄せた序文から

なる『不滅のディケンズ』（一九二五）を著したギッシングは、どの小説にも喜劇的息抜きとしてディケンズ的な笑いやユーモアをちりばめている。ギッシング研究の第一人者であるピエール・クスティヤスは、評伝（*The Heroic Life of George Gissing*, Pickering, 2011-12）の中で「基本的にギッシングは楽天家で理想主義者である。若い頃の生活で心が荒廃し、四十歳の頃には誰よりも厳しい運命の処遇を受けて幻滅を味わったが、暗黒時代においても生きる意欲を完全に失うことはなかった。一知半解の批評家たちは彼の小説の陰鬱性を得々と語っているが、作品の全部が一様に陰気臭いというわけではない」と喝破している。アメリカに逃避した若かりし頃のギッシングが書いた短篇の中には、悲観的要素がなく、主人公の勘違いや軽挙妄動などによる喜劇的な作品が少なくない。彼は最初から自然主義作家だったわけではないのである。また、中期の『下宿人』や『都会のセールスマン』、後期の『命の冠』や『我らが大風呂敷の友』や『ウィル・ウォーバートン』を読んで、読者が暗澹たる気持ちになることは決してない。

今回ここに訳出した『下宿人』は、一八四八年設立で九〇年代に国際的な出版社となっていたカッセル社のために、九五年三月二八日に小説家・出版者のペンバートン（Max Pemberton, 1863-1950）がギッシングに執筆を依頼した中篇小説である。その年の秋に原稿を渡す約束がなされ、七月初めにはタイトルも決まって、途中で何度か中断したものの、わずか二週間で書き上げられた。出版社も非常に満足した『下宿人』は、ギッシング作品の中でもっとも喜劇的要素が濃い小説である。

＊　＊　＊　＊　＊

『下宿人』の舞台はロンドン郊外のサットンである。初期作品群の最後の小説『ネザー・ワールド』を脱稿したギッシングは、一八八八年九月末に少年時代からの憧憬の地であったイタリアへ、そして翌年一一月には自分の教育の基礎工事を仕上げるためにギリシャへの旅に出た。多くの批評家が指摘するように、ギッシングがロンドンを離れた二回の大陸旅行は、彼の関心が労働者階級から中産階級へ移ったという点で、彼の生涯における大きな転換点となっている。一八八〇年代の初期作品群は、その大半が労働者階級の悲惨な生活に焦点を当てたものだったので、このようなロンドンから温暖な気候の地中海方面への脱出は、彼の気持ちを楽観的、審美的にしたようである。

『ネザー・ワールド』の舞台はロンドンの中心に近いクラーケンウェルのスラム街であったが、そこから五年後の一八九四年に出版された『女王即位五十年祭の年に』では、舞台が南ロンドンの郊外キャンバーウェルに移っている。それは、労働者階級の生産に重きが置かれたロンドン内部の地区から、キャンバーウェルのブリクストンにおける中産階級の消費に焦点が当てられた地区への移動であった。貴族や大地主といった上流階級の人々がカントリー・ハウスと呼ばれる広壮な屋敷を構えた田舎と違い、かつての郊外は都市生活のもっとも堕落した部分（賤業者や犯罪者）を遠ざけるための場所であった。昔の都市警察には原始的な監視能力しかなか

ったので、郊外が無法地帯になっていたことは想像にかたくない。このような郊外は十八世紀以降にロンドンの実業家や経営者の別荘地となり、産業革命後は激増したロンドンの労働者たちと距離を置き、自分の富を物理的に認識したい新興の中産階級の人々が移り住む理想の場所となった。キャンバーウェルは、十八世紀末には人家がまばらな寒村にすぎなかったが、百年後には人口が約二五万となり、ロンドンの中産階級が新たに住むための郊外の縮図と見なされるようになっていた。そうした郊外のスプロール現象は一八六〇年代から急速に発達して八〇年代にピークを迎えている。郊外(suburb)は「都会(urb)」に「上位の(super-)」とは反対の「下位の(sub-)」という接頭辞が付いた言葉である。『オックスフォード英語辞典』によれば、その形容詞(suburban)の定義の一つは「郊外の住民の特性として、あまり良くない礼儀作法を有する」というネガティブなものになっている。それは「虎を画きて狗に類す」ような下層中産階級に対する上の階級から見た揶揄や嘲笑の言葉である。『下宿人』でもマムフォード夫人のような「郊外(サバーバン)に住む中流家庭の奥さまであれば、誰でも自慢するような応接室」について「安ピカ物が横行する今の時代、当世風の家具調度品を備える場合の費用が少なくてすむ」(第九章)点を強調しているギッシングは、明らかに上の階級からの視線で下層中産階級を諷刺的に描いている。

ギッシングは、二回目の大陸旅行から戻った一年後、一八九一年一月にロンドンの喧騒から逃れてデヴォン州のエクセターへ引っ越していたが、九三年六月になるとロンドン郊外のブリ

クストンに移っている。しかしながら、郊外に対する彼の見方はすでに好意的ではなくなっていた。ブリクストンでの生活はロンドン中心部を支配するイデオロギーが郊外にも浸透していることを彼に認識させただけであった。鉄道網や通信網の発達によって都市の文化や物の考え方が郊外まで伝わっていたからである。英国支配下の平和（パクス・ブリタニカ）に支えられた一八五〇年代、六〇年代の「ヴィクトリア朝大好況期」に富裕化して郊外に住み始めた新興の中産階級の人々もまた、ロンドン中心部の労働者階級と同様に物質主義、商業主義、資本主義といった目に見えない強力な社会・政治・経済思想に従属していたのである。

サバービア（郊外生活特有の様式・風俗・習慣）の現実は、ギッシングの処女作『暁の労働者たち』の洗練された知的な女性、ヘレン・ノーマンがロンドン郊外のハイベリーで送るような理想化された半田園的な隠棲生活とは違い、都市に集中する産業的・経済的な発展の重視や精神的な（芸術志向の）生活の軽視に支配されていた。これが『女王即位五十年祭の年に』の中心テーマとして郊外生活の空虚さに焦点が当てられた理由である。その証拠に、キャンバーウェルは世間体にとらわれた中産階級の虚栄と偽善がはびこる郊外として描かれており、とりわけ下層中産階級に対するギッシングの反感が見て取れる。郊外が汚濁の都市から分離されているという考えは自己欺瞞的な虚構にすぎないのだ。翌年に出版された『下宿人』もまた同断である。マムフォード夫妻は郊外に住みながらもロンドン時代の思考から抜け出せず、世間体を最優先する二人の滑稽な姿が揶揄と諷刺を込めて活写されている。

＊　＊　＊　＊　＊

『下宿人』のマムフォード氏はロンドン郊外からシティーまで列車で通勤している事務員(office clerk, pen driver/pusher)である。イギリスの事務員は、ロンドン万博が開催された一八五一年に一四万人ほどで、労働人口の四十人に一人にすぎなかったが、六十年後の一九一一年には約七倍の百万人に達していた。その主たる原因は、ヴィクトリア朝後期になると、資本主義経済と国際貿易の発達によって金融・財政が拡大し、交通網と通信網の発展によってビジネスにおける事務作業が激増したことにある。そうした流れの中で、一八七〇年を嚆矢とする一連の初等教育法の恩恵を受け、向上心のある労働者階級の若者たちが事務員となって下層中産階級に参入していた。ギッシングの短篇小説には、そのような教育のおかげで事務員となった登場人物が少なくない。『下宿人』と同じ一八九五年に出版された「地の塩」(“The Salt of the Earth”)の主人公トマス・バードは、事務員としての給与はそこそこあるのだが、給料日でも自分が買いたいものを買えないでいる。それは、作品の題名が示すように「堅実で善良な人」(Matt. 5.13)として周囲の人間にいつも金をあげたり貸したりしているからである。彼は郊外のキャンバーウェルに下宿しているが、このように金銭的な余裕がないので遠距離を歩いて通勤している。当時の事務員の多くは、中産階級の人間として世間を気にした体裁のために、黒のスーツなどで外見の維持に努めたり、キャンバーウェル、ブリクストン、クラパムあ

たりの郊外で家を借りたりしており、それらに給与の多くを費やさざるを得なかった。こうした体面維持のために部屋の一部を労働者に又貸しする事務員も少なくなかった。しかし、熟練工のように収入が多い上層労働者階級の人間に貸した場合などは、教育を受けて教養もある貸主がリスペクトされないことも多かった。同じ下層中産階級の事務員であっても、郊外の家に下宿して徒歩で通勤するトマス・バードと一戸建て住宅を借りて列車で通勤するマムフォード氏では相当の収入差があるものの、「リスペクタビリティ（respectability）」が強迫観念のようになっている点では、どちらも大差がない。

リスペクタビリティは対応する適切な日本語がない。辞書的には「ちゃんとしていること、恥ずかしくないこと、見苦しくないこと」、「体面や世間体を繕うこと、見栄を張ること（keeping up appearances）」を意味する。言い換えるならば、それは文字通りの意味とは反対の「尊敬できない」という皮肉的な意味を暗示する言葉である。ヴィクトリア朝後期においては、特に下層中産階級において「上品ぶった言動（prudery）」、つまり内面と外面の乖離（中身がないのに上の階級に従って外見だけを真似ること）に対して、時には冷笑や侮蔑を交えて使用されることが多い。例えば、『下宿人』の原題（*The Paying Guest*）は、内実は家賃を払っている「下宿人（boarder）」なのだが、表向きはマムフォード夫妻の「お客（guest）」として丁重にもてなされるという、いわゆる撞着語法（オクシモロン）による婉曲表現になっている。それは、「下宿人を置いてるなんて噂されちゃ、困るわよ」（第一章）と不安がるマムフォード夫人に対し、夫が「最近よくある

類の契約だ」と答えているように、隣人たちの目を意識して見苦しさを糊塗した自己欺瞞的な表現である。当時は同じ中産階級でも上層と下層には埋めがたい径庭があり、このような下層中産階級の人間の言動は常に上層中産階級の笑いの対象となっていた。

＊　＊　＊　＊　＊

イギリスでは、産業革命が始まる直前にジョージ三世が即位した一七六〇年から、彼の晩年の発狂によって摂政時代が終わる一八二〇年まで、国王の絶対主義的な圧制に伴う暴力的な社会風潮が支配的であった。この六十年間、産業革命の負の遺産である貧困の結果として犯罪が多発し、その防止のために血の法典によって死刑になる罪状が激増した。しかし、摂政時代が終わった頃からナポレオン戦争後の不況は徐々に回復して犯罪も減り、暴力的な社会風潮はやわらいで行った。とはいえ、こうした暴力は実際には抑圧されて表面的に見えなくなったにすぎない。換言すれば、他者に対する抑圧としての暴力は、ヴィクトリア朝を経済的に支えて文化の担い手となった中産階級に関して言えば、彼らを特徴づけるリスペクタビリティという概念に暗示されるように、世間体のために抑圧されたものの、その抑圧によって鬱積した暴力は時と場合によって形を変えて表面化することがあった。『下宿人』のマムフォード夫人は、中産階級で理想化された「家庭の天使」としてリスペクタビリティを意識した生活を送っている

が、デリック嬢とその恋人コッブが引き起こした火事によって自慢の応接室を破壊された際には、リスペクタビリティを完全に忘れて憤怒の形相になり、労働者階級の人間のように逆上してしまう。ここでギッシングが揶揄しているのは、暴力的な激しい感情の抑圧によって維持されている、そうした下層中産階級のリスペクタビリティの脆弱さに他ならない。

リスペクタビリティが強迫観念化しているのは、中産階級の上層を模倣しようとする下層の人間に限ったことではない。仕事の関係で上の階級との接触が多い労働者階級の上層もまたリスペクタビリティにとらわれていた。デリック嬢の恋人コッブは、電灯会社と取引関係がある電気技師であり、熟練労働者として給料も高く、マムフォード家の火事に対してもちゃんとした銀行宛ての小切手で弁償できるほど経済的に恵まれている。このように労働者階級の約一割を占めていた、いわゆる「労働貴族」は労働組合や友愛協会の一員であることが多かった。彼らは自助の精神や向上心が強く、無知で不品行な一般の労働者との差異を常に意識し、喜怒哀楽の抑制に努める傾向があった。実際、コッブは本当の気持ちをちゃんとした手紙で書けるし、結婚後は「上品そうな道路沿いにあって、恥ずかしくない地区にあるような家」（第六章）に住みたいというデリック嬢に同調している。また、結婚の合意に達した時も、他人が近くにいるからという理由で声を落としているし、マムフォード夫人を訪問した際も、相手から誘われる前に握手を求めるような、つまり社会的な劣等感をうっかり態度に表すようなこともしていない。しかし、相手が上の階級でも気に入らなければ、作者が「次第にイライラし始め、激し

い感情がうごめいていることが筋肉の動きを見ても分かった」（第三章）と述べているように、上層労働者階級のコッブも、下層中産階級のマムフォード夫妻と同様に、その浅薄なリスペクタビリティは常に揶揄の対象となる。

同じ労働者階級でも、コッブより下の階層から一足飛びに中産階級の人間となったデリック嬢の母親、ヒギンズ夫人はかつて村の酪農場で乳しぼりとして働いていた美少女のようであったと記されている。彼女は、結婚直後に夫のデリックが死んで未亡人となってしまったが、その美貌と野心とで成り上がりのヒギンズ氏と再婚し、現在のような金銭的に何不自由ない生活を送っている。再婚して中産階級に仲間入りした彼女は、夫が兄弟商会を経営していることもあって、マムフォード夫妻より社会的地位が高いと思っている。とはいえ、彼女は労働者階級時代と同じように喜怒哀楽が激しく、ロンドンなまりのコックニーの特徴である語頭の /h/ 音が落ちる言語癖や文法的なミスが改善される見込みは皆無であり、作品中の彼女のリスペクタブルな言動はすべて滑稽で読者の失笑を買ってしまう。

このようなヒギンズ夫人の娘、デリック嬢がマムフォード家に下宿したかった表向きの理由は、感情を制御できない点で自分とよく似た母親や義理の姉と実家で衝突していたからである。ギッシングが労働者階級の特質をもっとも明白に示していると考え、作品中もっとも頻繁に描いている精神状態は何かと言えば、それは欲求不満の時に抑圧できず、突如として爆発させてしまう暴力的な怒りである。デリック嬢がマムフォード家で学ぼうとするリスペクタビリティ

――中産階級が得意とする「自分の性格を意識して偽装すること」（第六章）――を自家薬籠中の物にできるか否かは、ひとえに怒りの抑圧にかかっているのだが、それはいつも徒労に終わってしまう。『下宿人』の喜劇性を高めているのは、そうした人間の愚かな悪あがきである。

デリック嬢の最大の野心は、中産階級の家庭で行儀見習いをしながら、ビルトン氏のようなシティーに勤める善良な若者と結婚することであった。しかし、彼女はそうした野心を簡単に捨ててしまい、性的に魅力のある労働者階級の屈強な美男子、コッブとの結婚を最終的に選んでしまう。結婚後に間違いなく暴力をふるわれるという確信がありながらも、「めっちゃ素敵な男に見える、そんな時がある」（第二章）彼から離れることができないのだ。そこには教育や環境といったものが労働者階級の女性にとって何の意味を持たないというギッシングの信念がある。ギッシングの最初と二度目の結婚相手がどちらも、性的な欲求を制御できずに手を出してしまった下層階級の無教養で気性の激しい女だったことを考えると、それは実体験から生まれた信念だったと言ってよい。

＊　＊　＊　＊　＊

ヴィクトリア朝では性に関する表立った言動がタブー視されていたが、裏では売春や性風俗といった悪徳や乱倫が隆盛を極めていた。ギッシング自身の実生活で証明されていることであ

るが、一般の人間が性的欲求を完全に抑制できないことは、彼の作品では浅はかなリスペクタビリティの背後でしばしば暗示される。例えば『下宿人』のマムフォード夫妻の場合を見てみよう。この夫婦には二歳になる子供がいるので新婚時代のような甘い雰囲気は感じられない。そのような状況で、お嬢さまが郊外のリスペクタブルな中産階級の家庭に下宿したがっているという新聞広告に、マムフォード氏が注意を引かれたことを考えてみると、「この新聞広告には同時に別の意味で彼の興味をそそるものがあったのかもしれない」（第一章）と作者がほのめかしているように、ここには単なる金銭的利益とは異なる理由が読み取れる。マムフォード氏が中産階級にとって重要な隣近所に対する世間体も忘れて下宿人を置きたい別の理由とは何か。それは、彼が自己欺瞞的に言っているように、出勤して家にいない時に孤独な「妻が話し相手を持つこと」ではない。マムフォード氏はデリック嬢に「人を愛する能力がない」と分かっていても、「お嬢さまのことを好きにならずにおれなかった」し、「彼女の眼がなかなか脳裏から去らなく」（第五章）なっている。夫婦生活に倦怠感が漂う中で、若い美人と一緒に暮らしたいという彼の邪な願望を等閑に付することはできないだろう。

同じ下層中産階級でも若かりし頃のギッシングのように非常に貧しければ、街の女に手を出すしかなく、実際に彼が最初の妻ネルから感染したように、そこには常に性病の危険があった。上層中産階級の裕福な紳士であれば、「家庭の天使」としての妻とは別に、家から離れた秘密の世界で愛人／妾（めかけ）をかこうことが当時は珍しくなかった。事実、ディケンズは家庭の天使とは

言えない妻キャサリンと別居し、二七歳も離れた若い女優エレン・ターナンをかこっていた。ヴィクトリア朝における性的な道徳観は、同棲や不倫をした女性に対しては「家庭の天使」と逆の「堕ちた女」の烙印を押し、男性に対しては性的な自由を許すというダブル・スタンダードであった。マムフォード家に下宿するデリック嬢は若くて魅力的な美女である。ところが、彼女の下宿によって神聖な家庭生活が乱されて我慢できなくなったマムフォード氏は、「こんなことが長く続くようじゃ、ロンドンに下宿を借りたくなる」（第七章）と言っている。この発言から、単なる現実逃避の願望とは別に、別居による自由さと性的な自由さとの関係を読み取るのは牽強付会であろうか。

面白いのは、妻のマムフォード夫人にも、似たような願望が見られる点だ。デリック嬢が悪口を言った恋人コッブの話を聞くと興味を覚え、お嬢さまは相手の欠点を誇張しているとか、「そんな悪漢であるはずがない」（第二章）とか、自己欺瞞的な思いに駆られ、この男に会ってみたいという願望を夫に吐露している。炭鉱夫の息子である猟場の番人に魅せられて子を宿す上流階級のチャタレー夫人のような、そんな実行力はマムフォード夫人には望めない。とはいえ、彼女は「嫉妬を超越できるほど理性的な人間」ではないので、夫に対するデリック嬢の影響力を感じた際には、「近くのテーブルに置かれた花びんから盛りの過ぎた花を何本か抜き始めた」（第六章）ように、その隠微な動きには性的な禁欲とフラストレーションが見え隠れしている。ギッシングはリスペクタビリティという名の検閲を通して下層中産階級の人々の滑稽

な、しかし心理的には非常に興味深い行為的表出を様々な形で描いてくれる作家である。

カルヴァンの神学思想から派生した英国のピューリタニズムの世俗内禁欲は近代資本主義社会の形成にとって原動力となったが、そうした中産階級の自己欺瞞的な禁欲主義は、抑圧的な性道徳、厳格な倫理観、上品ぶった偽善、拡張する国力から生まれる島国根性的なプライド・自己満足・楽天主義、そういった否定的な属性を内包しており、後世に「ヴィクトリアニズム」として批判されることになる。このような中産階級の偽善的な価値観や考え方を日常の生活で如実に示しているのが、外面と内面の乖離を生み出すリスペクタビリティに他ならない。中産階級を扱ったギッシングの中期以降の作品群で、そうしたリスペクタビリティが揶揄や軽侮の対象となり、もっとも喜劇的に描かれた作品が、この『下宿人』なのである。

二〇二四年立春　名古屋

松岡光治

訳者紹介
福岡県出身，名古屋大学大学院人文学研究科名誉教授
【主な著訳書】*Dickens and the Anatomy of Evil*（編著，Athena Press, 2020 年），『ディケンズとギッシング』（編著，アティーナ・プレス，2018 年），『ギッシング初期短篇集』（編訳，アティーナ・プレス，2016 年），*Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell*（編著, Osaka Kyoiku Tosho，2015 年），『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（編著，溪水社，2007 年），『ギャスケル短篇集』（編訳，岩波文庫，2000 年）.

ジョージ・ギッシング 作
下宿人――お嬢さまの行儀見習い

2024 年 3 月 1 日　第 1 刷発行

訳　者　松岡光治（まつおかみつはる）
発行者　中島信彦
発行所　アティーナ・プレス
〒 112-0011 東京都文京区千石 4-33-18
℡ 03-3946-2117
http://www.athena-press.co.jp/
印刷・製本　エープリント
〒 456-0003 名古屋市熱田区波寄町 20-14

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
ISBN 978-4-86340-374-1　Printed in Japan